

弟くんがラスボスルート

潤雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死の運命に襲われた少年が再び生を得たのは、F a t e の世界
幼き約束とツギハギの心を抱え、彼は聖杯戦争へと 身を投じる。
居るハズの無い破綻者は聖杯戦争に何を見出だすのか
食い違う理想を目指す兄弟の道行きはいかにして交わるのか…

オリ主転生モノです。主人公は衛宮士郎の弟になります。

以前は、衛宮創名の運命と言うタイトルで連載してました。

皆様のお陰で完結出来ました。番外編更新中ですが、本編とは空気が違うのでご注意下さいm (´`´) m

目次

第五次聖杯戦争

始まりの崩壊	1
異なる約束―定められた道行き―	6
補足説明 1	12
衛宮創名の日／裏	14
衛宮創名の日／表	17
聖杯戦争開催／裏	21
聖杯戦争開催／表 1	25
聖杯戦争開催／表 2	29
魔術師の会合	31
去り行く日常／表	37
補足説明 2	41
去り行く日常／裏	42
魔術師の夜	47
V S 騎兵	51
喰らい合う世界 1	56
喰らい合う世界 2	60
無限の剣骸《unlimited blades junk》	66
英雄エミヤ	71
補足説明 3	76
創名の工房 1	80
創名の工房 2	83
魔術の英雄 1	88

魔術の英雄 2	91
動き出した策略	94
夢 1	99
夢 2	102
クランの猛犬 1	107
クランの猛犬 2	110
正義から遠き二人	114
王と誓者	119
補足説明 4	125
前哨戦、もしくは前兆 1	128
前哨戦、もしくは前兆 2	131
前哨戦、もしくは前兆 3	137
補足説明 5	142
キリツグの仔 1	144
キリツグの仔 2	148
『最終戦開幕』	156
『聖杯問答』	161
蚊帳の外	166
終結	169
エピソード	177
蛇足あるいはネタバレ	180
番外、後日談	
義妹ちゃんがラスボスルート 1	184
番外編用キャラ設定	190
義妹ちゃんがラスボスルート 2	194

義妹ちゃんが (以下略 : 3) 虎の襲撃
義妹ちゃんが (以下略 : 4) 裁け凜

第五次聖杯戦争 始まりの崩壊

右腕に走った激痛で飛び起きる。

視界に入るのは、電灯が消えた白い部屋とわずかな明かりを灯して動く機械、耳に入るのは自身の心音とリンクしたピ、ピ、という音。

一瞬、自分がどこにいるかを忘れ、右腕の痛みで自分が入院していること、ここが自分への病室であることを思い出す。

痛む右腕を掴もうとした左手が空を切る。

「……………右腕、無いんだった。」

フラツシユバックのように浮かぶのは、事故の瞬間と右腕と右足に襲いかかった熱い激痛。

その事故によって、右腕の肩から先、右足の膝から下を切断し、こうしてベッドで安静にしては、それを幻肢痛に妨げられると言う生活を送ることになった。来月には、義手と義足が届いて、本格的なりハビリが始まる。ゆつくり落ち込んでいられるのも、あとの少しの間だけだ。毎日見舞いに来ては、早く良くなれと言う友人達がりハビリを急かすのが予想出来て、小さく笑う。

彼らに寝不足の顔を見られたら、ここに持ち込んだ漫画やゲームを取り上げられるかもしれない。

そう思つて再び眠ろうとしたとき、ソレは現れた。

病室の白よりも白い服、石膏のような滑らかで生気の無い肌、不吉さを感じる程美しい顔、人の形だが人ではない何か気が付いた時にはベッドの横に立っていた。

「正確にはヒトが我々の形だが我々ではない、なんだけどね」

男か女かも分からないソレは、どんな楽器よりも美しい声でそう言った。

「突然の来訪だ。もてなしの準備が出来てないぐらいには目をつぶろう。塵芥のような君よ。」

言っている内容は酷く身勝手に失礼極まりないが、何故かソレがそ

う言うのは当然のような気がして、何も言えなかった。

「さて、当然察していると思うけど、僕は神だ。」

神のくだりで、ソレが現れた衝撃で麻痺していた思考がもとに戻り、精神科の患者がどうやってかは分からないが病室に入って来たのだと判断し、ナースコールに手を伸ばす。しかし、

「ごめんよ。塵芥のような君が、愚かではないと思うなんて僕がどうかしてみたいだ。」

そんな言葉と同時に体が動かなくなり、それは出来ないこととなった。

体が金縛りにあったように動かず、身じろぎも出来なくなり、やつとソレに対する恐怖が生まれた。もし動けたら、全身が震えていただろう。

「……お前は何だ？」

「さっき言っただろ？神だよ。」

唯一動く口から発した言葉は、心底呆れたようなため息の後、一言で返された。

「次に君が言うのは、〃何しに来た？〃かな？それは簡単、君の願いを叶えに来たんだ。」

願い？そう聞いて、思わず自分の右腕が〃有った〃場所を見る。しかし、神と自称するソレがこちらの考えを読んだように首をふる。

「ダメダメ、実は君はこの後死んじゃうんだ。だから、願いは来世ではこんな能力が欲しいみたいなの限定だよ。この後の死の回避も出来ない。」

嬉しそうにそう言って、ソレは促す。

「さあ、言っつてご覧。君が好きな漫画やゲームの能力でもかまわないさ。」

その時、ソレの言葉を信じる信じないの前に言っつて見ようという考えが浮かんだ。

「無限の剣製、Fateのアーチャーの能力が欲しい」

言っつたとたんソレの笑みが禍々しい物になる。その笑顔に、どうしてか〃口は災いの元〃を書き初めとして書くことを強制してきた悪

友の顔が浮かんだ。

「アハハッ、君ならそう言うと思ったよ。」

ソレは笑いながら何か呟き、次の瞬間世界が“捲（めく）れた”
世界が一瞬で姿を変えた。

そこは砂だらけの世界だった。どこまでも続く青空と白い砂丘、いたるところに様々な絵が存在し、風に吹かれては砂となり、砂丘に落ちては再び絵に組あがる。良く見れば描かれているのは友人や家族、彼らと一緒にいる自分だ。見たことも無いのに何故か懐かしい、そんな“世界”だった。

「(´)は……?」

「君の精神世界さ、固有結界とも言う。まあ、ただの人間じゃ心象風景を一定にするなんて出来ないから、僕がサポートしてるだけだね。」
砂丘に倒れて呆然と呟けば、砂丘の砂より白いソレが愉しげに言う。

「風化と流転、流され、自身の意思を持ってない君の世界としてはこれ以上なくふさわしいね。」

ソレは馬鹿にするように言う、だがその顔は遠足前の子供のような、何かを楽しみにする無邪気な笑顔だ。

「愉しいのはこれからだよ、ほら “unlimited blade works”」

ソレが宣言したのは赤い弓兵の世界の名、正義の味方を目指した英雄の宝具。

青空が日が落ちたように紅く染まって行く。砂丘に、散らばる絵を貫くように剣が刺さる。絵を貫く剣は砕け、風化するように欠片となり風に流されて消える。

「う、あああああ!!!」

事故の瞬間より強烈な痛みが体を駆け抜ける。身体の奥底から引き裂かれ、それを溶接されるような、不快さと熱を伴う激痛。

「アハハハハッ、心象風景を具現化する固有結界を使うなら、心象風景が必要だろうか？他人の心象風景を移植なんてしようモノなら、ご覧の通り世界同士が喰らい合い、崩壊する。」

楽しくてしようがないと言うように声をあげるソレを睨み付ける。悪態も付こうとしたが叫んだことで喉が裂け、血を吐くことしか出来ない。

「嫌だなあ、対価なしに力が手にはいる訳無いじゃないか。どうせ、君は死んじやうんだし、僕の退屈しのぎになつてくれよ。」

ソレが笑いながら言っているが、もう何も分からない、激しい痛みの中で、自分の魂と言うべき物が軋み、崩壊していくのを感じる。壊れていく

コワレテイク

こわれていく

こわれ……………てい

……………く

なら、

修復（なおさ）なきや

砂になり、崩壊していた世界が砂の城を作るように集まり、再び世界を構成していく。

剣に裂かれていた絵は天に昇り、ステンドグラスのように空を彩る。剣は碎け、破片は砂丘の砂になり、白い砂丘は煌めく銀の砂漠へ姿を変えた。

「……………崩壊した世界が修復された？否、無限の剣製を取り込んで再構成された？」

風化と流転ではなく……………」

ソレは、今までの笑いが嘘であるかのように眉をしかめ不機嫌そうに呟く。

どういうことか分からないが、ソレが嫌がることが出来たようで気が晴れる。

痛みが消え、代わりに右腕と右足が銀の砂で作られ、立ち上がれるようになる。さつき言えなかった悪態を吐いてやろう。

立ち上がり、以前と異なる右腕でソレを指差す。

「ばああか」

口にしたとたん、空気が変わったのを感じる。同時に、新年の挨拶

のときに「今年はこれな。」と、
「雉も鳴かずば撃たれまい」と書かれた
手本を持って来た悪友が頭の中で、「だから、言ったのに」とため息
を吐いた。

「良くも言ってくれたな、塵芥があ!!」

ソレは美しさをかなぐり捨て、顔を醜悪に歪めそう叫んだ。

瞬間、命が消えるのを感じた。

目を覚ました場所は地獄のような場所だった。平和な街だっただ
ろうが、今では焼け落ち、死に逝く者と死者で溢れている。

自分だけでもと助けを求める声をあげる人、子供だけでもと地面を
這い赤ん坊の亡骸を差し出す人

全てを無視して何かに導かれるように歩く、生きようとする人を見
捨てる事より、手足の左右で肌の色が違う事の方が気になる自分に寒
気を感じながら、フラフラと歩き続ける。

やがて、目的地に着いたような達成感を得て、周りを見渡す。そこ
で、少年を抱きながら涙する男を見つける。

何故か、その男の涙は尊い物に見えた。

まるで、人間以外に勘違いされているのが堪えきれないと言うように、少年は力いっぱい答え。直後、その場に倒れ伏した。

「あ、夢か」

目を覚ますと最近見慣れた病院の天井が目に入り、ほっとため息を吐く

「神とかないわ、いや、最後とかFateだったし、小説の読み過ぎかな？」

あははと笑い、右腕で頭を掻く。にしても、あの夢あの後どんな展開になるのか少し見たかったかもしれない。きつと突拍子もない超展開が有っただろう。

想像すると笑いがでる。こんな愉快的気持ちになったのは、事故後初かも知れない。

「あれ？」

さつき自分は「右腕」で頭を掻いた気がする。

グーパー、動かしている感覚がある。右腕を見る、そこには作り物のような白い腕が有った……………

「夢じゃ、なかった？」

咄嗟には気付かなかったが、病室も違う。

ベッドは大きいし、部屋自体も広い。そこでまた違和感、視界に入っている自分の体が縮んでいる気がする。というか縮んでいる。手のひらが、子供特有の紅葉のお手てだ。

一回深呼吸して、その直後に子供のかん高い声で悲鳴が響く、喉が痛くなってからその悲鳴は自分が上げている物だと気付いた。

悲鳴と言うナースコールによって召喚された医師と看護師による。診察を受け、記憶障害と言われた。確かに、どこに住んでいたのか？とか、答えられなかったし、何より創名（きずな）君と呼ばれて、誰？と言ってしまったのが決定打だった。

あわてて否定してもますます墓穴を掘り、大火災以前の記憶が無いことになったのだ。お兄さんと同じね、と言われたが一体誰のことだ

？もしかしたら、創名と言う名前の少年に憑依したのだろうか？そうだと何故創名君は個室にいる？記憶が正しいなら、火災で生き残った子供は同じ病室に入れられていたはず、そして衛宮士郎となる少年以外は外道神父によって魔力電池として捕らわれる。

そこまで考えたときに感じた不思議な感覚に思考を止める。身体がざわめくような、共鳴する感覚。それは少しずつ大きくなり、「やあ」

衛宮切嗣がノックもせずに入ってきた。片手でドアを開け、右手はくたびれたコートのポケットに突っ込んでいる。

「目が覚めたって聞いてね。元気そうで何よりだよ。」
「…誰ですか？」

フレンドリーな割に背筋が凍るような気がするのは、この生きる事に疲れたような男の所業を知ってるからだろうか？取り敢えず惚けてみるが、目を細められるだけだった。

「どうやって君の戸籍が見付からなくてね。新都に住んでた子供の名前を使わせてもらったんだ。」

……お前のせいとか!?自分の記憶喪失扱いは!ああ、本物の創名君ゴメンねリアル戸籍人の乗っ取りを本意とはいえ、やってしまっ

てと言うか、副音声で、お前がただ者ではないのはわかってんだよ。みたいなのが聞こえるのは、被害妄想だろうか？

士郎を迎えに来たシーンを見た時も思ったけど、あの大火災後でどうやって名前とか調べたのだろうか？

「自分、名前も思い出せないの、創名が名前かも知れないね。」
「そうかい」

そんな思考は置いといて、あくまでしらを切る。切嗣は大変だね、と頷いた。

今、気付いたけど切嗣は病室に入ってから一度も右手をポケットから出していない……意識をポケットに向けると、何故かその中で銃を握っていると確信できた。

あ、何でかは知らないけど殺しに来たんだ。

そう思っていると、切嗣の右手に僅かに入っていた力が抜ける、銃

を放したのだ。

「僕は、衛宮切嗣。突然だけど、僕の子供にならないかい？」
「……」

病院から連れ出して始末する気？と言いそうになったのを堪える。
頭の中で悪友がサムズアップをした。

ここにこのまま居ても、人間牧場逝きだと言う事を思いだし、切嗣に頷いた。

「それは良かった。」

切嗣はそれなら、急いで用意しなくちゃと呟いて、病室から出て行くとし、途中で振り替える。

「そうそう、言い忘れてたけど、僕は……」

「知ってる、魔法使いでしょ？」

士郎を助けてくれた。名言を遮ってそう言えば、切嗣は一瞬毒気が抜かれたような顔をして、その後泣きそうな顔をした。

これが、自分が衛宮創名になった瞬間だった。

自分の外見が衛宮士郎と同じなのに気付いて、再び悲鳴を上げるのはこの十分後のトイレでだった。

衛宮切嗣は、かつての聖杯戦争で拠点とし、自分の帰る場所となった武家屋敷の縁側で息子達と月を見上げていた。

双子の兄弟士郎と創名

始まりは贖罪だった。自分の理想を叶えようとした結果、生じた地獄で唯一自分が助ける事が出来た、自分を救ってくれた少年、士郎。彼を守り、育てる事がせめてもの罪滅ぼしになると思っていた。だが、彼は自分の家族になってくれた。10の為に1を切り捨て、理想の為に自分の大切な人々を犠牲にし、血と呪詛にまみれた自分に人並みの幸せを教えてくれた。

始まりは恐怖だった。地獄の中で普通であった壊れた少年、創名。自分の救いだった士郎と同じ姿であり、彼の側では身体に残留する呪いが活性化して、罪を忘れるなど言われているようだった。それは呪いの泥に触れ、創名の魂が変質してしまった事が原因で、創名からす

れば迷惑な被害妄想だっただろう。しかし、彼もまた自分の家族だった。教えた魔術で呪いに蝕まれた自分の体を治療し、士郎と創名家族と過ごす時間を、イリヤ家族を取り戻す為に足掻く時間を与えてくれた。

自分の罪と贖罪、そして救いの象徴である息子達とも、もうお別れだ。自分はきつともうすぐ死ぬ。

元々、呪いを活性化させる創名と暮らしていたことで、少なかった自分の寿命はますます削られていた。それが今まで生きていられたのは、寿命を削っている原因である創名の天才的な治療のおかげだった。だが、そのマツチポンプももうもたない。

これが、息子達との最後の時間だ。

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた。」

理不尽な運命に弄ばれ、涙する人を無くしたいと思った。がむしやらに頑張つて、犠牲を0にする事は不可能だと悟った。そして、より多くを救う為に少数を切り捨てる作業が始まった。

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ。」

士郎が少し不機嫌そうに聞いてくる。創名は聞いているのかいなのか、空に浮かぶ美しい月を見上げている。

「うん、残念ながらね、ヒーローは期間 限定で大人になると名 乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気が 付けばよかった」

そうだったら、彼らは血の繋がった家族や友人達と、今も平和に暮らせていただろう。

「そっか、それじゃしようがないな」

「そうだね、本当に、しようがない」

後悔しても意味がない。より少数に犠牲を強いて、多くの死を積み上げて来た。それは自分の理想正義の味方とはかけ離れていたが、それでも、救えた人はいたのだ。それを忘れて、届かぬ理想を求めた先があのだ。地獄だ。

言葉が途切れ、月を見上げる。美しく、優しい月だった。

「うん、しようがないから俺が代わりになつてやるよ」

普段と変わらないように士郎は言う。魔術師殺し衛宮切嗣がどんな人間だつ

たかを、何をしてしまったのかを、知らないからこそその言葉だ。いや、もしかしたら知っていても同じ事を言ったかもしれない。

「爺さんは大人だからもう無理だけど、俺なら大丈夫だろ、任せろって、爺さんの夢は俺が現実にしてやる」

無邪気に、けれど真剣にそう言ってくれた。

「何か士郎だけだといつまでも叶わない気がする。」

「なんだよ創名、俺には無理だって言いたいのか？」

「そうじゃないよ。一人じゃ大変そうだから、手伝うって言ってるんだよ。」

月を見たまま、創名が言う。唄うように、誓うように…

「自分が、衛宮創名が衛宮士郎を正義の味方に見せる。」

笑って見せた創名に士郎が照れながら感謝するのを見て、切嗣は心が安らぐのを感じた。

「ああ、そうか…安心した。」

彼らと家族で良かった。そんな思いを最期に、切嗣は安らかに息を引き取った。

錬鉄の英雄の道行きが定められた月の下、もう一人の英雄もまた道行きを定めた。

同じ場所から始まった二人の道、その先如何なる運命が用意されているのか二人はまだ知らない。

補足説明1

衛宮創名（エミヤキズナ）

誕生日：不明

血液型：不明

身長：160cm／体重：54kg

イメージカラー：鋼、銀

特技：破壊、パズル

好きな物：パズル、衛宮士郎

苦手な物：神

天敵：衛宮士郎（絶対に勝てないという意味で）

一人称：自分、俺

型月の世界に近い法則の世界から転生した少年。Fateは、ゲームはプレイしていないが二次などでだいたい知っている。

前世は自称神の暇潰しに巻き込まれなければ、その後発生する火事で死ぬはずだった。

今世の体はアンリ・マユの呪いの泥から作られた士郎のコピー。ホロウでのアンリ・マユの殻としての士郎に別人の魂が入っているイメージ。普通は無理だが、無限の剣製を取り込んだことで可能となった。

近くのアンリ・マユの呪いを活性化させることについて切嗣は魂が変質してそう言う体質になったと判断していたが誤り、実際には元が呪いの泥なので、近くのアンリ・マユの呪いを活性化させる。

魂の影響で右腕と右膝から下がセイバー・オルタのように白い。

魔術特性が治療に適していて、治癒魔術は一人前レベルに使える。切嗣からは治癒魔術を中心に教わり、衛宮の研究記録も引き継いでいるが、理論を知ってるだけで使えない。

性格は明るめで、友人も多いが、一言多い為敵も多い。

前世の事故で性格が暗くなっていたが、転生してからは元に戻っている。

穂群原高校の2年A組に所属し、1年の時に士郎をバカにした上級

生を叩きのめし、穂群原のグレムリンと呼ばれている。

衛宮創名の一日／裏

夢を見る

月下の誓い。最初は恐怖を、最期に愛情を、自分に抱いてくれた父親の死に際に贈った約束。

切嗣の夢を引き継ぐ兄士郎の味方であり続け、諦めないであろう彼が道半ばで倒れないように支え、正義の味方理想までの道を創る。

例え、この魂を■■■させても。

士郎がその道を拒もうとも。

衛宮創名の道行きは……

「詩的表現が足りない。」

自分の夢においての表現力の無さにダメ出しを喰らわし、衛宮創名は目を覚ました。

和室だと言うのに、畳が見えない程パズルのピースが撒き散らされた部屋、布団や筆筒、学校の勉強道具以外に私物がほとんどなく、やけに達筆な文字で『雉も鳴かずば撃たれまい』と書かれた紙が天井に貼られている。

そんな部屋とは言えない有り様の和室が、創名の私室兼工房である。

「うん、しょつと。」

小さく気合いを入れながら部屋との隅の畳を捲る。

そこには地下へと続く梯子が有った。

地下は士郎が工房のように使っている土蔵と似た作りになっている。違う所を挙げるならば、向こうにある物はほとんどガラクタだが、こちらに有るのはほぼ全てが魔術関連の物である事だろう。

切嗣の表向きの遺産は士郎が相続し、魔術関連の遺産は創名が相続したからである。

何故なら、切嗣は創名に本格的な魔術の手解きを施したが、士郎には初歩的な物しか教えていないからだ。

士郎と創名に差がある理由は、切嗣が創名を、自分の息子にした訳に起因する。

切嗣が創名を引き取ったには訳があった。1つ目は、士郎とほぼ同一の外見だったこと。

2つ目は、切嗣が創名を恐れ、手元で監視しようとしたことだ。保護対象と監視対象を二人きりに出来ず、イリヤを奪還擦るべくアイツベルンへ挑戦する時、切嗣は創名を同行させた。その内に創名の治癒魔術への適正が見つかり、切嗣が監視対象だった創名に魔術と関わらず、平和に生きて欲しいと言うハズもなく、切嗣は自分でも出来る簡単な治癒魔術を教え、それを皮切りに創名は切嗣を真似て行くようにして魔術を学んで行った。

切嗣が、創名を士郎と同じように見るようになった頃には既に知識が無ければ危険な域に達していたのだ。

幾度もアイツベルンに挑む内に、銃や爆発物といった近代兵器の扱いを覚え、魔術師殺しの技を継承していた。

そうした理由により、創名は父親の裏側と言うべき物の多くを引き継いでいる。

「確か、ここに…」

創名は、私室と違い整理の行き届いた地下室に入るとすぐに一つの箱を開ける。中に入っていたのは、二冊の本だった。

一方は切嗣の手記、第四次聖杯戦争についてが書かれている。もう一方は画集である。

手記の方はまた箱にしまい、画集を取り出し、パラパラと捲る。やがて、手触りが他のページと異なるページで手を止めた。

「起きろ」

短く呟かれたのは、魔術回路を起動させる呪文。創名の魔術回路が活発になるのに合わせて、ページに描かれていた絵が消えていく。

残ったのは一画の令呪。

画集は、令呪が保管されていて人間の皮膚で作られたこの1ページをカモフラージュするものでしかない。

このページの元になったのは、第四次聖杯戦争のランサーのマスターの1人、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリと言う魔術師の右手だ。腕ごと奪った令呪を、いざというときの為に保管していたらしい。

『もし、大聖杯が無力化する前に第五次聖杯戦争が始まった時、これを役立て欲しい。』

切嗣の言葉が思い出される。今、自分と士郎は高校2年生で季節は冬、聖杯戦争がもうすぐ開始される。

「聖杯の聖痕を縛る縄よ自壊し、切れよ。」

令呪に手をかざしながら封印の解除と委譲の呪文を詠唱する。

「聖痕よ我が手の中に、英雄を縛る手綱となれ。」

ページから令呪が剥がれ、創名のヘソの左側に張り付く。

「腕や手じゃなく、何でそこ？まあ、上手くいったから良いか。」

能天気そうに呟きながら、聖杯戦争が始まってからの事を考え、創名は小さく笑みを浮かべた。

衛宮創名の一日／表

創名が地下室から出てくると、士郎が部屋の中でパズルを片付けようと悪戦苦闘していた。

「創名、一昨日片付けたばかりだろ！」

「自分の部屋の自浄能力にかかれば、こんな物だよ。」

「自浄じゃなくて汚染だろ、この前買った収納ボックスは？」

「雷画じいちゃんにあげた。コンクリート入れて、海に沈めるんだって。」

それに入れられるのは果たしてコンクリートだけなのか、それ以前に、そう言うのに使われるのはドラム缶ではないのか？

いろいろツツコミたいが、ここでつつこめば鮮やかに話しがそらされるのは、10年一緒に暮らしていれば判りきった事だ。

士郎が、ツツコミと追究で迷い、黙った一呼吸の間に、創名は部屋の襖を開けていた。

「朝ごはん出来たんでしょう？早く行かないと、腹をすかした虎が暴走するよ」

「ああ、そうだな早く行かないと…つて、待て創名！」

士郎の声を無視して、軽やかに居間を目指す創名の後ろ姿に、士郎はため息をもらす。

創名に部屋を片せ、と言うのは飯をタカリにくるお隣の虎に、落ちて着きを持ってと言うのと同じくらいに無理な話なので元から期待していない。ただ、年々自分達の姉貴分である藤村大河に似てきているような気がして、虎が増えるのを阻止したいだけなのだが…

「士郎、早く早く！！」

居間から聞こえた仲良く揃った声に、もう遅いかも知れないと士郎は再びため息をついた。

今日の朝食は、焼き鮭を中心の和食だった。

「うま、うま」

「もぐもぐ」

「創名、おかずばかり食べるな、藤ねえは人のご飯を狙うな。」

行儀良くから外れた食べ方をする二人に士郎から注意がでる。大河だけならしやうがないなあ、で済みますが創名もなのだ。虎化ダメゼツタイの意志の下、出来る限り阻止しなければならぬ。

父親か母親のように二人を注意する士郎を見て、間桐桜が笑いをこぼす。

「む、桜からもなんとか言ってくれよ。虎は1人で十分だつて」

「トラ言うな!!」

「うふふ、先生も創名先輩も先輩を困らせちゃダメですよ。」

桜が笑いながら言った言葉に、創名がニヤリと唇を歪ませる。

「ん、気付いてるかな？今の言葉、何だか『お父さんを困らせないの』とかお母さんチックだった。いつ士郎はこんな可愛い女の子と結婚したのかな？」

「え？あ！私そんなつもりじゃなくて、その…」

創名にからかわれて真つ赤になる桜、アワアワと言葉にならない弁解を繰り返している。

「そうだぞ、創名。俺にはもつたいない、桜はもつといい人がいるさ。

ごめんな桜、嫌なら遠慮せずに言っていいたいんだぞ?」

「……ダメだ。この唐変木、早くなんとかしないと。」

真顔で言った士郎と、ちよつとへこんでいる桜を見て創名は呟いた。

少し気まづくなった食卓が、再び賑やかさを取り戻すのは、大河が創名の玉子焼きを強奪した後でだった。

創名は基本的に1人で登校する。教師である大河とはもちろん、帰宅部であり、士郎のように人助けをするわけでもないの、士郎と桜とは別に家を出る。といつても1年生の頃は一緒に登校していて、1人で登校するようになった理由は可愛い後輩の恋の応援である。

「自分的にや藤ねえとくつつくのが自然なんだけどね」

姉属性の無い兄を嘆きながら登校する創名の耳に、前を歩く同級生の会話が入ってくる。

「……で、罰として体育倉庫の整理をしろつて言われてさあ、今日は放

課後デートの予定だったんだぜ？」

「あのセンセ言うこと古いよなあ、そんなに嫌なら衛宮兄に押し付けろよ、アイツ頼めばやってくれるって」

「ああ、なんとたつて穂群原のブラウニーだしな」

そんなことを言つて笑う三人に創名は音も無く近寄つて行き、兄に押し付ける事を提案した男子の肩を叩く

「少し時間有るよね？」

士郎はそのお人好しさから穂群原のブラウニーと呼ばれているが、創名は兄に厄介事を押し付ける者への容赦の無さから、穂群原のグレムリンと呼ばれている……

「うん、その三人だよ。何か急にお腹痛くなつたらしくて、何か拾い食いしたのかもね。……うん、ありがと藤ねえ。」

十分後、電話ボックスから学校に電話する創名と、ボックスの外で外傷も無いのにぐったりしている三人の姿が有った。

「遅刻の連絡はしといてあげたから安心して、じゃ、これに懲りたら自分の嫌な事を他人に押し付けようなんてしないでね。」

力無く頷く三人に手を振り、創名は登校を再開した。

創名は自分のクラスである2年A組に入り、鞆を机に置くと兄がいて、仲の良い友人が多くいるC組に向かうため、教室から出ようとす。その時、C組のドアから友人であり、この学園の生徒会長でもある柳洞一成が顔を見せる。

「ああ、良かった今来たところか」

「そうだけど、どうしたの？2年A組敵のホームにまで来るなんて」

一成と犬猿の仲である遠坂凜、部活動の予算などでよく対立する美綴綾子などがいるクラスだ。簡単な用事なら後で創名がC組に顔を出した時に済ますだろう。

「いやな、うちの寺の者が料理を教えて欲しいといっていたので伝えるに来たのだ。」

しかし、一成の用事はそんな物だった。ちなみに、創名も士郎並みに料理が出来るが、得意なジャンルは手間要らずで美味しい物であり、士郎とは料理についてでよく激突する。

「ふーん、じゃあ、今週中には行くって伝えておいて」

「了解した。伝えておこう。……げげっ!!」

「ん、どうした?…ああね」

急に叫ぶ一成の視線を追い、赤を見つけて納得する。一成の天敵が登校してきたのだ。

「おはよう、遠坂さん」

「おはよう、衛宮くんそれに生徒会長も」

「……いつもと登校時間がずれているが、今度は何を企んでいる?」

確かに、遠坂さんは何時もはもつと早い時間に登校してるよね。と言う創名の呟きに一成の凜に向ける視線の鋭さが増す。

「失礼ね…私は普通に登校しただけよ。それより、同じクラスの衛宮くんはともかく、違うクラスのあなたがどうして私の登校時間を知っているのかしら?」

「知れたこと、お前と言う悪が生徒に魔の手を伸ばせぬようにだ」

「ずいぶん面白い草ね…」

凜は腕を組み、やれやれと首を振る。

「そうだよ一成、こんなに可愛いのにそんな言い方はどうかと思う」

「創名!?目を覚ませ!その女は、猫の皮を被った悪魔だぞ!」

「だからだよ!猫可愛いじゃん、自分猫派だし」

「衛宮くん、それは私が猫被ってるって言いたいのかしら?」

創名が漏らした言葉に、猫被ってる状態の凜でも額に怒りマークを浮かべそうになる。

一成に凜、それになぜか創名まで加わって無言での圧力勝負となり、一般人では近寄れない雰囲気となる。

「お前たち、何をしている?もうすぐHRが始まるぞ」

三人のにらみ合いを終わらせたのはA組担任の葛木宗一郎だった。彼を尊敬する一成と表向きは優等生の凜は、席につけと言う言葉に逆らえず、戦いは終了した。

そして、最後の平穏な日常が始まる。聖杯戦争を目前にし、僅かに影を落としながら…

聖杯戦争開催／裏

間桐桜は魔術師である。衰退したマキリの魔術を次代に繋ぐため、遠坂から間桐へと養子に出され、マキリの魔術に馴染まされるための修行を受け、髪の色や自身が生まれつき持っていた稀有な魔術属性も水に変えられた。それでもまともな魔術は教えられず、ただ次代を産む胎盤としての役割しか与えられていない。

身体の内たるところに刻印虫と言う蟲に巢食われ、心臓を人を喰らう妖怪にまで身を墮としたマキリ・ゾオルゲンの魂を抱える蟲に寄生された桜は逆らう事も出来ず、ただ心を閉ざす事で自分を守るほかなかった。

繰り返される凌辱の日々の中、『衛宮士郎』が桜の光だった。

士郎に恋をして、自分は蟲とは違うのかもしれないと思えた。士郎と創名、大河のやり取りは見るだけで笑顔になれた。桜にとって絶対の恐怖である間桐臓硯が、桜に悪影響を与える恐れがある衛宮家に出入りする事を許しているのは、彼らの養父、衛宮切嗣が養子にした子供たちに如何なる魔術を仕込んでいるかを調べる為だ。

その結果は、長子の士郎は魔術の鍛練をするのにも命を掛けるような方法を取る程に無知。弟の創名は魔力がほとんど感じられず、魔術が使えろとは思えないと言う物だった。

しかし、士郎の魔術の異常性を見抜いた臓硯の命令で監視と言う名目で衛宮士郎と関わり続ける事が出来た。

それも、もうすぐ終わる。先日桜はサーヴァント、ライダーを召喚した。聖杯戦争が始まったのだ。

今は七騎が揃う前の前哨戦で、桜はマスター権を兄である慎二に預けているから衛宮家に訪れる事が出来ているが、数日の内にそれも叶わなくなるだろう。

「あ、桜ちゃんおはよー」

「おはようございます。創名先輩、今日は早起きですね。」

「士郎の通い妻やってる桜ちゃんほど早起きじゃないけどね。」

「こんな朝に身嗜み完璧とか何時起き?」

創名に茶化されて、桜は顔が熱くなるのを感じた。

創名は初めて会ったときからこうだ。『初めまして、君が未来の義姉?』と言われ、その後差し出された白い右手を今でも思い出す。

「来て貰っていきなりで悪いんだけど、士郎を起こしてきてくんないかな? アイツまた土蔵で寝てるみたいなんだ。全く、凍死でもしたいのかな?」

「はい、わかりました。」

「お願いね、自分はその間に朝御飯作ってるから。」

笑いながら言う創名に笑みを返し、桜は士郎が眠る土蔵へと足を向けた。

その後は何時ものように、創名の手抜きでも美味しい料理に士郎がダメ出しを食らわし、創名も士郎の料理にダメ出しをして、料理討論を繰り広げ、その隙を突こうとする大河を二人で同時に制止する、賑やかな食卓だ。それが終わった後は、双子並んで皿洗いをしている。桜も手伝おうとしたが、ゆっくりしてろと追い返されてしまった。

「だいたい、お前の料理には愛が無い!」

「愛ならあるよ、楽がしたいと言う自己愛が溢れんばかりに」

「俺が言いたいのはそれじゃない!……っ!」

創名と話していた士郎が、左手を押さえ洗っていた皿をを落として割ってしまった。

「先輩!」

「大丈夫だ。どつかで打ったみたいだ」

心配する桜をよそに、創名は割れた皿をただ見詰めていた。その唇が僅かに動いたのに士郎も桜も気付けなかった。

『あーあ、始まった。』

「士郎、自分は今日休むから葛木先生に言つといて」

手当てを終え、士郎と桜が家を出ようとしたとき、創名が唐突にそう言った。

「お前なあ、サボりはダメだって前から言ってるだろ? また、藤ねえに連行されるぞ。」

「今日はホントにキツイんだって。」

またか、と言わんばかりに士郎が言う。と創名もいつもと同じ言葉で返す。

「たく、程々にしとけよ。」

「ありがとね士郎、あ、桜ちゃんに聞きたい事有るから士郎は今日一人で登校な」

ため息混じりに言った士郎に礼を言ってから桜を止める。

「聞きたい事ですか？」

「……少しぐらいなら待つてるぞ？」

「大した事じゃないけどさ、てか士郎空気読めよ。そんなんだから鈍感だの馬鹿スパナとか言われんだよ」

創名の言葉に二人は首をかしげるが、結局押しきられてしまった。

「それで、話って何ですか？」

聖杯戦争がらみの事ではないか、自分が魔術師であると知られてしまったのではと僅かに怯えながら聞く。

「桜ちゃんの恋の進展について、と言いたい所だけど、慎二の事なんだ」

「兄さんの事ですか？」

「うん、最近様子がおかしいと言うか、前から他人を見下しがちだったけど、更に酷くなった気がしてさ。なんかあったのかな？って思ったんだよ」

桜は内心安堵した。気付かれていない、確かに兄が創名の言うようになったのは、聖杯戦争でのマスター権を借り物とはいえ手に入れたのが原因だろう。だが、これだけなら誤魔化せる。

「確かにそうかも知れませんが、私には分かりません……」

兄を友人として心配してくれる創名に感謝しながら、桜は嘘を吐く、ただ1つの自分の光を守るために……

「そっか、ゴメンね遅れさせちゃって、士郎が聞いたら慎二に突っ込んじゃうからさ。」

「はい、兄を心配して下さってありがとうございます。」

ライダーを得た兄は自分を問い詰めて来る士郎を容赦なく殺すだ

ろう。再び安堵して創名に頭を下げる。

「ん、急げば追い付くかも、一緒に登校する連続記録更新出来るかも？」

「もう、創名先輩がそれを言いますか？」

朗らかに笑いあい、桜は玄関へ向かう為後ろを向き、創名に背中を見せた。

「ゴメンね」

「え？」

ドンと言う衝撃、視線を下に向ければ、自分の胸から白い腕が生えていた。自分に差し出してくれた白い右腕だ。それが脈動する臓器を握りしめ、自分の体を貫いている。

ズブリ、

腕が引き抜かれ、自分の力で立っていられずに前のめりで倒れる。残りの力を振り絞り、顔を上げた時、見えたのは見知った少年の見たこともない表情。

右目からはハラハラと涙を流し、左目は愉快そうに細められ、唇の右側は嘲笑するように歪められ、左側は堪え忍ぶ如くに歯を食いしばっている。

まるで、様々な表情をツギハギしたかのような表情に桜は何故か安らいだ。

「(創名先輩も、壊れてるんですね)」

そして、桜の意識は闇に消えた。

「ごめんな、自分は士郎を『正義の味方』にするって約束したんだ。……だから『桜の味方』に成ってもらおう訳にはいかないんだ。」

少女の心臓とそれに巣食う妖怪を握りしめながら、ツギハギの少年は呟いた。

聖杯戦争開催／表1

衛宮士郎は夜の帰り道を走っていた。明らかに人間離れた闘いを繰り返す二人の人間外と、その闘いを見守る同級生。

落ちていた杖を踏むと言うマンガのような出来事で見つかり、青い槍兵に心臓を突かれ、死んだはずだった。しかし、士郎は何故か目を覚ました。傍らには赤い宝石のペンダント。

何故？と考える余裕もなく士郎は自分へ逃げ帰って来た。

「お帰り、士郎。まるで死んだ後生き返ったみたいなの顔をしてるね。」

「ただいま、お前はたまに見透かしたような事を言うよな。」

家に帰れば、創名がいつもとだいたい変わらない様子で迎えてくれた。いつもと違うのは生理的嫌悪感をもたらすような、気味の悪い蟲入りのビンを持っている所だ。

「なんだよ、その気味の悪い蟲は？」

「魔術的な500年は生きてる蟲だよ。これ捕まえるために、1000万の魔力遮断礼装を買ったんだよ？」

士郎は創名の言葉にため息を吐く、創名が切嗣の魔術的な遺産をやりくりして増やしているのは知っていたが、虫一匹の為にそんな額を使うほどとは思っていなかった。

士郎は知らない事だが、創名は外道の魔術師を殺し、回収した研究を魔術協会に売る事で一財産を築いている。1000万は大した出費ではない。

人間のうめき声に似た鳴き声をあげる蟲を見ながら、創名は薄く笑う。憐れむ様であり、嘲笑する様でもあった。

「ねえ、とても正義感の強い人がいて、その人が記憶を失って沢山の悪行を行ったとしよう。その人は記憶を取り戻した時、自分が悪行を行っていた事をどう感じるんだろうね？」

「そりゃ、シヨックなんじゃないか？」

「だよね。それが、『この世全ての悪の廃絶』なんて理想を掲げた人で、行った悪行がおぞましくて醜悪で最悪だったりしたら、そのシヨック

は自我が崩壊してうめくだけの生きる屍に成るぐらい酷いだろ
ね。」

そう言って、創名はうめくように鳴き続ける蟲から視線を外し、士
郎を見る。

「ところで、その胸どうしたの？服は破れてるし、血は着いてるし、傷
は有るけど治ってるし……」

「あ、これは……」

創名に言われ自分が体験したことを思い出す。弟の不可思議な言
葉で思考の外に行ってしまったように思う。

見たことをどう説明しようか、巻き込んでしまわないか、と考えて
いる間に、創名の指が心臓を貫いた傷跡を撫でる。

「何コレ、びっくりするぐらいの呪いだね。治癒すのにどんだけ魔
力掛けたんだろ？」

「治してくれたのはお前じゃないのか。」

人を助けといて知らないふりは創名がよくやることだ、現場を見た
後先回りして士郎より早く帰ってきたのかと思っただ、顔を見る限り
違うようだ。

「普段なら何とかなるけど、今日は魂の修復に、重症二人の治療で魔力
がそんなに残ってないんだ。」

その内2つは自分のせいなんだけどね、とうそぶいて肩を竦めた。

「今日拾った重症の人はウチに居るから、明日からご飯1人分多くし
てね。」

「分かった」

ここで病院に連れて行け、とか言わないのが士郎である。

改めて、士郎が学校での事を話そうとした時、二人の魔術回路に警
報が響いた。これは切嗣が張った結界で敷地内に敵意ある者が侵入
した場合、衛宮に連なる魔術師に魔術的感覚を持って知らせる物だ。

「死せる者は冥府にあれ！」

警報とほぼ同時に士郎の背後に現れた影に、創名は取り出した銃の
引き金を詠唱と共に引く、それは切嗣の相棒といえる『トンブソン・
コンテNDER』の後継、『アンコール』

放たれた銀の魔弾は侵入者の頭を狙い、その頬を掠めるのみに終わった。しかし、それにより出来た一瞬の隙で士郎は前転するように身を投げ出し、槍による一撃を回避した。

「矢避けの加護と対魔力を突発して、俺に傷を負わずとはやるじゃねーか、坊主」

「ないわ、あれでそれだけの傷とか、割りに合わないにも程がある。」
突然現れた青い槍兵ランサーの頬の傷を拭いながらの言葉に創名の顔が引きつる。先ほど放った弾丸は聖銀の十字架を溶かして作った弾丸に、司教クラスが祝詞を刻んだ一級品の対魔の弾丸であり、詠唱により死者を冥府に送る、悪霊払いの方向性を持たせた物でいくら英霊でもゴーストライナーである以上、かなりのダメージを与えられるはずだった。

しかし、無情にも対魔力をすり抜けて、唯の弾丸以下程度のダメージしかないようだった。それでも、英霊を傷付けると言う偉業だが、1ダースにつき製作費200万なんだから、もっと効いてよと思う創名だった。

「土蔵に逃げるよ。あそこにはこの時期限定で使える凄いのがある」

「(そんなの有ったのかよ、あそこ)」

双子、正確に言えばオリジナルとコピーの関係故に二人の間に強く存在する縁をラインにした念話で逆転の策を話す。創名の言う凄いのとは、勿論サーヴァント召喚用の魔方陣である。

創名は服の裾から縮められた三段ロッドを取りだし、士郎に投げ渡す。

「(背中見せんな。戦いながら引くから死ぬなよ) 起きろー!」

「(分かっている。前衛は任せろ) トレース・オン」

創名の詠唱と共に銀の砂塵がランサーの視界を覆い、ソコに三段ロッドを強化した士郎が一撃を繰り出す。

「甘えよー!」

「ぐう……ッ!」

だが、相手は英霊だ目眩まし程度では埋められない力の差がある。

カウンターで腹に蹴りを入れられ、士郎は土蔵の前まで吹き飛ばされる。

「そのまま、土蔵に。入れば発動する）復元始め」

創名の念話に従い、立ち上がる士郎に、追撃を行おうとしたランサーは、銀の砂塵が創名の元に集まり、一振りの蛇剣と成ったのを見て、警戒を移す。

蛇剣とは、地を這う蛇のように刀身が曲がりくねった剣のことで通常の剣より深い傷を与えやすい。

「お前ら、魔術師の癖に結構やるじゃねーか。もしかしたら、お前らのどっちかが七人目だったのかもな」

ランサーが軽口を叩き始めた時、士郎が倒れ込むように土蔵に入る。それを見て、創名はにこやかに笑った。

「だったかも、じゃなくて士郎が『そう』なんだよ。今、この時から！」
創名の言葉と同時に、土蔵から魔力と黄金の光が溢れる。

この瞬間から聖杯戦争は開催される。

聖杯戦争開催／表2

ああ、土蔵で行われているだろう個人的にFateで好きな場面ベスト10に入るシーンを見に行きたいが、そんな隙を見せればランサーに殺されてしまうから出来ない。召喚の魔力に驚いて、隙が出来たがそれもすぐに消え、土蔵とこっちに9対1位で警戒している。

十分の一以下でも警戒されたら隙が全く無いって英霊マジチート、いや自分が弱いのも有るだろうけどね。

「ち、やってくれるな坊主。」

「サーヴァントは嬉しくない？お兄さんは戦闘狂っぽいのに？」

「強え奴は嬉しいが、今は本気で殺り合えないんでね。」

因みにこの会話の最中アンコールに炸裂の術式を刻んだ弾丸を装填して撃ってみたが、あっさりと弾き落とされた。対人なら防弾チョッキを着てようが、着弾した瞬間魔術によって爆ぜ、致命傷を与える弾丸なのだが英霊には豆鉄砲以下のようなのだ。これなら投石のほうが良いかも知れない、コスト的に考えて。

蛇剣を右手に、アンコールを左手に持ち、どうすれば投石を兵器クラスに出来るかに思考を移しそうになった瞬間、土蔵から蒼い少女が飛び出してきた。

振るうのは不可視の剣、風を集め光を屈折させる宝具『風王結界』インビンジブルエアアーサー王は纏えば透明になれるマントを持っていた言うし、元ネタはそこだろうか？

士郎も土蔵から出てきて目の前の戦いに魅入っている。

そして、発動するランサーの宝具『刺し穿つ死棘の槍』ゲイ・イ・ポル・ツク宝具の真名解放とか初めて見たけど、メチャクチャだね、因果逆転の呪いとか何ソレ恐い。ソレを傷を負うも、幸運で避けられるセイバーも大概ではある。アレはランサーの幸運値がEだからなのだろう、Dとかなら命中してもおかしくないと思う。

神話級の戦いが目の前で繰り広げられ、庭が凄い事になっている。まあ小さなクレーターは炸裂弾のせいだが……

ランサーが撤退し、セイバーに士郎が駆け寄る。

しかし、セイバーはまともな対応をせず、こちらを一瞥すると士郎の制止を無視して走り去る。確か、士郎の身を案じて衛宮家に駆け付けた凛を敵と見なしてアーチャーに斬りかかって、士郎が令呪を使つて止めるだったっけ？

セイバーを追いかける士郎に並走する。

どうでもいいけど、セイバーのこの行動は聖杯戦争とか知らなければ、殺人鬼か通り魔のそれだよな。

マスターが士郎でなければ破綻している可能性もある、考えれば当たり前だが、生前王と言う自分の意志を当たり前のように貫けた者が、人の下につく事が上手くいくはず無いのだ。四次のライダーやアーチャーのように楽しんでいるなら大丈夫だろう。しかし、セイバーは切実で重い願いを持っているのだ。マスターが自分の思う道から外れれば、口を出さずにはいられないだろう。そこで意見が合わなければ、後は悲惨なチームワークになり、内側から崩壊するだろう。そんな事を考えながら走っていると金属音が響いた。

「……違っ？」

セイバーに追い付いたそこには、銀のガントレットでセイバーの聖剣を受け止める理想の果てがいた。

魔術師の会合

アーチャーのガントレットに見覚えがあった。アレは自分が現在作っている礼装の完成形だ。

元から士郎に渡す為に作っている物だから、士郎の果てと言える英霊エミヤが持っているのは全くおかしくない。しかし、それがもたらす事実は、

アーチャーは自分がいる並行世界で英霊となった／自分が道を創るのに邪魔に成りうる

存在であると言うことだ。

その瞬間、凜に照準を合わせようと動こうとする左腕を押さえる。違う、まだ大丈夫。アレは違うとは言え、士郎だ。

「やはりお前は、『そう』なんだな」

不意に聞こえた念話。オリジナルとコピーと言う因縁を利用したパスを通じて、聞こえてきたのは哀しみと諦めを含んだ声。

ほんの刹那な出来事だが、何かが決定的になってしまった気がした。いや、衛宮創名が行き着く先は、あの月下の約束から決まりきっている、惜しんではいけない。

「こんばんは、衛宮くん。随分なご挨拶ね。」

「遠坂、大丈夫か？急にこの女の子が…」

「…サーヴァントを知らない？それともとぼけている？」

恐らくアーチャーからであろう念話に、自分が気を取られている間に士郎達の話が進んでいく。

端的に全員の主張を言うと

士郎：聖杯戦争？サーヴァント？なんだそれ？

凜：衛宮くん魔術師だったのね。聖杯戦争を知らない？何の冗談よ？それ

アーチャー：マスターに丸投げ

セイバー：斬らせろ

サーヴァント達は色々言っていたが、意識したらこんな感じだろ

う。

まあ、どういうわけか衛宮家（ウチ）で士郎に聖杯戦争について説明すると言ったことになったようだ。

聖杯戦争、それは始まりの御三家（自分の的には御三家と言うより誤算家）アインツベルン、マキリ、遠坂によって始められた戦争。七人のマスターと七騎のサーヴァントを用意し、殺しあう。マスターには御三家をはじめとした魔術師が、サーヴァントにはクラスと言う枠にはまった英霊がつとめる。

最後の一組となったマスターとサーヴァントには賞品として、万能の願望器である聖杯が与えられる。

と言うのが表向き、実際はサーヴァント達の魂を集め、それが英霊の座に還る力を利用し、根源への道を世界に穿つ大魔術儀式。だが、それが一度も成功せず第五次まで来てるのが誤算家たる由縁である。しかも、第三次では、アインツベルンの反則によって呼び出されたサーヴァント、アヴェンジャーによって聖杯の透明な魔力が黒く染まり、あらゆる願いを破滅の方向でしか叶えられないポンコツになってしまっている。それでも根源に至るにはあまり問題が無く、マキリやアインツベルンは気にしていないようだが……

凜が、表向きの部分（つまり凜が知る限り）を士郎に説明し終わり、殺しあいと言うことに士郎が思いつきり抵抗を感じているようで、眉間にしわが出来ている。

「で、衛宮創名くんは質問とか無いみたいだけど、もしかして知ってた？」

「うん、元から衛宮は普通の当主は士郎で、魔術師としての当主は自分だからね。もつとも、養子だから家伝来の魔術は無いんだけどね。」

自分がそう答えると、凜は拳を握りしめ、軽く震えている。

さて、ここで怒ってるのかと聞くのと、寒いのかと聞くの、どちらも楽しい爆発が見れそうで迷ってしまう。

「どうして、それを早く言わないのよ!!」

「いや、言うより先に説明を始めたのは遠坂さんだよ?」

迷っている間に爆発してしまった。左腕の魔術刻印が光り、ガント

を撃たんとしている。

「止めておけマスター、キミのミスだ。」

「五月蠅いわね！分かってるわよ、それぐらい。」

アーチャーが止めに入ってくれたお陰で、今着ている鋼糸を編み込んだ服の防御力を身をもって試す、と言う事態は避けられた。

士郎が咎めるように見てくる。自己紹介より先に説明するように、士郎を念話で急かしたのを責めているようだ。

「改めて、自己紹介をしようか。自分は衛宮創名、衛宮の当主と言うより、先代が残した魔術関連の遺産の管理者で、必要最低限の知識があるだけだね。」

あ、そういえば、今ちよつと怪我人を保護しててね。魔術師だけどもマスターじゃないから、斬りかかったりしないでね。」

士郎の視線をスルーし、嘘が混ざった自己紹介を行う。確かに魔術師としての衛宮切嗣の遺産を管理していて、衛宮の魔術については必要最低限を知っているだけだ。しかし、自分は魔術師殺しとしての衛宮切嗣の技術の後継である。この聖杯戦争の為に力も蓄えている。知っている人からすれば、嘘だらけだがこの場にいる人間で、自分の行いを知っている者は居ない。知っているとしたら、怪我人だが、今は出てこないだろう。

「俺は、衛宮士郎。使える魔術はほとんど無いけど、一応魔術師だ。」

「……セイバーです。」

「遠坂凛よ。遠坂六代目当主」

「アーチャーだ。」

全体的にフレンドリーから程遠い自己紹介をへて、これからの事の話しとなる。

「で、衛宮くん達はどうするの？魔術知識がある弟くんにマスターを譲る？」

「いや、俺がやる。創名に危ない事はして欲しくないし……」

凛の質問に答えた士郎は、何かを思い付いたような顔をしている。この戦争を止めるとか考えてるのだろう。全く、人をダシにしないで欲しい。

「そう、じゃあ、監督役に報告に行きましよう。セイバーで七騎が揃ったはずだから聖杯戦争が始まるわ。」

凜はそう言つて、士郎を促すが自分がそれを呼び止める。

「遠坂さん、魔術師としての貴女と、マスターとしての貴女を見込んで頼みたい事がある。」

「何かしら、私に頼むつて事は対価がいるわよ?」

「勿論分かっている。頼みたい事は、士郎に魔術師としての常識を教えてやって欲しいんだ。2、3日で良いからさ。士郎は、養父の方針で魔術をほとんど教えられてないし、自分も人に教えられるレベルじゃない。」

事実上の一時休戦を依頼する頼みに、凜は険しい顔をして、対価は?と訪ねる。自分はポケッタから一冊の手帳を取り出す。

「第四次聖杯戦争でマスターだった衛宮家先代、衛宮切嗣が残した、切嗣が参加した聖杯戦争について書いた手記」

勿論、出した手記はフェイク、聖杯戦争について書いてあるが、それは聖杯戦争の表向きの進行だけで、聖杯戦争の本当の目的、大聖杯や小聖杯について、聖杯の汚染と戦争の終盤に何があったかなど、核心については書かれていない物だ。だが、先代が言峰綺礼に殺害されたせいで、聖杯戦争についての資料があまり残っていない遠坂家には十分な価値があるだろう。

「……引き受けることにするわ、スクロール証文は?」

「不要でしょ、破られたなら遠坂の誇りはその程度だったと言うことで……」

「言つてくれるじゃない。」

挑発のような自分の言葉に、凜は鮮やかに笑い、手記を受け取り、士郎とアーチャー、セイバーを引き連れ、監督役が待つ教会へと出発していった。

「もう出てきたら?バゼットさん。」

「そうしようと思つていたところです。ハーヴェスト。」

ふすまを開けて浴衣を着た女性が姿を見せる。バゼット・フラガ・マクレミッツ、魔術協会において、指折りの戦闘力を誇る執行者であ

り、現存する宝具の担い手。……左腕を奪われた今はどれだけ戦闘が可能かは不明だが、万全の状態なら今回参加しているマスターの中でも、一二を争う。

ランサーの召喚者だが、左腕ごと令呪を奪われて、死にかかっている所を治療し連れてきたのだ。

彼女とは、以前外道の封印指定の魔術師を狩った時に、ターゲットが被りちよつとした殺しあいを演じてからの仲である。ついでに言えば、ハーヴェストと言うのは魔術協会での自分の悪名である。

「凄いですね、明日の朝まで眠るように麻酔の多めにしたのにもう起きてるなんて」

「通りで身体が重いと思いました。」

それだけで済んでるとか、人間辞めてると思ったが、すでに彼女の間合い、下手な事を言つて殴られるのは嫌だったので、口を閉ざす。

「それにしても意外でした。ハーヴェスト、貴方がこの街に居たこともですが、貴方に兄を思いやるなど……」

「あはは、バゼットさん、自分の事をどう思っているんですか？」

「血も涙も無く、誇りさえ持た無い魔術師殺しだと思っていました。」

バゼットさんが言つた事は、自分の魔術師殺しとしてのスタンスだったので何も返さずに曖昧に笑う。

「それで、私に何を望むのですか？協会でも強欲と呼ばれる貴方が、何の意図もなく私を助けたとは思えません。」

「心外だな、と言いたい所ですけど当たりです。バゼットさんに兄の守護をお願いしたかったんです。」

バゼットさんの目を見て言う。バゼットさんは小さく頷いた。

「いいでしょう。片腕で何処までいけるか分かりませんが、全力を尽くします。」

「ありがとう。バゼットさん。」

「いえ、命を救われたからにはそれぐらいでは安い程です。」

それにしても、お兄さんを大切にしているのですね。……だからこそ分からない、私が令呪を奪われた。その下手人について貴方が知らないとは思えない。なのに何故、貴方は兄が彼の元へ行くのを、止

「めなかつたのですか？」
バゼットさんの問いかけに自分は再び笑み浮かべて応えた。

去り行く日常／表

「やはり、こうなりましたか。」

「これは、外道神父の仕業じゃなくて、自分達の義姉の仕業ですよ。」
「ハーヴェスト、貴方の家系はどうなっているんですか？」

バーサーカーからセイバーを庇い、命に関わる傷を負った士郎は創名の部屋に運ばれた。

そして、眠る士郎の枕元で創名とバゼットは話していた。バゼットのルーンと部屋の工房としての機能により、この部屋の会話はキャスターほどでない限り盗み聞きは不可能だ。マスターの側にいると言いつ張ったセイバーは、秘術による治療と言われ引き下がった。

「自分の家系ですか？意外と暗いので黙秘します。」

「はあ、記憶を覗いていたようですが、何か分かりましたか？」

「んー、言峰綺礼はまだ動かなそうって事と、アインツベルンのバーサーカーの真名がヘラクレスって事ぐらいです。」

バーサーカーの真名に絶句するバゼットを置いていて、創名は異なる事を思考していた。

「(アーチャーが、士郎を狙わなかった)」

創名の疑念はそこである。自分が知る通りに進行している中、アーチャーだけがイレギュラーだ。

「バゼットさん、お願いがあるんですけど、自分が魔術師殺しであること、貴方の左腕を奪ったのはだれか、士郎達には黙っていてももらえませんか？」

「……ハーヴェスト、貴方は一体何を考えているのですか？シロウくんを守りたいのかと思えば、知っていた方が良い事を隠そうとする。」
「最高の義手を用意します。」

問いかけに答えず、創名は追加報酬をもちかける。

パズルのピースの中から小型の電話機を取りだし、何処かへダイヤルした。

「もしもし、橙子さん？創名です。義手を一個追加でお願いしたいん

「ただ、…自分のじやないですよ。…はい、お願いします。」

バゼットの頭に、封印指定の赤がイタリアで赤毛の子どもと旅行していて、そこに奇襲をかけた執行者の部隊が片手間に全滅させられた。と言う情報が浮かぶ。赤毛と言われてハーヴェストを連想していたが、まさか当たっていたとは……

バゼットは頭を抱えなくなつたが、蒼崎橙子は最高位の人形師、その作品が黙っているだけで手にはいると言うのは、酷く魅力的な話だった。

了解を伝えた所で、目覚ましがなる。記憶を覗く際、対象の精神に影響を与えないように掛けていた眠りの呪いのリミットである。

「ん、ああ、創名?」

「おはよう、士郎。死に際からの生還した気分はどう?」

創名の言葉に士郎は、昨夜の事を思い出したのか、飛び起きて、セイバーは?と創名に聞く。そんな士郎をバゼットは、信じられない物を見る目で見つめる。昨日まで魔術など必要ない日常の中を生きていた少年が死にかけて、その遠因であるサーヴァントの少女を心配する。それは、バゼットの知る一般人から逸脱していた。

「落ち着いて、士郎。セイバーは怒っているけど、無事だよ。それよ、藤ねえが突撃して来る前に口裏合わせとかしなきゃね」

その後、凜とバーサーカーを倒すまでの同盟が決定した事が創名から士郎に伝えられ、凜をアーチャーに起こして来て貰い、不意打ちで令呪を奪われたランサーの元マスターだとバゼットを紹介した。凜やセイバーは追及を行ったが、創名によって全てかわされた。

その後、大河用の説明^{言い訳}として、凜は原作通りに自宅の修繕工事、バゼットは切嗣の知り合いの骨董商で、創名から一部の遺産の扱いの相談を受けてやって来た。セイバーは最近事故で片手を失ったバゼットの補助、穴だらけの設定だが凜と創名がいればフォローは万全だ。

「藤ねえへの説明は分かったけど、桜にはどう言うんだ?」

「あれ、言ってなかったっけ?桜ちゃんは風邪引いたらしくて、しばらく来れないって」

「ナイスタイミングだよねーと笑う創名と、それに何か思うところが

有ったのか、凜は表情を固くしていた。

この同盟の拠点を衛宮家にするための唯一にして強大な障害である大河は、凜に論破され、創名にはぐらかされ、弟分達の一時的な同居人についてほとんど知ることが出来ず、その上に創名が彼女の祖父である雷画に手を回したお陰で、しばらくの衛宮家出入り禁止を申し渡された。

因みに、創名が雷画に行った説明は、士郎の嫁候補を見繕って一時同居させてみる事にしたが、大河が居ては見合いにならん。と言う物で、孫の様に可愛がつている創名の頼みで、同じく孫の様に可愛がつている士郎の為と言うことで快く引き受けてくれた。……士郎が駄目ならあの孫は嫁に行けるのか？と言う眩きが、創名の耳に残った。

「あ、士郎。自分は聖杯戦争の間学校休むから。」

「どういう事だ？」

「この家を拠点にする以上、此処は必ず誰かいないなければならない、もし乗っ取られて、待ち伏せされたら一網打尽になる。それを防ぐにはこの家を工房化させて、防衛できる自分が適任なんだよ。」

だから、自分の単位が心配なら早めに聖杯戦争を終わらせてね。とうそぶく創名に凜が同意する。

「そうね、確かにそれがベストだわ。」

「それなら、セイバーを残して行けば……」

「サーヴァントを置いてくとか死ぬ気か、バカ野郎。」

聖杯戦争を舐めた事を言う士郎に凜のガントが炸裂し、創名はセイバーに向かって石を投げた。

「バゼットさんが秘匿のルーンを刻んで、自分が視線避けの術式を編んだ魔石。それを持ってれば視界に入っても意識されない。霊体化出来なくても学校に付いて行けるよ」

「感謝します、メイガス。」

セイバーレベルの存在感を完璧に隠蔽は出来ないから、都市伝説見たいに噂になるかも知れないと言うのは黙っておく創名だった……実際冬木にある都市伝説には、空を走る雷や、子どもを呑み込む下水道など、四次聖杯戦争のせいで出来たであろう物がある。

士郎と凜、彼らのサーヴァントが学校へ向かい、学校に張られた人を喰らう結界を発見する。

それとどう時刻、創名は自分が入れそうなほど大きなトランクを持って家から出掛けようとしていた。

「ハーヴェスト、あんなに言つといて、守りをほつたらかして出歩く気ですか？」

「バゼットさんが居るだけでほぼ鉄壁ですよ。結界も起動しときますし。」

あくまでも出掛ける気らしい創名に、バゼットはため息を吐く。

「……何しに行く気ですか？」

「やましいことはないよ。」

ただ、料理を教えにね」

聖杯戦争はすでに始まり、日常の裏で陰謀が蠢き出していた。

補足説明2

衛宮創名

魔術属性：剣

魔術特性：崩壊と再生

起源：■■■

治癒魔術、修復魔術、投影魔術を得意とする。投影は本人の固有結界の性質上、銀色の砂塵として投影され、それを修復する事で形となる。

条件を満たせば術式を崩壊させる魔術破壊（マジック・ブレイク）も使える。

基本魔術は修めているが、全て辛うじて使えるレベル、士郎の記憶を覗いたのは士郎と創名が限りなく近い存在だからで、本来は記憶を覗いたり、いじったりは出来ない。せいぜい暗示で特定の事を思い出しにくいようにするぐらいしか出来ない。

しかし、魔術品を作る才能はあり、作った礼装で戦う錬金術師型。採算を度外視すれば相性にも寄るが、サーヴァントと一時的に互角に戦える。

多くの外道魔術師を殺し、その研究成果を奪っているため、協会では収穫を意味するハーヴェストと呼ばれている。奪った研究をまとめ、協会に売ることも有り、協会でも扱いに困っている。

バゼットとは知り合いたが、初対面の時殺し合っている。その時持っていた礼装を使いきり、辛くも引き分けとなった

蒼崎橙子とは友人でありコレクター仲間、鮮花の火蜥蜴の皮手袋を調達したのは創名という設定。創名はいろいろな事を打ち明けている。二人でイタリアにいたのは、橙子の使い魔の材料を得る為だった。

去り行く日常／裏

「あー、しんどかった。」

創名はそうもらして、抱えていた大きなトランクを丁寧に地面に下ろし、自分が登ってきた階段を見下ろす。

柳洞寺、それが創名の現在地であり、魔術の英雄たるキャスターの陣地である。

「よく来たわね、坊や。」

「迎えが欲しかった所だけどね。キャスター。」

創名は、敷地に入った途端に現れて声をかけてきたキャスターに、ぞんざいな返事を返す。

「さて、料理を教えに来たことになってるんだけど、なんかリクエストある?。」

「まったく、料理を教えに、なんてもつと良い理由は考えつかなかったのかしら?。」

「不正が嫌いな一成をメッセンジャーにしたんだから、言い訳が下手なのは予想しとけよ…。」

二日前に一成がわざわざ創名の教室まで来た理由は、それが今の状況をやる為に利用されたからである。キャスターによる暗示で、創名に柳洞寺に来るように伝えさせられたのだ。

「葛木先生に協力を持ち掛けたら、一成で返事が来たからビックリしたよ。」

「よく言うわ。」

キャスターは、魔術師ではない自身のマスターに、キャスターと共闘したいと言ってきた存在にどれ程驚かされたか、と心の中で毒づきながらも、表面上は余裕の笑みを浮かべる。

「魔術師のサーヴァントである貴女なら確認済みだと思うけど、自分の兄衛宮士郎と遠坂凜がマスターとなった。」

「これで、互いが利用しあえるようになったと思うけど?。」

「確かに、そうね。でも、キャスターである私が貴方ごときの約束を守

ると思うのかしら?」

言葉と同時に、キャスターは暗示の魔術を行使する。対魔力の無い創名から、交渉の手札を奪わんとしたそれは、膨大な魔力で無効化された。

「その魔力……成る程そう言う事。」

「バレた? まあ、説明の手間が省けるからいいけどね。で、キャスター答えは?」

「…良いでしょう、聖杯戦争終結までの同盟よ。」

「良かったー。んじゃ、どーぞ。」

冷や汗が流れるのを感じながら、キャスターは頷いた。

「(あんな方法で魔力を増強するなんて、狂ってるわね。)」

創名は安堵の表情を浮かべながらキャスターにトランクを差し出す。トランクはキャスターの魔術によりキャスターの方へ引き寄せられ、独りでに開く。中には少女、間桐桜が入られていた。麻酔で眠らされ、腕にある点滴の跡から、かなり非人道的に拘束されていたようだ。

「いくら軽量化の術式が刻んであるカバンでも、人一人持つてくるのは大変だったよ。」

「外道ね」

嘲るように言うキャスターに、創名は感情の無い透明な笑みで見つめる。

「お互い様だと思うけどね。1の為に10を殺す。例えそれが100になるろうと、1000になるろうと譲れない1の為に虐殺し尽くす。正義の味方からほど遠い所に居る。衛宮創名も、キャスターも…」

「ふん、分かったような口をきくのね。不愉快だわ。」

「それは、残念。ま、変える気は無いんで、この口が嫌ならさっさと聖杯戦争を終らしてよ。」

創名とキャスターの同盟、それはどちらも裏切る気で、どちらもそれが分かっている歪なものだ。

キャスターのメリットは、創名と桜、セイバーのマスターとアーチャーのマスターの身内の身柄を押さえる事で、キャスターが作

り上げた神殿に誘き寄せる事ができる。

柳洞寺には、正面の門以外からの人ならざる物の侵入を防ぐ強力な結界が張られ、侵路が限られる為守り易い、その上山門には、キャスターがルール違反を犯し、召喚したアサシンが門番として構えており、セイバーとアーチャー、どちらかを足止めさせれば各個撃破も可能だ。人質を取られている以上、速やかに救出する必要がある、その状況で、サーヴァント二騎でアサシンを潰そうとするとは思えないからである。又、キャスターと相対するのがサーヴァント一騎なら、マスター権を奪える可能性も出てくる。

それに対し、創名が出した条件は、サーヴァントを潰す手段、潰した後に限らず、衛宮士郎の殺害を禁ずる事。

これにより創名が得られるメリットは、士郎が早い段階で聖杯戦争から脱落し、危険が減ること、聖杯戦争の勝者がキャスターならば呪いに汚染された聖杯でも問題無く使用でき、その際に10年前のような災害が起こらない事。

つまり、キャスターに取って創名はセイバーとアーチャーを下した後は用済みであり、約定など無視して構わない物であると言うこと、それに互いに気付いている。

そして、キャスターは創名が挙げたメリット、それらを創名が求めている事を確信していた。神代の魔術師であるキャスターは、創名の魂の歪みを感じていた。創名の心はツギハギだ。本気で、真剣に愛と平和の尊さを語りながら、他人を虐殺出来る人間だ。本心からやりたくないと呼びながら裏切る事の出来る人間だ。

自分の想いや願いを泣きながら壊して、目的を達成するだろう。創名は実際に、聖杯戦争が平穏に終われば良いと思っっている。だが、平穏に終われば彼の目的が達成出来なくなる。

ゆえに、キャスターとの同盟も、目的の為であり必要なくなった瞬間、裏切りを行うだろう。

どちらが先に裏切るか、互いの思惑を読み合いながら、キャスターと創名は笑いあった。

「あ、そうだ。これオマケ。」

そう言つて創名は、日光が入らないように処理したピンを投げ渡す。

「これは…」

「マキリ・ゾオルケン、桜ちゃんの心臓に憑いてた奴。自我壊して、記憶を抜いたせいで精神グチャグチャで使いもんに成らないけど、キヤスターならそこから記憶を見たり出来るんじゃない？」

「これが御三家マキリの当主…醜悪ね。それにしても、わざわざ記憶を抜く為に精神滅茶苦茶にするなんて、半人前にも程があるわよ。」
「精神に変調を及ぼさずに記憶を覗けんのは兄が対象の時だけだよ。そんだけやつて分かったのは術式2個とか、自分でもねーよと思つてるから言わないで」

精神に介入する魔術は、対象の意思と対魔力の強さで難易度が変わる。自我が崩壊して精神に防壁を張れない相手に、精神を破壊するまではないと記憶を覗け無いというのは未熟過ぎる話だ。しかも、50年と言う年月で得ていただろう膨大な知識の極々僅かな物しか得られないというのは、根本的に才能が無いとしか言えない。

「キヤスターなら、その状態からなんか情報搾り取れない？」

「出来るけど、精神と一緒に記憶も壊れているから時間が掛かるでしょうね。とりあえず受け取っておくわ。」

キヤスターは受け取ったピンを虚空に消し、今後を話し合う事にする。

「この子、ライダーのマスターだったんでしょ、ライダーはどうしたの？」

「令呪を盗つて、自分がマスターになったけどサーヴァント連れてたら流石にバレるから、令呪で仮のマスターから離れない用に命令していた。」

創名の答えに、キヤスターはそんな物でしょ、と頷く。

「キヤスター、さっそく桜ちゃんを捕らえておく場所の罫とか仕掛けよう。自分は夕方に帰るから、それまでに。」

「はあ、好きにしなさい。」

キヤスターは監視と案内の為の使い魔を残し消えた。創名も、使い

魔に案内されて寺の奥へ進んでいく、聖杯戦争を利用して自分の目的を果たす為に：

魔術師の夜

夜になると士郎と凜が帰って来た。本来聖杯戦争は夜に行われるが、学校に結界を張ったサーヴァント、ライダーに狙いを定めた以上夜間に出歩いて、他のサーヴァントと戦闘になり戦力を削られる訳にはいかないからだ。

自分の予想通り、慎二が動いたようで基点の破壊中にライダーの襲撃があつたそう。その際、また士郎が命知らずな行動で一般の生徒を救つたらしく、凜とセイバーが激怒しながらも士郎に好感を持ったようだ。

そして、何よりアーチャーが士郎の稽古をつけ始めたのだ。士郎が、夕飯を作るのを自分に完全に任せたのにも驚いたが、アーチャーが士郎に殺意を持ってないのに驚きすぎて、点検中の拳銃を暴発させそうになった。

自分では珍しい手の込んだ和食に、何時もの如くな手抜き料理と言う普段の士郎が作る夕飯に少し劣るレベルだった。普段は料理に文句を言って来る士郎が、何も言えないほど疲れていた。変わりにアーチャーが食べて文句を言って来た。

……食ってんじゃねーよ。見張りはどうした？バゼットさんがやってる？いや、任せんよ鷹の目持ち。

驚きの三連鎖目、士郎の戦闘能力が恐ろしい速さでレベルアップしている。アーチャーと投影の剣で斬り合う事で、経験が流ているのかも知れない。投影で剣を作るのもアーチャーの指示らしいから原作とか完璧跡形もない。そして、士郎が眠った後、アーチャーから呼び出しをくらい、屋根の上に登る。

「呼び出して懐かしいな。」

「告白でもされたのかね？」

「いや、先輩がゾロゾロ待ち伏せしてた。全員潰したけどね。」

自分の答えに呆れるようにアーチャーはため息を吐いた。

「さて、手短に済ませよう。衛宮創名、この世界の衛宮士郎は正義の味

方にはさせない。」

呆気なく言われた一言、強い決意と後悔が混じっているように感じるその言葉に、自分はふーんと言うだけだった。アーチャーが原作とかけ離れていて当たり前だ。彼は自分の居た平行世界のエミヤシロウだったのだから。

「察しの通り、私は正義の味方として座に招かれた英雄、エミヤシロウだ。正確に言うなら、衛宮創名によって正義の味方にされた、と言うべきだがね。」

「自分、良い仕事するだろ？」

「ああ、まんまとやられたよ」

愉快げに言った自分と正反対に、アーチャーは眉をしかめてそう言った。

「目的を諦めろ、とは言っても無駄なのだろう？」

「無駄と言うか無理だね。自分が衛宮創名である限り。」

「目的を達成するまでに多すぎる被害が出るとしても、か？」

「1の為に10を捨て、1を守るために100を殺し、1を救うために1000を滅ぼしても、自分が躊躇う理由にならない。」

分かりきった事を問答する。こんなやり取り、アーチャーが英雄となった世界での自分と終わらせているハズだ。あるいは、違う答えが返って来て欲しいと言う、祈りに似たものなのかも知れない。

「例え、その結果自身が滅びようともか？」

「世界が滅びようとも、だよ。」

自分の答えにアーチャーは、嘆く様に目を瞑り、次に開いた時には強い意思が宿っていた。

「お前が諦められないと言うなら、『俺』がお前を止めよう。何処にも至れず、果てろ衛宮創名」

「自分の道行きの果ては決まっている。そこにお前はいない、邪魔するなら理想に沈む覚悟をしないとねエミヤシロウ」

少なくとも今やらかす気は無いようなのでその場を後にする。

「自分は理想を抱いた者が沈まぬ海を創るだけ、その海でどれだけの人が溺死しようとも……」

「衛宮くん、ちよつと良いかしら?」

「なんぞ?」

屋根から降り、そろそろ寝ようかと縁側を歩いていると凜に声を掛けられた。近くの部屋には、セイバーの気配を感じる。これは、待ち伏せされたかと思いい、いつでも戦えるように準備を始める。しかし、それは杞憂だった。

「士郎の事で聞きたい事があるの。」

「恋愛相談?」

「ち、違うわよ!今は聖杯戦争関連!」

今は、て事は、いつかは恋愛相談になるんだね。と思つたが、ガンドか八極拳のどちらかが来そうなので黙っておく。

「アイツの行き過ぎた自己犠牲の態度よ、自分がどうでもいいみたいに行動して、止めても聞かなくて:」

「ああ、つまり士郎の行動原理みたいなのが知りたい、て事?」

「そう言うことね。」

成る程、マスターに関連することだから、セイバーもいるのか、それにしても自分はセイバーに徹底的に避けられている。恐らく、自分が切嗣に似た思想で、同じような行動をすると思いい、衝突を避けようとしているのだろう。これは、親の因果を子が報い、と言うのだろうか?

「士郎はね、人間として欠けている。」

関係ない思考を止め、真面目に話す事にする。

「自分と士郎が、十年前の新都の大火災での生き残りだつて言うのは知つてる?」

自分の問いに凜は頷く、士郎に聞いたのだろう。生存者ではなく、生き残りと言つたのは言峰綺礼によつて人間電池となつた。生存者“ があるからだ。

「士郎は自分達だけが助かつたの事に酷い罪悪感を持つた、それは誰かを助けなければ、という思いに変わり、切嗣との “正義の味方に成る” という約束で、士郎は自身以外の全てを救おうとしている。」

「自身をなげうってでも、て事?」

「そう、士郎は自身の命より人を救う事を優先する。そんな生存競争以前のポンコツは、最早人間なんて言えない。」

「士郎はね、〃人の如き剣〃なんだ。」

断定するような自分の言葉に、凜は息を呑んだ。

「人の様に見えても、人として生きる事が出来ない。」

それは、余りにも真っ直ぐで、余りにも悲しい生き方だ。

士郎は、命が平等だなんて幻想を信じている。確かに命に重いも軽いも無いかもしれない、けれど、命には人によって付加価値が違う。家族、恋人、親友、友人、誰もが誰かにとって、他人以上に優先させる物だ。それなのに士郎は愚直に多くを救おうとしている。その先に有るのは、10の為に1を切り捨て、100の為に10を殺す、より多くの為により小数を見捨てる、救いのない結末なのに……

「だから、自分は探してるんだ、〃人の如き剣〃を、〃剣の如き人〃に変える魔法を」

言ってから自嘲がこぼれる。アーチャーに目的を諦めない事を告げ、凜には諦めきれない願いを告げる。

心では迷っているクセに、魂では決まっている自分を嘲笑う声は、頭の中にいつまでも響いていた。

V S 騎兵

「慎二、この結界を解除しろ。」

「ハ、士郎ごときが僕に命令するなよ。」

「あら、私には士郎の方が上だと思っけど?」

夕焼けも沈み始め、夜の闇が這い寄る学園裏の雑木林で三人のマスターと三騎のサーヴァントが対峙していた。2対1で、相手はサーヴァントの花形セイバーとアーチャーである。雑木林と言う、比較的ライダーに有利な場でも戦闘が始まればライダーは勝てない、そう簡単に予想できるほどの戦力差があった。普通なら撤退以外の選択が無い状況だが、間桐慎二はそれを選ばなかった。彼の祖父と妹が二日前から姿を消したためだ。御三家と呼ばれる家系の中、魔術が使えない自分を置いて魔術師の二人が消えた。慎二は、自分が身限られたと錯覚し、既に冷静な判断を下せないほどに精神的に追い詰められていた。

祖父は自我と精神を崩壊させられ、妹は人質としてキャスターに捕らえられている、しかもそれが友人である同級生の手によるものだと知れば、彼はどんな思いを持つだろうか？

「……桜」

ライダーは心の中で呟き、歯噛みをする。二日前の朝、パスをを通して衝撃が伝わってきた。それは、驚きと悲しみ、そして安堵。その後、マスターが変わり、令呪によって前マスターと現マスターの事を探る事、誰かに伝える事を禁じられ、二画面の令呪で偽臣の書を持つものに逆らわず、離れないように命じられ、桜を捜すことも出来ない。その上に慎二の命令に逆らえず、離脱する事も出来ずに脱落してしまふ。令呪は明確な命令ほど強制力を持つ、二つ目の偽臣の書を持つものに逆らわず、離れないと言うのは範囲や期間が広く、強制力は通常より弱く逆らおうと思えば逆らえる、けれど確実に動きが鈍る。そうなれば、忽ち切り捨てられるだろう。桜を救えず、無念のままに消える事となってしまう。それならば、僅かな可能性に掛けて死力を尽く

す。マスターが桜から変わったなら気にせず魔力を吸い上げる事も出来る。

「やれ！ライダー、僕の力を見せつけてやれ!!」

慎二の命令に、鎖着きの杭剣を構え前が出る。

「アーチャー、セイバー、士郎、手筈通り行くわよ!」

「了解した。マスター、彼らに君の敵は役が勝ちすぎてるって教えてやるわ。」

「行こう、セイバー。慎二を止めてやらないと…」

「ええ、シロウ。道は切り開いて見せます。」

セイバー、アーチャーも前に出る、セイバーは風に隠した聖剣を、アーチャーは使い手は無く、作り手が伝説となった双剣を構える。

そして、神話の怪物がその力を解き放つ。

「ん、始まった。」

所変わって衛宮家の茶の間、拠点の守備と言う名の留守番役である創名とバゼットがお茶を飲んでる中、創名がポツリとこぼす。

「学校に使い魔を放ってたのですか?」

「うん、そんな感じ」

士郎達と対決してるライダーが使い魔である事などおくびに出さず頷く。その後、小さな小箱を取り出す。

「それはなんですか?」

「結界の触媒みたいなもの、いい加減この家も本格的に守りを固めないとね。」

小箱の蓋を開けると中には銃弾が入れている。

それは『起源弾』衛宮切嗣が自らの骨を弾丸に混ぜ込んだ特殊な弾丸、撃ち込まれた対象に切嗣の起源である、「切断」と「結合」を発現させ、あらゆる神経を滅茶苦茶にする魔弾であり、魔術師殺し衛宮切嗣の魔術師としての切り札。

その弾丸を握り締め、創名は魔術回路を起動させる。

「起きろ…」

「流れる時よ

巡る時間よ

その理を歪めよ」

バゼットは創名を中心に、正確には創名の持つ弾丸を中心に世界が歪められていくのを感じた。

「我は衛宮に列なる者

血の連なり無くとも縁を持つ者

界と界を隔てる者」

空気が誰かの所有物となるような違和感。既に魔術師の工房として機能し始めている。

「ここは衛宮^{場所}《まもる》べき宮

時の狭間を区切りとし、時間よ我が軍門に下れ。」

創名の手の内で起源弾が砕け、儀式魔術としての結界が張られた。これは衛宮の時間操作魔術の応用、時間の流れを結界の内と外で僅かなズレを生み出し、概念的に外界との隔たりを作る大魔術、創名によって保管されている衛宮の魔術刻印を基点に、衛宮切嗣の起源を内包した弾丸を触媒にしなければ発動出来ない、切嗣が息子達の為に晩年に用意した切り札である。

それを肌で感じたバゼットは、執行者としての勘が警報を鳴らすのを感じた。素晴らしい大魔術であるが、工房の守備として発動させ続けるには魔力を食いすぎる。例え、魔力炉を用意しているとしても一晩持たせるのがやつとだろう。明らかに、守りの為の結界ではない、ならば何故、今この結界を発動させたのか？

「さて、準備不足も甚だしいけど、コソコソ策謀を巡らすのはおしまい。これからは堂々と策を弄そうか。」

ツギハギの少年は、明日の天気を尋ねるような気軽さでそう言った。

セイバー&アーチャーVSライダーは、ライダーが圧倒的に不利になっていた。セイバーがライダーを猟犬の様に追い、攻撃を避ける為に生じた隙をアーチャーが見事な射撃で狙い撃つ。士郎も慎二を狙い、攻勢に出るせいで慎二を守る為に動かなければならない。しかも、士郎の投影と体術は、アーチャーと打ち合った僅かな時間で格段

に向上している。数合とは言えライダーと打ち合い、セイバーが攻撃する時間を稼がれるほどである。

頼りの魔力は、戦闘が始まった時点で限界を保つ最低限の魔力量しか供給されなくなった。宝具を使えるだけの魔力もなく、その命運は後数十分で尽きるだろう。

しかし、ライダーは諦めない、桜を救うために……

ライダーは慎二を抱え、跳躍しその怪力を持って慎二を士郎に投げつける。

「うわああ!!」

「慎二ー!」

叫びながら投げられた慎二を、投影の剣を消して受け止める。それは、致命的な隙だった。

「戯け!!」

アーチャーが叫んだ時には、ライダーは木の幹に着地していた。後は再び士郎に向かって跳躍し、隙の出来た士郎を殺すだけだ。マスターが一人殺せたら、その動揺を突いて逃げ出せるかもしれない。

「……あ」

しかし、それは出来なかった。木の幹を蹴り、跳躍しようとした瞬間、魔力の供給が切れた。マスターが契約を破棄したのだ。力が一瞬で抜け、その隙を突くアーチャーの矢に、心臓を射抜かれた。

霊核を貫かれ、地に墜たライダーは、それでも諦めずに足掻く。

「……お願い……です。……桜を助けて」

「っ!桜がどうしたの!?!」

ライダーの言葉に、凜が血相を変えて問いください。

「……一昨日の……朝に……令呪を奪われ……て……」

契約が破棄された事で令呪の縛りから解放されたライダーは、凜達にそう言い残して消えていった。

「慎二ー桜は?」

「一昨日の朝に、士郎の所に行ったきり帰ってないよ。何だよ……桜がマスターじゃないなら、僕は……」

士郎の問いに、呆然としていた慎二は答え、その後は自分にしか聞

こえないほどの小さな声で、何かを呟き続けている。

対して、士郎は自身の内に浮かんだ最悪の考えに顔を青くする。

「……遠坂、一昨日の朝、創名が桜を当校する前に引き留めてるんだ。それに、その日から桜を見てない。」

士郎の言葉に、全員が表情を固くし、言葉を失った。

喰らい合う世界1

走る、駆ける。凜と士郎は己のサーヴァントに抱えられ、高速で移動していた。半人前な士郎はともかく、一流と言っても差し支えの無い凜までも魔術の秘匿を考えずに、である。そこには、常に余裕を持って優雅たらしんとする遠坂の魔術師ではなく、妹を想う姉としての焦燥があった。

「アーチャー、もつと速く!!」

「落ち着けマスター、冷静にならねば足元を掬われるぞ。」

「でも……」

アーチャーは諫めながらもスピードを上げ、セイバーも続く。

士郎達が家に着くのと同時に、小さな傷を大量に負ったバゼットが家から飛び出してきた。

「バゼットさん!」

「ハイヴエスト創名が攻撃してきました。退避しましょう!」

「……っ!!」

バゼットの言葉に士郎は息を呑む、予想もしていなかった最悪の事態だった。

「つまり、騙されてたって訳ね。上等じゃない、たーぷつりお礼してあげなきゃね。」

固まる士郎を余所に、冷静さを取り戻した凜は口元だけの笑みを浮かべ、拳を握っている。

「凜、どうやら性質(たち)の悪い結界が張ってあるようだ。」

「……確かに、厄介ね。」

アーチャーに言われ結界を調べた凜は、舌打ちでもしそうな声で毒づいた。

「どんな結界なんだ?まさか、学校に有ったみたいなのヤツか?」

「そう言うのじゃないの、寧ろ真逆、場所と聖域を区切るタイプの正統的な結界よ。」

凜は、結界の境に手をかざしながら説明する。

「何かを外界からずらして概念的に境を作ってるの、結界の中は魔術的に冬木の土地と言えないぐらい異界が出来てる。」

「その何が問題なんだよ。」

「結論を言うと、この結界の中では聖杯の力が及び難くなってるの、サーヴァントを現界させる魔力の負担をほぼ全てマスターが負うことになるわ。」

凜の言葉に、セイバーは眉をひそめる。セイバーは現界する魔力を大量に食う。現在も士郎からの魔力供給はないが、パスを通じて現界の必要最低限の魔力は流れてきている。半人前の士郎の負担になっていないのは聖杯の補助が有るからで、それが無くなれば、士郎の魔力量ではセイバーを現界させ続ける事は難しい、確かにサーヴァントとマスター、どちらの戦闘力も削る厄介な結界である。

「サーヴァントが入らなければ大丈夫だから、突入は私と士郎、それに単独行動スキルがあるアーチャー、いくら工房に引き籠ってもサーヴァントが一体いれば充分倒せる。セイバーとケガをしてるバゼットはここで待機、逃走の阻止をお願い。」

「確かに、それが最良かもしれません。士郎、気を付けて。」

凜やセイバーは創名をただの魔術師として考えてそう結論を出した。魔術師殺しとしての創名を知るバゼットはそれを伝え、突入を止めようとするが、出来なかった。創名と結んだ、魔術師殺しとしての創名を士郎達に教えない”と言う契約《ギアス》がバゼットを阻害する。

「(これまで折り込み済みだったと言う事ですか、ハーヴェスト!)」

「気遣いは無用です。執行者として工房破りの経験は有るので、同行すれば力になります。」

「分かったわ。」

「……創名は、何が目的なんだ?」

血を吐くような士郎の言葉に、アーチャーは僅かに顔を強張らせる。

「オーケー、行くわよ!」

颯爽と衛宮家に踏み込む凜達、家の中や庭が銀の砂に埋め尽くされ

ていた。

「これは、創名の投影だ…」

「ええ、彼はこの砂を操って攻撃してきました。」

「砂嵐による広範囲の攻撃か、しかも、ただの砂ではなく金属のようだ。」

解析魔術、特に剣に関する物の解析を得意とする士郎とアーチャーは、この場にある砂全てが粉碎された剣である事に気付いていた。

『復元開始、投剣始め。』

どこかから響いた詠唱に反応したのはアーチャーとバゼットだった。砂が三本の剣に修復され、射出されたものを双剣と拳で碎き落とす。碎かれた剣は再び砂へ戻る。

「へえ、話し合う気も無いって事かしら？……いい度胸だわ。」

「遠坂、殴るのは良いけど、その前に話をさせてくれ。」

「はあ!?殴るので済ませる訳ないじゃない!」

「そうか?遠坂は優しいし、理由があれば、何だかんだで赦してやれるだろ?」

甘い事を言う士郎と、優しいと言われて怒りか照れかで顔を赤くする凛、突然のラブコメ展開にアーチャーは少し引いていた。己の所業を客観的に見てしまったのはある意味不幸である。

『…うくん、士郎がラブコメってるけど、空気読んで攻撃しない方が良い?』

「そうやって声をかける時点で空気が読めるとは言えんぞ。」

「よ、余計なお世話よ!!」

創名とアーチャーに顔を真っ赤にした凛が食いつく。

『そう?じゃあ、遠慮なく。』

復元開始、投剣始め。10度工程複製を命ず。』

玄関から居間に続く廊下の砂が舞い上がり、十の剣と成り水平に射出される。アーチャーが前に出て悉くを碎くが、碎かれたそばから剣に復元され再び襲い来る。

「キリがないな、マスター術者の所まで駆け抜けるぞ。」

「分かった。」

凜が頷き、士郎とバゼットも肯定する。

「…今だ！走れ!!」

四人が百本の剣を砕いた後、剣の弾幕が切れる。その瞬間、アーチャーの号令で全員が駆け、居間へ飛び込む。

そこには、旅行鞆を持ち、呆れたように士郎達を見る創名が居た。

「おかえり、と言いたい所だけど、予定より早すぎるよ。」

「創名…!」

衛宮士郎 衛宮創名
人の如き剣とツギハギ人形の平行してきた道行きは今、交わる。

殺し合いと言う互いに望まぬ場所で……

喰らい合う世界2

敵は、英霊に英霊候補、執行者と稀代の魔術師、創名は溜め息を吐く。

「本当に、早すぎだよ。バゼットさんが脱出してから異変を知って、そこから駆けつけたらもぬけの殻、みたいな計画だったんだけど……何がいけなかったのかな？」

「ライダーだよ、衛宮創名。彼女が、マスターだった間桐桜の異変について消滅間際に言い残した。」

「あー、士郎を庇う為に契約切ったから令呪が無効になったのか、なら、今回の失敗原因は桜を救わんとするライダーの想いかな？」

全く、反英雄なんてとんでもない、立派な英雄だよね。」

ライダーの意志を讃えるようにそう言った創名を凜は強く睨み付ける。

「で、桜をどうしたの？」

「生きてるよ。まあ、起きないように意識を封印してるらしいけど、知ってどうするの？御三家の約定で、貴女は彼女に関われないんですよ？」

「……っ!!」

からかいを含んで言われた言葉に凜は宝石を握り締めるが、感情に振り回されて出鱈目に魔術を使う事は無かった。ただ、さらに強く創名を睨み付ける。

「本当にツイてない、自分は誤魔化しようが無くなるまで、こうやって士郎達と戦う気は無かったのにさ。」

「……創名！どうしてだ？何がしたいんだお前は!？」

また溜め息を吐く創名を士郎が詰問する。

「何がしたいか？他愛ない事だよ、士郎。自分は約束を果たすだけだよ。」

「ふん、その約束を歪めているのはお前だろう。」

「約束は歪んでないよ。今も昔も真っ直ぐに自分の道行きを示して

る。歪んでるなら、自分だろうね。貴方と同じでさ。」

皮肉気に言ったアーチャーに創名は嘲笑で答える。その笑みは果たして、アーチャーへ向けた物か、自身へ向けた物か……

「御託は結構。アンタが何をしたいかなんて知らないわ、桜の居場所を吐きなさい。」

「さすが遠坂さん、野良犬位なら焼き殺せそうな眼力……」

凜の殺気の籠った言葉にも創名は茶化して返す。それはどちらかと言うと、そうしなければやってられないという開き直りである。

「はあ、勝ち目が無いからやりたくないけど……」

「言ったでしょ？御託は結構って！」

「復元開始！」

凜のガンドの嵐が創名を狙い、創名が復元した大剣を削る。

「踊れツギハギ人形。剣舞を見せよ。」

僅かな詠唱で室内に砂嵐が吹き荒れ、詠唱を行おうとしていた凜と、その側のアーチャーを襲う。舞い上がった砂は剣へ転じ、再び襲い掛かる。

魔術師の詠唱は、世界に訴える物と自身に訴える物がある。

前者は世界と自身を繋ぎ、魔術基盤にアクセスする儀式としての詠唱。後者は自身を魔術に適した体に作り替える自己暗示としての詠唱。

一般的に、前者の詠唱は長いが大規模な魔術が使え、後者は詠唱は短いが大規模な魔術は難しくなる。

創名の魔術は、詠唱の長さとその効果が合っていない。短い詠唱で、簡易儀式魔術と同規模な魔術を起こしている。

それは、創名が現在扱っている魔術が創名が持つ固有結界からの派生で有ることが原因である。固有結界とは即ち自身の心象風景^{精神世界}の具現化、術者以外扱えぬ魔術基盤を持つことと同意であり、知る者が少ないほど効果が上がると言う魔術の理の通り、一見して魔術における等価交換の原則を無視したように見える、理不尽なまでの魔術を振るう事ができる。固有結界が、最も魔法に近い魔術と言われるゆえんである。

創名は、士郎達との圧倒的な質　の差を、反則的手数で埋めていた。しかし、攻撃を緩めれば即座に反撃を喰らい、敗北する。創名は、自身の工房と言う遙かに有利な場でさえ、押し切るか、負けるかの綱渡りを強いられていた。

舞い上がった砂が、足下の砂が大小様々な剣となり。全方向から攻撃し続ける。

「繰り返す。踊れツギハギ人形。」

「…切りがないな。私の宝具を使い、衛宮創名を隔離する。その間に基点か、魔力炉を破壊しろ。衛宮士郎。」

「分かった。」

「I am the bone of my sword　体は剣で出来ている」

そして世界を具現させる大魔術が紡がれる。錬鉄の英雄の最奥にして最大の切り札。

「させるか！」

「獲った!!」

アーチャーの詠唱を防がんとし、攻撃をアーチャーに集めた際に、凜が宝石を投げ込み爆発させる。

「Steel is my body, and fire is my blood　血潮は鉄で、心は硝子」

「ふん！」

爆発から身を庇った創名の両腕は服が弾け、血が流れている。そこに距離を詰めたバゼットが、ストレートを放つ。それを転がり無様に避ける。その場所には既に士郎が待ち構えていた。

「I have created over a thousand blades. Unaware of loss. Nor are we of gain　幾たびの戦場を越えて不敗。ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし」

「安心しろ刃は潰してある。」

「出来るか！形骸よ、命をなせ。」

降り下ろされる刃より、創名の魔術が効果をなす方が早かった。

「Withstood pain to create weapons. waiting for one, survival 担
い手はここに孤り。剣の丘で鉄を鍛つ」

銀の砂が、二メートルほどの大蛇となり士郎に絡み付きその動きを止める。

それはアイリスフィールが夫と肩を並べる為に編み出した攻撃的錬金術、オリジナルは針金を鷹の形に編む物だが、創名は自身の属性である「剣」で死と転生つまり、特性である「崩壊と再生」のシンボルである蛇を造り出していた。

「I have no regrets. This is the only path ならば、我が生涯に意味は不要ず」

同じように大蛇を造りだし、アーチャーへと向けるが、それが到達するより先にアーチャーの詠唱が完了する。

「My whole life was "unlimited blades works" この体は無限の剣で出来ていた」

発動する大禁呪、世界を捲りかえす結界はアーチャーを中心に凜と創名を巻き込んで心象風景無限の剣製を具現化した。

それは剣群の丘、空は希望を奮い立たせる朝焼け、そして、この世界の中心にして王はただ一人

「ここは私の固有結界、アンリミテッド・ブレイドワークス無限の剣製

御覧の通り、ここにある剣はすべて贗作。しかし、この世界は無限に剣製を行い続ける。

さて、世界を敵にする覚悟は出来たか？衛宮痛みの体現」
世界の王はそう宣言し、アーク世界の敵を挑戦的に睨み付ける。

それに対し、創名は淡く微笑んだ。羨むように、哀しむように……
「自分にこの固有結界を使うって事は、本当に貴方の世界の自分は上手くやったんだね」

「ああ、誤魔化しきれなくなるまで誤魔化され続けたよ。」

「はあく、せめて後5年有れば完璧に暗躍しきれただけだ。」

「私の世界の君も言っていたよ。5年早ければ完璧には行かなかったと」

アーチャーの世界において、創名は第五次聖杯戦争から十年後の第六次聖杯戦争で表舞台に出てきた。それも、完全に姿を現したのは最後の戦いでのみだった。

「だから、貴方は自分に問いを投げ掛けてきた。貴方の世界の自分は、何も語らなかつたから…」

「……その通りだよ。私は創名が本当に望んでいたことを最後まで気付けなかった。最後になるまで誤魔化されてた。

だからこそ、俺はここに在る。お前を、救う為に……」

その言葉に、創名は“人間”を見た。衛宮士郎の誰もを救いたいと言う思いは、“剣”としての思いであり、自分に還らない願いだ。しかし、アーチャー^{エミヤシロウ}の目には誰かの為の願いではなく、自分の願いを持つ“人間”特有の強く、尊い光があった。

創名は^{エミヤシロウが“人”であること}その事実に、狂喜した／恐怖した

「じゃあ、教えてあげよう。自分は衛宮創名。

痛みの実現であり、罪の証明

魔術属性を剣、特性に崩壊と再生。その起源は……」

「輪廻」

創名の言葉と同時に、創名の周囲の剣が砕け、銀の砂と成って創名の周りを舞う。

「骸は剣で出来ている」^{からだ}

創名の表情が変わる。右目からはハラハラと涙を流し、左目は愉快そうに細められ、唇の右側は嘲笑するように歪められ、左側は堪え忍ぶ如くに歯を食いしばる、ツギハギの表情。

「葬送に意味は無く、葬列は無入」

目的の為に自身の願いを踏みにじる事に涙し、自身の行いに涙する自分を嘲笑する

「幾千の命を摘み 幾万の屍を積み 不滅」

アーチャーが、その表情に目を見開き、剣群に攻撃させる。しかし、創名は最低限致命傷を避けるだけで、腕を刺されようが、足を深く斬られようが詠唱を止めない。

「ただ一度の誠実もなく ただ一度の背約も無し」

刺さった剣も砕け、創名が纏う銀の砂になる

「誓者は此処に、独りきり 破片の砂漠で血を流す」

創名の詠唱に怯えるように、剣群が震えだす。

「ならば、我が生涯に理解は不要」

そして、世界が紡がれる。剣群の世界を喰らうツギハギの世界が

……

「我が道行きの結果は 無限の剣の墓所だった」

「起動しろ。無限の劍骸」

無限の劍骸《unlimited blades j unk》

創名を中心に銀の砂が広がっていく、砂に吞まれた劍は砕け砂となる。

それは、銀の砂漠だった。空は夜に蝕まれ、天上にはステンドグラスが浮かび、約束の夜のように美しい月が輝く。
無限の劍群を喰らい、無限の劍骸は展開された。

「御覧の通り、この世界は崩壊と再生の劍の墓所。貴方の世界の天敵。さて、世界に溺れる覚悟は出来たか？正義の味方」

そう宣言した創名の姿も変わっている。劍群による傷は消え、代わりに縫合痕が体中に走り、それを境に肌の色が変わる。その姿はさながらフランケンシュタインの怪物のようだった。

その姿を見て、アーチャーが動揺する。それと共に、凜にアーチャーの記憶が流れ込む、宝具を使用した事で魔力を渡す為のパスが強化され、動揺の元になった記憶が白昼夢のように浮かぶ。

それは、成長した創名の姿だった。今と同じツギハギの姿で、体中から血を流しながら清々しく微笑んでいる。

「ん？この姿は固有結界の副作用だよ。心象風景を具現化するとき、自身の姿も魂のイメージが反映ちゃうんだよ。」

創名はアーチャーと凜が自身を凝視するのを、不思議そうにしながらそう言った。ケラケラと笑う創名に正気に戻るアーチャーと凜。

「投影開始」

アーチャーが投影を行い構えるが、次の瞬間に投影した干将・莫耶が砕けた。

「何!？」

「言っただろ、この世界は貴方の世界の天敵だって……」

この世界では、全て武器が崩壊する。ナイフから伝説の聖劍まで例外無くね。」

それが無限の剣骸の特性、あらゆる武器を破壊し、その破片を内包する世界。

「宝具を破壊できるって無茶苦茶じゃない!」

「しようがないよ、武器は壊れるのがこの世界の理なんだから。」

まあ、形勢逆転って事で。」

創名はそう呟いて、右手を挙げ降り下ろすと、それに合わせて、砂漠の砂から数十の剣が復元され敵を滅さんと飛ぶ。

「熾^{ロー・アイ}天覆う七つの円環!!」

だが、串刺しにするはずだった剣の空軍は、アーチャーが投影した花卉の如き盾に弾かれ、砕け散る。

「やはりな。」

「……もうバレた? 初撃くらい当たってよ。」

「悪いな。生前も弟に空気が読めないとよく言われた。」

溜め息を吐きそうな創名に、アーチャーがニヒルに笑いかける。

「武器が崩壊する固有結界、お前自身もその理に縛られる、今の剣群は随分と脆かった。」

それにこの固有結界、武器は壊せても防具は壊せない。違うかね?」

「その通りです。なんで、初見で気付くかな?」

「防具が崩壊するなら、これもそうなっているだろう。だから気付いた。」

アーチャーはそう言って、右手のガンドレットを示す。

創名は今度こそ溜め息を吐いた。

アーチャーの言う通り、固有結界内では創名の持つ武器も崩壊してしまう。だから固有結界を使う可能性を考え、アンコール等の礼装を持っていなかったのだ。それにしても、自分が贈る装備が原因とは……

「ある意味自業自得?」

「ククツ、確かにこれを作ったのは平行世界の衛宮創名だな。」

互いに余裕を見せ付ける様に笑い、それが止んだ瞬間。

「フツ!!」

「ぶっ潰せ迎撃!!」

アーチャーが砂漠を疾走し、創名がそれに剣を飛ばす。しかし、剣達はアーチャーが右腕を振るたびに砕かれ、砂漠の砂へと還る。

そして、アーチャーが創名の前まで距離を詰め、創名が避けるより速くガンドレットの拳で殴り付ける。

「グツ!!」

グシャア、と言う音を立てて体を庇う為に出された創名の左腕が限界を超えて軋む。筋力Bの英霊の拳を受けて創名は吹き飛び、砂漠で数度バウンドして止まった。

「やったの?」

「それはフラグだよ遠坂さん。」

凜の言葉にふざけて返しながら創名は立ち上がった。その体には、殴られた傷は無かった。

「成るほど、再生とはそういうことか。」

「そう、この世界では自分は崩壊しただけ再生する。」

高速自己再生、それが無限の剣骸のもう一つの特徴。たとえ心臓を潰されても、刹那で再生を完了するほどの効果を発揮する。

「その分、固有結界自体の攻撃力が低いようだがな。」

「……意地悪だ。」

気にしていたのか少し凹んだように返す。砂嵐による攻撃では、概念武装のコートを突破できず、復元した剣は砕かれる。確かに、英霊を相手取るには決定力が足りない。

「奥の手使って逆転、てパターンじゃないのかな?普通。」

「私も奥の手をあつさり破られたから、お互い様だろう。」

創名が手数で攻めようと、百本以上の剣の復元を用意し、アーチャーがそれをさせまいと、再び拳を握った時、世界が軋んだ。

「魔力炉壊されたか、あくあせつかく格好つけたのに。」

自分の勝機が無くなり創名は肩を落とす。

そして、無限の剣骸が蜃気楼のように消え、世界が元に戻る。既に、士郎、セイバー、バゼットがそれぞれの武器を持ち、待ち構えていた。「あはは、この面子対一人とか、オーバーキル狙い?」

「随分と余裕のようですね、キズナ。それとも、まだ何か隠してるのですか？」

「隠し事なら一杯、ほらよく言うよね、人には知られたくないことの一つや二つや八百万ぐらい有るって。」

「いや、それ多すぎるぞ。」

朗らかに言う創名をセイバーは睨みつける。しかしそれはまるで、創名を通してその先の誰かを睨んでいるようだった。だから、セイバーは気付けない。衛宮切嗣と衛宮創名を重ねて見ている内は、その策を防ぐ事が出来ない。

「さて、一応選ばせてあげるわ。大人しく降参して、傷を最小限にするか、このままやって最悪死ぬか、どっち？」

「どっちも嫌かな。」

「そう、じゃあ……」

その瞬間、戦闘が始まった時部屋に置かれた旅行鞆が閃光と凄まじい音を立てて破裂した。

魔術で作られた特製スタングレネード、創名の魔力で起爆ができ、旅行鞆と言うサイズのお陰でかなりの制圧力を持つ。

閃光と音が止んだ後には、創名は庭に移動していた。

「あれで、誰も気絶してないとかチート過ぎです。」

そう呟いて、庭の死角に隠されていたスーツケースを取り出す。

「……これで逃げられると思ってるのかしら？ おあいにく様、逃がさないわよ。」

凜がふらつきながらもそう宣言するが、創名はそれに笑って言う。

「思ってるよ。……キヤスター。」

「はいはい、呼んだかしら？」

創名の呼び掛けに答え、虚空から現れたサーヴァントに、全員が固まる。

「今日は迎えに来てくれたんだ。」

「ええ、感謝して頂戴。」

創名は、笑いながらそう言ってキヤスターの手に掴まる。

「創名ッ!!」

「じゃあ、またね。」

士郎の叫びを無視して、創名はキャスターと共に虚空に消えた……

英雄エミヤ

「さあ、話して貰うわよ。」

創名が居なくなり、投影の銀の砂も消えた衛宮家の茶の間で、アーチャーは自身のマスターに詰め寄られていた。

「話す、とはなんのことかね？マスター。」

「アンタの真名に創名アイツとの関係、その他諸々よ。」

誤魔化そうとするなら令呪の使用も辞さない剣幕で言ってくるマスターにアーチャーは溜め息を吐いた。

「他のマスターに真名を知られて良いのかね？」

「ええ、構わないわ。」

桜が関わっている以上、凜はかなりの無茶をする。それを知るアーチャーは自身だけで創名を止めることを諦めた。

「良いだろう。と言っても、私と衛宮創名の因縁など聞いても楽しくないだろうがね。」

「さて、まずは簡単に済む衛宮創名の目的から話そうか。」

アレの目的は単純にして明確、幼き日の約束の達成、衛宮士郎を正義の味方にする事だ。」

「創名は、俺を正義の味方にする為に桜を浚ったり、攻撃してきたのか？」

「確かに、その目的でどうしてキャスターと繋がっていたの？」

士郎と凜の言葉に、アーチャーは僅かに目を伏せる。

「それは私と衛宮創名の因縁に深く関係する。」

「……君たちは、英雄と成るためには何が必要だと思う？」

「え？その、諦めない信念とかか？」

「強さ、でしょうか？」

士郎とバゼットが自信なく言った後、セイバーと凜が口を開いた。

「……時代、ですわね。」

「そうね、じゃあ、私は怪物だと思っわ。」

英雄としての自身を思ったのか、セイバーの言葉には重みが有っ

た。

アーチャーは、セイバーと凜にその通りだと告げた。

「英雄も時代が違えば殺人者でしかない。と言うのはわりと有名な言葉だ、そして、これは言い替えれば、殺人者も時代さえ違えば、英雄になり得ると言うことだ。」

「……そうですね。」

セイバーの脳裏にかつて衛宮切嗣が言い放った言葉が蘇る。英雄達が殺人に、武勇や名誉といった尊いものがあると幻想を説いたせい
メツキを被せた
で多くの人々が戦い、血が流れたと。

「人々から恐れられた怪物を殺した者は、すべからく英雄だ。その怪物がどんな想いを抱えていようがな。」

凜が思うのは、先刻撃破したライダーだ。彼女の真名はメドウーサ、怪物の筆頭反英雄のような存在だが、彼女はただ一人を救うべく最後まで足掻いていた。

「創名は、聖杯を持ってその二つの英雄となる条件を満たそうとして
いるのだよ。」

「どう言うことだよ!? 創名がそんな……」

声を荒げた士郎を視線だけで制し、アーチャーは言葉が続けた。

「私の真名は、エミヤシロウ。ただ一人アレンの為の絶対悪マユと成った衛宮創名を殺し、英雄と成った道化のような救世主セイヴァーだ。」

「……え?」

「やっぱり。」

アーチャーの言葉に言葉を失った士郎、アーチャーの真名に納得する凜。セイバーとバゼットは言葉も無かった。アンリ・マユとは、ゾロアスター教最大の邪神、この世全ての悪。ただの人間がその存在に成れる筈が無いからだ。しかも、それを殺した? 混乱する者を置き去りに話を進めるアーチャーは、凜に一冊の古ぼけた手帳を差し出す。

「これを。」

「これって……」

「衛宮切嗣の本当の手記だ。君が創名から渡されたのは核心が書かれ

「ていない偽物だ。」

英雄と成った衛宮士郎が生前持ち歩いていた手記を読む内に、凜の顔色が変わる。

この世全ての悪の役を押し付けられた人間の亡霊が召喚された事、聖杯の汚染、それに伴う聖杯戦争におけるイレギュラー、そして、聖杯が原因で新都の大火災が起きた事。

「何よコレ!?!遠坂はこんな物を求めてたつて言うの?」

「そんな……!」

セイバーは、自分達の戦いが原因で多くの人々を死へ追いやられた事に身を震わせる。

「今の聖杯はあらゆる願いを破滅的にしか叶えることは無い。それならばと、第六次聖杯戦争を制した創名は破滅的な願いを聖杯に託し、願い通りただ一人以外に殺されない邪神と成った。」

「その一人は……」

「ああ、私だ。」

全員がアーチャーの言葉に沈黙した。

「ただ一人の為の絶対悪と成った創名は、私が殺すまでに人類の半分を呪い殺していた。殺したくないと泣き、自身が涙する事を嘲笑するツギハギの顔をしながら……」

「創名は、そんな事をする奴じゃない!!」

士郎の叫びにアーチャーは頷く。

「確かに、創名の人格はそれを良しとしない、だが、衛宮創名は衛宮士郎と同じように心に傷を持つ。」

「どう言うこと?」

「強迫性障害を知ってるかね?創名のそれとは異なるが、最も近いモノだ。」

強迫性障害、ある特定の考えや心配が浮かぶと、一定時間それで頭が一杯になり、無理に打ち消そうとすると不安が強まるが、自分が馬鹿馬鹿しい事で悩んでいる自覚があるという強迫観念や、その不安を拭う為に特定の行動を続ける強迫行為からなる精神の障害である。例えば、不潔な物に触れたと思ってしまう、その不安がはれるまで手

を洗い続けるなどの症例がある。また、身動きが取れなくなり、食事などの生命活動さえ出来なくなった症例もある。

アーチャーは、創名の魂の歪みからこれに似た状態にあると説明した。

「すでに創名は自身を止められない。だから、私が創名を止めようとした。」

「アーチャーは拳を握り締めそう言った。」

「ただ一人の為の絶対悪と成った創名は衛宮士郎以外には殺せない。いや、正確には殺せるが直ぐに転生する。創名の起源は、輪廻。その起源を持つものは魂の形質が変化しない、詰まり、創名の歪んだ魂のままだ。」

そして、転生はサーヴァントに近い形の肉体を作り、それに転生する。アラヤの守護者でも殺しきれなかった怪物だ。」

「だから、そうなる前に止めたかった。」

「ああ、その通りだ。止められる事が、創名にとって救いになる。」

アーチャーがそう言つて黙ると、全員が何も言えなくなり、気まずい沈黙が流れる。

「あー、もう！ちよつと頭を整理するから今日はここまで！これから
の事は明日の朝話し合うわよ。」

凜がそう言つて、その場を後にすると、残された面々も動き始める。
明日からの聖杯戦争に不安を抱えながら……

凜は夢を見ていた。それは、自分のサーヴァントの記憶。

多くの人間が血さえ流さず死んでいる。そんな中に彼等はいた。赤い外套に銀のガンドレッドを身に纏ったエミヤシロウと、ツギハギの体で爽やかに笑う、ただ一人の為の絶対悪と成った創名。

創名の胸には、幻想のように美しい鋼の剣が突き立てられている。

ああ、これはエミヤシロウが英雄正義の味方に成った時なのだと悟る。

「ありがとう、自分は救われた。」

「……創名。」

体中から血を流し、自身が死に向かっているのに、創名は解放され

たように清々しく笑っている。

「泣かないで正義の味方士郎君は間違っていない。」

士郎は何も言わず、創名に手を伸ばす。しかし、その手が触れる前に、創名の体は銀の砂となり、崩れて消えた。もう一度、泣かないで、と呟きながら。ただ一人の為の絶対悪と呼ばれた青年は、魂の欠片も残す事なく風に消えた。

創名にとって、これは辿り着くべくして辿り着いた道行きの果て、あの月下の約束の日から決まりきっていた最後。しかし、士郎にとって最も望みから離れた最後。

切嗣に憧れ、誰をも救わねばと、足掻いていた自分が破滅しなかったのは創名が、家族がいたからだ。

それを、自分の手で殺した……

「ああ……ウアアアアアアアアアアア!!」

それは、英雄の産声にして慟哭。士郎は、多くの人々を救った。けれど、創名を本当の意味で救うことが出来なかった。

それが、悔しかった。恨めしかった。自分は多くの人々をただ一人の為の絶対悪から救えなかった。けれど、それより創名を救えなかった事の方が自身を苛む。自身の半身を引き裂かれたように出来た魂の創（きず）で士郎は初めて、主観的な命の不平等さを知った。

この日この時、衛宮創名の死を持って

衛宮士郎は／人の如き剣は

正義の味方に／剣の如き人に

成った。

慟哭は、彼以外いない街に響き渡り続けた。

補足説明3

衛宮創名

魔術属性：剣

魔術特性：崩壊と再生

起源：輪廻

魔術の根本に固有結界があり、固有結界内の理である崩壊と再生に
関連する魔術を得意とするが、それ以外はあまり上手くない。

起源に輪廻を持ち、本来は転生しても性格などが変化しないが、心
象風景を融合させられた結果、魂が歪み、行動と本心が食い違ってい
る。

固有結界：無限の劍骸

剣を初めとした様々な武器が砕けた破片で出来た砂漠。空にステ
ンドグラスと月があり、本人の姿も縫合痕が大量にあるフランケン
シュタインの怪物のような姿になる。

結界内部の武器を絶えず崩壊させ、創名を再生する効果を持つが、
自身の武器にも適用される為結界内で復元した武器も直ぐに壊れて
しまう。

また、武器以外は破壊出来ないので、盾系や乗り物の宝具、経験が
宝具化している英霊には歯が立たないが、セイバーなど武器が宝具で
ある英霊にとって天敵になり得る。

衛宮士郎の無限の劍製のように、本来の持ち主の経験も複製する事
もできない。

← 邪神モードの創名と、英雄だと認知されている世界で最適性クラ
スに召喚された英雄エミヤのステータス

【クラス】アヴェンジャー

【真名】ただ一人の為の絶対悪

【性別】男性

【身長・体重】183cm 70kg 【属性】混沌・悪

【筋力】 E 【魔力】 E 【耐久】 E 【幸運】 E 【敏捷】 E 【宝

【具】 E↪EX

【クラス別能力】

無し

【保有スキル】

神性・EX 元は人間であるが、概念として最高位の邪神と同等、増悪を自身への信仰と成し、魔力に変換する事が出来る。

増悪連環：EX 負の感情を自身の力とするスキル。自身のマスターが誰かを憎むほど、他者がアヴェンジャーを嫌悪するほど全ステータスが上がっていく。第四次聖杯戦争でバーサーカーの代わりに呼び出されていれば、すべてのステータスがB+程になる。

【宝具】

無限の剣骸

ランク：E↪A+

種別：????

レンジ：????

最大捕捉：????

衛宮創名の固有結界、本人の象徴として宝具かしている。

全ては眠る、安らかに

ランク：????

種別：対人類宝具

レンジ：∞

最大捕捉：∞

あらゆる人間を呪殺する邪神の呪い、人で有る限り逃れる事は出来ず、抗う事も許されず、ただ眠るように死んでいく。

ただ一人の為の絶対悪

ランク：EX

種別：転生宝具

レンジ：0

最大捕捉：1人

世界に増悪ある限り転生を続ける宝具、創名の起源が宝具化したもの。どれだけ殺されようが転生を妨害する宝具を受けようが、増悪を

糧に復活を遂げる。

第六次聖杯戦争に勝利しアンリ・マユと成った衛宮創名。人の増悪が有る限り転生を繰り返す。あらゆる人間を呪殺する宝具を持ち、人間で有る限り如何なる英雄でも勝つことは出来ない。転生を阻害する礼装等も無効化する為、完全に消滅させることは不可能。ただ一つの例外として、衛宮士郎に殺された場合は消滅する。

姿は固有結界発動中に酷似している。

【クラス】セイヴァー

【真名】エミヤ

【性別】男性

【身長・体重】187cm 78kg 【属性】中立・善

【筋力】 B 【魔力】 B 【耐久】 A 【幸運】 C+ 【敏捷】 B

【宝具】 E〜EX

【クラス別能力】

救世主：EX 人類の危機を救った英雄が持つスキル。Aランク相当の抗魔力、直感、カリスマの複合スキル

不敗：A 戦闘中、不利な状況になった際に、全ステータス1ランク上昇

【保有スキル】

神殺し：A 神を殺した英雄が持つスキル。神性を持つ敵に追加ダメージ、また殺したのが最大級の邪神の為、属性に悪を持つ敵に対しても追加ダメージ。

千里眼：C 視力の良さ。遠方の標的の補足、動体視力の向上。さらに高いランクでは透視・未来視さえ可能とする

心眼（真）：B 修行・鍛錬において培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す“戦術理論”。逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

【宝具】

正義を誓う勝利の剣（エクスカリバー・チューニング）

ランク：EX

種別：対神宝具

レンジ：1〜99

最大捕捉：1000人

衛宮士郎が生前に振るった聖剣、幻想のように美しい鋼の剣。

湖の貴婦人から託されたなどの伝説を持つが、実際は創名が自分を殺させるため用意していた最高位の礼装だった。

アンリ・マユを殺した事で、神殺しの性質と宝具としての力を得た。真名解放により放たれる光の斬撃は士郎が選択したモノだけを破壊する。

無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）

ランク：E〜A++

種別：????

レンジ：????

最大捕捉：????

錬鉄の固有結界、本来は魔術だが本人の象徴として宝具化している正義の味方に成っている上に、伝説によるスキルの補整がある。原作の守護者エミヤのように磨耗はしていないが、最も近い家族の死を持って、創名の言う「命の付加価値」を理解し、人を殺すことに抵抗を覚えている。

創名を殺す事でしか救えなかった事を生涯悔い続けた。

本編では、知名度が無い上にセイヴァーとして喚ばれなかったため、原作のアーチャーよりスペックは高いが、アーチャーのクラス平均程度。自分が召喚されたせいで、創名が策を早めた事に内心焦っている。

姿を現さなかった。」

セイバーの疑問に、アーチャーは肩を竦めながら答えた。

第六次聖杯戦争においてアサシンを使役した創名は正しく暗殺者だった。姿を見せず、僅か二日で聖杯戦争を終結させたのだ。士郎が創名と相對したのは、最後に聖杯を得んとする創名と僅かに問答したときのみだ。

それを凜達に伝え、アーチャーは溜め息を吐く。

「ともかく、創名が策を完成させれば、気が付けば謀殺されていた。と
言う可能性がある。」

「なるほどね。それじゃあ、今がチャンスなのかしら？逃げ切られた
とは言え、彼の計画を一部崩せたんだし。」

「確かに、逃げる準備が終わる前に私達が突入したせいで、創名はかな
りの数の礼装を持ち出す事に失敗している。」

創名は、本人の攻撃力のなさと使える魔術の少なさを礼装でカバー
する錬金術士型の魔術師だ。スーツケースを持って逃げたが、アレに
入りきる礼装の数はたかが知れている。つまり、創名は現在弱体化し
ていると言っただろう。

契約によって、創名の魔術師殺しとしての能力を教える事が出来な
いバゼットも同意見だった。

「よし、今夜柳洞寺に乗り込むわよ。時間を置いて策を練られる前に
倒しましょう。」

「早めに行くのは賛成だが、策はあるのかね？」

逃げ切られた時点で、予備の策が用意されている恐れがあったが、
アーチャーはそれを言う前に凜の作戦を聞くことにした。

「まず、敵の配置だけど、アーチャーの記憶の通りなら、山門にアサシ
ン、柳洞寺にキャスターと葛木先生、^マ創名君も同じ場所にいると思
わ。」

「ええ、山門を離れられないアサシンはともかく、戦力を自陣に集める
のは、キャスターのクラスなら定石です。」

凜の予測にセイバーは頷く。

「門番であるアサシンは、セイバーに抑えて貰うわ。正直セイバーに

とつて、創名君の固有結界は天敵だもの。」

剣を崩壊させる世界を持つ者と、剣の英霊、相性は最悪である。

「次にキャスターはアーチャーが創名君の時みたいにな、固有結界で隔離。」

工房と言う相手に絶対的に有利なフィールドから、自身の心象風景を具現化する事でそれを破れる固有結界持ちはキャスターの天敵と言える。

「で、魔術師^{私達}が葛木先生と創名君を相手するわ。キャスターの強化無しなら先生の脅威もかなり下がる。」

葛木宗一郎は、サーヴァントを打倒しうるマスターだが、それは魔術の英霊たるキャスターの強化魔術が有ってこそだ。キャスターを隔離し、強化が切れればそこまで恐くない。

「ふむ、定石で悪くない策だが、それゆえに読まれている恐れがあるな。」

「相手は謀略に長けてるんでしょ？なら、そんな連中に奇策を仕掛けても無駄よ。王道的に力で押しきるわよ。」

不遜かつ、自信に溢れた凜の言葉にアーチャーは頷いた。セイバー達も同意し、作戦は決まった。

「それなら、創名の工房を調べよう。なんの研究をしていたか分かるだけでも戦闘に有利になる。」

「そうね。じゃ、さっさと行きましょうか。」

「待てよ遠坂、洗い物しないと……」

「水に浸けて置いときなさい。」

アーチャーの提案に従い、創名の工房を調べる為、一行は移動し始めた。

創名の工房2

「ふくん、なるほどね」

創名の工房は、彼の部屋の地下にある。その工房を調べる為、創名の部屋に入った時、凜は納得の声をあげた。

魔術師にとって、部屋とは個人の心を表す物だ。パズルのピースに埋まったこの部屋は、あの破片の砂漠を思わせる。

「創名の工房はこの地下だ。昨日、魔力炉を壊すために入ったけど、罫とかは無かったぞ。」

士郎がそう言いながら地下へ入って行く。その後を、セイバー、バゼット、凜、アーチャーの順で追う。

工房は広く、様々な魔術品や刈った魔術師から奪った研究を纏めたファイルを取めた本棚等が並んでいるが、狭く感じない。

入ってすぐにある破壊された魔力炉を見て、凜の顔が引きつる。魔力炉の値段を正確に弾き出した結果である。

凜とバゼットは本棚に調べ始め、気になるファイルをパラパラと見ていく。

「これは生きる屍リビング・デッドの作り方。こっちは聖火を使って聖人を殺す研究」

「このファイルは死体にルーンを刻んで活用する方法、他は魔術による延命。どうやら、ハーヴェストが奪った研究を纏めた物のようです。」

「こんなにあるなら、どれを応用して礼装を作ってるか分からないわね。……さすがに死体関連は使っていないでしょうけど。」

外道を刈っているから、奪った研究が外道なものなのは必然なのだが、これ等を活用してきたらと思うと溜め息が出る。それが出来るほど創名の魔術師としての位階が高く無いのが救いだ。

「……そうか、この時には既に有ったのか。」

魔術品を見ていたアーチャーは、あるものを見て、絶望するように呟く。その視線の先には少女の顔が象られた頭部がついた、鉄製のカプセル。つまり、鉄の処女アイアン・メイデンだ。カプセルの前部が開くように出来て

いて、その内に鋭い棘があり、中に入れられた者に流血を強い恐ろしい物だ。中世ヨーロッパで拷問や刑罰に使われたと言われるが、フィクションであると言うのが最も有力な説である。

そんな鉄の処女だがアーチャーの目の前にあるのは気狂いな貴族一族が、鉄の処女の伝承を鵜呑みにして、婦女暴行の罪人の刑罰に使っていたと言う曰く付きの一品だ。

長いこと使用され、概念を纏い、立派な礼装となっている。その効果は、使用されると周囲の、女性としたことのある男に激痛が走ると言うもので、しかも経験が多いほど痛みが強くなる。

アーチャーは世界では創名が親友と呼んだサドマゾシスターの手に渡り、アーチャーにトラウマを作った恐怖の礼装だ。

すぐさま破壊したくなるが、調査中にやるのはマズイと思い踏みとどまる。

「(あの時は何故か分からなかったが……)」

当時は、創名と彼女の縁を不可解だと思っていたが、今なら納得出来る。傷付いた人間を慈愛で抱きしめ、抱きしめる為に人間を傷付ける彼女と、魂から傷だらけの創名が引かれ合うのは必然だったのだろう。それで、恋愛に発展しなかったのもあの二人らしい。

アーチャーが感傷に浸っていると、凜から念話で呼ばれる。行ってみると、作業台とその上に置かれているアーチャーが着けるガントレットによく似た物が有った。

「お前のソレ、創名が造ったのだったのか。」

「ああ、そうだ。成人祝いだと言つてな。まったく、どこの部族だと思つた物だ。」

士郎の言葉に、何かを思い出すように目を細めながらアーチャーが答える。

「ふむ、コレがここまで出来上がっているなら……」

何かに思い至つたようで、卓上の銀のガントレットを士郎に渡し、装備するように言う。

「む、少し大きいぞ。」

「成長が終わった時に最適になるようにしているのだろう。そのま

ま、ここに手をつけ。」

アーチャーが指した作業台の近くの壁にガントレットを着けた方の手で触る。

すると、壁に魔方陣が浮かび、自動ドアのように開く。

そこには、一振りの剣が在った。幻想のように美しい鋼の剣、形は普通の両刃の西洋剣だが、その内包する神秘は凄まじい物だった。

「調和する誓いの剣。衛宮創名の最高傑作だ。」

「……ああ。」

アーチャーの言葉に、士郎は頷くがその視線は鋼の剣から動かない。

「見事な出来ね。宝具級じゃないのコレ？」

「現存する宝具の破片等が材料らしい。最も、宝具の持つ神秘を保つたまま、別の剣にするなんて芸当は創名しかできないだろうがね。」

「……封印指定確定ですね。」

凜に言われて、少し自慢気に笑うアーチャー、バゼットは呆れたように呟くが、創名の事は士郎も含めて協会に報告するつもりは無い。バゼットは助けられた恩義を忘れるような人間ではなかった。

「チューニングは、本来のクラスで喚び出された時に私が持つ宝具の原典だ。衛宮士郎なら扱えるだろう。」

「アーチャーは使えないのですか？ 貴方の宝具の原典なら、投影して使えるのでは？」

セイバーの問いにアーチャーは苦笑する。

「出来るが、しない。私にとってあの剣は、私が正義の味方に成る為に創名がくれた物だ。私がここにいるのは、私の願いを叶える為、言ってしまえば己れの我儘だ。その為に、これを使うのは許す事が出来ない。」

「……すみません。不粋でした。」

「構わないさ。自分でも馬鹿な事だと思っている。」

セイバーの謝罪を流し、いまだに、剣を見つめる士郎に声をかける。

「工房の調査は、凜達マスター達に任せて道場に行くぞ。その剣の扱い方を教えてやろう。」

「ああ！」

アーチャーは祈る。美しき剣が、この世界では創^創り手を殺す剣と成らない事を……

「キャスター、ただの散歩に監視は良くないと思うな。」

『あら、そういう事は今の状況で出歩く神経を直してから言いなさい。』

創名は柳洞寺から出て、ぶらぶらと歩いていた。キャスターは、正気とは思えないその行動を止めようとしたが、暗示類は全て防がれ、しようがなく使い魔を同行させていた。

「暗示も無駄だから止めてね。聖骸布着けてるから魔力の無駄遣いになるよ。」

『誰の聖骸布かしら？』

聖骸布とは、聖人の遺体を包んだ布の事で、聖人によって効果は違うが身に付けるだけでその加護が得られる聖遺物だ。

「ん？ウアレンティヌスの聖骸布。」

恐らく日本で一二を争う知名度の聖人の名に、キャスターは絶句する。聖ウアレンティヌス、英語読みならば、聖ヴァレンタイン。彼は、結婚が法によって禁止されていた時、それに逆らい、ある夫婦の結婚式を挙げた聖人であり、その聖骸布は、身に付けた者への暗示や命令（ギアス）を完全に防ぐ効果を持つ。

キャスターが、絶句している間にも創名は歩き続け、

「あーき、創名あ!!」

間桐慎二に発見された。

「あ、慎二……」

言葉と同時に、アンコールを取り出し発砲する創名、慎二は倒れて動かなくなる。

「やべ、つい……」

『つい、で撃たないでくれるかしら？』

「あ、しかも勿忘草のラストだった。」

慎二に撃ったのが、最後の弾丸だったらしく、創名は溜め息をついた。

勿忘草、記憶に関する魔術品に多く使われる薬草で、勿忘草のせい
で自分が何者かさえ忘れてしまうお伽噺もあるほどだ。

創名の弾丸は、その効果を高めた忘却の弾丸であり、神話クラスの
勿忘草と言う高価な原材料のせいで少ない数しか無かった物だった。
「前、コレで撃たれた魔術師は、人間だつてことを忘れてゲロゲロしか
言わなくなったけど、慎二は大丈夫かな？」

『そんなのを、つい、で撃たないでちょうだい！』

キャスターに怒鳴られながら、創名は慎二に近付いて治療を始め
る。その際、ある事を書いたメモを慎二のポケットに入れ、簡単な暗
示をかける。

その後、近くの公園のベンチに寝かせ、創名はその場を後にしよう
と歩き出す。

この時間、慎二がこの場所を通る事は予想していた。外れても構わ
ない程度のお節介、コレはありがた迷惑みたいな物である。

慎二は道化だ。だが、道化とは劇に欠かせない物である。

魔術師の家系に生まれながら、魔術師に成れない劣等感を抱き、ソ
レを桜にぶつける程歪んでいたが、ソレが慎二の全てでは無いことを
創名は知っていた。

「君に光あれ。」

創名は首だけ後ろに向けて囁いた。

間桐慎二と言う舞台が、喝采を受けるか、嘲罵を受けるかは、 間桐
慎二次第なのだから……

魔術の英雄Ⅰ

満月ではないが、美しい月の下創名とアサシンが創名の持ってきたブルーシートに座って、これまた創名の持ってきた重箱の弁当を食べていた。

「かつての文豪は、I LOVE YOU を『月が綺麗ですね』って訳したそうだよ。」

「雅だな、狸、お主ならば何と訳す?」

「キヤスターは女狐で、自分が狸なのは雅じゃないと思うよ。」

他愛ない会話、気を許してるのではなく、互い心底関心が無いからこそ軽い会話だった。

「うーん、好きな人へってのは思い付かないけど、家族へのだったら思い付いた。」

「ほう、どんなものだ?」

「泣かないで?」 どうしてかな、^{アイツ} 士郎の泣いたとこなんて想像も出来ないのに……」

『泣かないで?』それは平行世界において、創名が自分を殺した家族^{士郎}に最後に遺した言葉だとも知らず、創名は一人言のように呟く。

「来た。」

キヤスターの使い魔が、柳洞寺に続く階段を士郎達が登って来ている事を知らせる。重箱を閉じ、箸を置いて立ち上がる。

アサシンも創名の数歩前に立つ。

「ようこそ、と言いたい所だけど、待ちくたびれたよ。士郎」

「……創名」

よれたコートを着て無機質に微笑む創名は、セイバーには衛宮切嗣と重なって見えた。しかし、平和を願い、その為なら『この世全ての悪』を担ってもいいと言った男。正義を求め、それ故に『ただ一人の為の絶対悪』となり得る彼。その理想は同じ『正義の味方』なのに、真逆とも言えるほどに違う道を歩んでいる。

そんなセイバーの考えなど知らず、創名は士郎が持っているチュー

ニングに気付き、アーチャーをジト目で見つめていた。

「あ、セイバー。この弁当食べていいからね。せつかく作ったのに、先生とかちよつと食べただけだし、キャスターに到っては一口も食べないしよ。」

「遠慮します。貴方の料理には毒が有りそうだ。」

「えー、たつぷりの自己愛しか入ってないよ?」

きつぱりと断るセイバーに、創名は不満そうに言う。

「狸、お主は中へ行け。私の邪魔をしないようにな。」

「了解だよ。じゃあ、また後で。」

アサシンに言われ、創名はブルーシートと重箱を置いて、山門の内へと去って行った。

「士郎、私は手筈通りここで彼を討ちます。^{アサシン}キャスターとキズナのこととは任せました。」

「ああ、分かった。」

士郎とセイバーが会話する間に、アサシンがさらに一步踏み出した。

「斬り合う前に、一つ名乗ろうか。」

アサシン、佐々木小次郎。推して参る。」

「セイバー、アルトリア・ウーサー・ペンドラゴン。相手になりましたよ。」

殺気を放つアサシンに、騎士として名乗り返し、セイバーは不可視の剣で斬りかかった。

「アサシンじゃ、セイバーの足留めが精一杯だろうね。」

「あら、抗魔力が高いセイバーを足留め出来るなら、捨て駒として充分な働きだわ。」

「ありやりや、アサシンは脱落決定?じゃあ、セイバーに倒されるまでに終らせなきゃね。」

既に半ば異界と化した柳洞寺の中で、キャスターと創名が話していた。正確にはキャスターのマスターである葛木宗一郎もいるが、彼は元々寡黙で会話には滅多に参加しない。

「今、セイバー以外には突破されたわ。」

「早いねー。いくらセイバーに集中しても良いって言われたからって、限度があるよね。」

創名の呆れたような言葉に、キャスターは薄い笑みで同意を示す。「時間が有れば地雷埋めたり足留め出来ただけだな。」

「物騒な物を使わないでちょうだい。貴方やアサシンはともかく万が一、宗一郎様に被害が出たらどうするの?」

二人の言葉は士郎達が目の前に来た事で止まる。

「帰るぞ創名。その後説教だ。」

「お前の目的、此処で絶たせて貰おう。」

「あは、気合い入りまくりだね。けど、自分も止まれないんでね。」

チューニングを構えた士郎、千将・莫耶を創名に向けるアーチャー。

創名はアンコールを左手に、銀の砂塵を右腕に纏い相対する。

「お嬢ちゃんに、神代の魔術を見せてあげましょう。」

「望む所よ。現代の魔術師なめないでくれるかしら?」

神代の魔女と現代の魔女は、同時に魔力を高める。

「狩ります。」

「相手をしよう」

執行者と無感動な殺人者は、言葉少なに戦闘体勢を整える。

「それじゃ、始めよう。」

創名の言葉が全てを動かした。

そして、戦闘は開始される……

魔術の英雄2

始まった闘争は、互いに引かぬ展開となった。戦闘開始と共にキャスターは空中へと逃げ、空爆のように魔術を降らせるが、アーチャーが狙撃を行いそれを妨害する。創名はアーチャーを狙うも、士郎の攻撃に防戦を強いられる。士郎が恐ろしい早さで成長しているとは言え、殺す者としての技量は創名の方が数段上だ。それなのに士郎が優勢でいられるのは、士郎を殺せば創名の目的が果たせない、という理由で創名が手加減しているからだ。

宗一郎と凜・バゼットの戦いも膠着していた。キャスターの補助を得た宗一郎は、凜とバゼットに対し互角以上の戦いをしているが、数の利は覆せず、決定打を与えられない。逆に、凜とバゼットが有利になれば、キャスターが少し無茶してでも援護を行うので押しきれない。

アーチャーが固有結界を使おうとすれば、その度に創名のアンコールから凜を狙った弾丸が放たれ、凜を守る為に動かざるをえず、結果として互いに劣らぬ膠着状態となっていた。

「あーもうー！」

創名が焦れたように右手の蛇剣を士郎に投げつけ、士郎はそれをはじく。その僅かな時間に創名は、コートからなにかを取り出す。

「雷の杖！」

「オイ、それスタン・ロッドだろー！何魔術っぽく言ってるんだよ!!」

創名が取り出したロッドに対し、士郎が叫ぶが創名はニヤリと不敵に笑う。

「魔術による改良で出力5割増し、これぞホントの魔改造ってね。」

「笑えないー！」

かするだけでも意識を奪いそうな強烈な電撃を纏うロッドに士郎は冷や汗を流す。

「せいぜい足掻いてね。士郎。」

「ッ！」

士郎が防戦一方になったのを見て、アーチャーは舌打ちする。創名

が攻勢に出て出来た余裕で宗一郎の援護射撃を行うようになった。アーチャーはそのフォローに回り、キャスターが放つ魔術が増えるてしまう。

「んー、そろそろかな?」

「え?」

そんな中、創名の呟きを士郎だけが聞いた。

その直後、創名に大きな隙が出来た。士郎は、創名の右腕を払い、スタン・ロッドを離させると、突き飛ばし、尻餅をついた創名の喉に、チューニングの切っ先を当てる。

「……俺の勝ちだ。」

「……」

勝利を宣言を行った士郎に創名は何か言おうとし、次の瞬間に跳ねるように士郎に飛びかかり、覆い被さった。直後、爆る地面。キャスターが創名ごと士郎を撃破せんと魔術を放ったのだ。

「創名ア!!」

魔術を受け、創名はコートが吹き飛び、背中が焼け爛れている。士郎が創名の名を呼び、助け起こそうとするが、それより先に創名が奪われる。

「あらあら、これぐらいで音を上げるのかしら? 口程にもない子ね。」

ダメージで身動き出来ない創名を転位してきたキャスターが持ち上げたのだ。キャスターが創名の背中を撫でると、煙が上がり、背中の火傷がより深刻なものとなる。

「……あ、がア……」

「可哀想に、痛いのかしら?」

「ッ、創名を離せ!」

士郎の叫びにキャスターは冷笑で答えた。

「この子を助けたいなら、セイバーとの契約を破棄しなさい。」

「何……!?!」

「あら、そんなに驚く事かしら?」

この子は、貴方の大切な家族なんでしょう? セイバーをくれるなら、この傷も治療してあげるわ。

断るなら、残念だけど死んでもらわなくちやいけないわね。」

キャスターの脅迫に士郎は言葉を失う。

「士郎、駄目！キャスターは私達を生かす気なんて無い。」

「余所見は止めておけ、遠坂。」

「きゃっ！」

凜が叫び士郎を制止するが、その隙を突かれ吹き飛ばされ、そのまま起き上がれない。

怒りを瞳に宿したアーチャーが憤怒のままに弓を引くが、キャスターは射線上に創名を入れ、盾にすることでそれを封じる。

戦況はキャスターに傾いた。勝利を確信し、キャスターは笑みを深める。そして、勝利を確信した時こそ隙だらけになるのは、人間でも英霊でも同じだった。

「(そして、自分の敗北だ。と言いたいところだけど、まだまだよ。士郎)」

創名からの念話に士郎は目を見開き、キャスターの後ろを凝視する。その視線につられ、キャスターが振り向こうとした瞬間、キャスターの体に激痛が走る。

「……ぐう、あ、貴方は……!?!」

後ろを見て、キャスターが悲鳴のような声を上げる。そこに居たのは一人の少年。

魔力殺しの魔術品を身につけ、英霊を傷付けえる程の神秘が籠った短剣を突き出した体制で止まっている少年は、間桐慎二だった。

「妹を、桜を返してもらおうぞ。サーヴァント！」

動き出した策略

予想外な程計画通りに事が進んだ。体に走る激痛さえ忘れて笑みがこぼれる。

計画の中では、慎二が来ても来なくても上手く行くように手を打っていたけど、できれば来て欲しいなあとは思っていた。あの日、確率は低いとは言え土郎達に見つかるとは思えないと言ურიスクを払ってまで慎二に勿忘草の弾丸を撃ち込んだのは、この為だったのだから。

勿忘草の弾丸、効果はシンプルにして強力、ある一つの事柄とそれにつつまれる記憶の忘却。例えば、人間だった事を忘れさせれば対象は自身が人間であることと、人間として生活していた記憶を失う。今回、慎二に忘れて貰ったのは魔術への執着と、それに起因した感情だ。

名門の魔術師の家系に生まれた慎二は、魔術が使えない事によって歪んだ。魔術が使えないと知る前は、自身が特別で他人より優れていると思っていた。なのに、彼は魔術凡人が使えなかった。

それゆえに魔術に執着し歪んだ。魔術回路を持ち、マキリを次代に繋ぐ為に養子となった桜に嫉妬し、その行き場の無い感情を彼女にぶつける程に歪んでしまった。

でも、高校に入学した頃からの友人として、慎二がそれだけではない事を自分は知っていた。

だからこそ、慎二が再び舞台上に上がるように細工したのだ。聖杯戦争後、慎二がまた土郎と友人であるように、桜とやり直せるように、余計なお世話のお節介を焼いて、しなくてもいい賭けをした。

あの日、歪みの原因を取り除き、魔力殺しの礼装と神秘の籠った短剣の隠し場所、この作戦について書いたメモを治療の際に渡し、目が覚めたらメモを見るように暗示をかけた。

「僕は、桜に謝らなきゃいけないんだ！今さらだと言われても、やり直せなくても、それでも桜にもう一度会おうんだ！だから、桜を返せ!!」

慎二は熱い言葉と共に、短剣を振りかぶりキャスターにトドメを刺

そうとする。まだキャスターに消えられたら困るので、ゆるくなつた拘束から逃げてキャスターを突き飛ばす。短剣がカスつて傷が増えたが気にしない。どうせ治るし。

「起動しろ、無限の剣骸。」

制限展開。」

いい加減痛いので奥の手を使う。切嗣の魔術、固有時制御の考えを応用した物だ。

人の体は世界から隔絶されている。つまり、肉体自体が結界だと言える。固有時制御は、それを利用して結界内の時を操る衛宮の秘術の効果を体内に限定し、自身の体の時を操作する魔術だ。これはその無限の剣骸バージョン、体内に固有結界の効果が発現する。士郎の体から剣が生えてくる現象も同じ理屈だと思う。

痛みが引いていく、やつぱり固有結界を完全に展開した時に比べるよりはるかに再生速度が遅い。

戦場は、突然の乱入者と自分の再生で混乱して停止している。そんな中、時間がやってくる。

「ぐうっ！」

「宗一郎様!!」

葛木先生がバタリと倒れ、キャスターが悲鳴を上げる。予定時間と誤差五分以内、うん、上出来だ。

「……なるほど、創名、何を盛った？」

「遅効性の睡眠薬、葛木先生が食べたのにもれなくね。」

「なんですって!?!」

アーチャーの問いに答えれば、キャスターが叫ぶ。かなりの重傷のはずなのだが、どれ程弱くてもサーヴァントと言うべきか。戦闘前に弁当を作ったのは、これが理由。キャスターは魔術品としての毒薬には気を配っていたので、魔力が一切無い普通の薬を使ったのだ。この場でやることは完了した。桜ちゃんが囚われている場所は、慎二に渡したメモに入ってるから心配無い。計画を頭の中でシミュレーションし、成功率が八割を越えたのを確認して動き出す。

「じゃ、またね。」

「は？ちよつと待て創名！」

意識が完全に葛木先生に向いていたのか、反応が遅れた士郎に手を振りスタン・ロッドの術式を遠隔で起動する。スタン・ロッドは家で逃げる時に使った鞆と同じ術式が仕込んであり、目を潰すような激しい光を放って爆発する。その瞬間に脱兎の如く逃げ出す。足の健をアーチャーが放った剣で切られるが、転ぶ前に再生し逃走に成功する。なんか、アーチャーが容赦なくなってる気がする。逃げまくってること怒ってるのかな？

「安心してね。もうすぐ殺しあうから……」

聞こえないだろうがそう呟いて、キヤスターがトドメを刺される前に計画を完遂するために走りながら作業を開始する。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

セイバーとアサシンの戦いも膠着した物になっていた。

ステータスではセイバーの方が優れているが、マスターから満足に魔力供給されていないセイバーは宝具を使わず、しかし、速やかに突破しようとするためにかえって攻めあぐね、アサシンは戦いを楽しみながら、キヤスターからの命令である“セイバーの足止め”を全力で行い、戦況が膠着する。

「まったく、女子(おなご)とは思えぬ、素晴らしい剣舞。実に見事だ。」

「貴方こそ、アサシンとは思えない剣技。驚きを禁じ得ません。」

生涯剣を振るい続けた者同士、互いの剣技を称えあう。

「残念ですが、貴方と剣を競いあう時間もあまりない。次で最後です。」

「ふむ、ならば私も死力を尽くそう。」

セイバーとアサシンの気迫がぶつかり合い、空気を震わせる。あと、刹那の後に最後の剣を振るうと言うタイミングで山門から創名が飛び出てきて、山門が独りでに閉じる。創名は、敷かれたままだったブルーシートの上に立ち、石段で向かい合うセイバーとアサシンを見下ろす。

「閉じよ (満たせ)。閉じよ (満たせ)。閉じよ (満たせ)。閉じよ

(満たせ)。閉じよ (満たせ)。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。」

強い意志を宿した瞳のまま口にするのは、サーヴァントを召喚するための詠唱。セイバーの直感が最大級の警告を鳴らす。

同時に詠唱に呼応し、ブルーシートの裏に描かれていた魔方陣が淡い光で浮かび上がる。

「告げる。」

汝の身は我が元に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

あの詠唱を止めなければいけないと直感が告げる。しかし、創名に近づいてはいけないと本能が恐れる。

「邪魔をするなど言ったはずだぞ。狸！」

アサシンが創名を斬り殺さんと駆け出すが、それに対し創名は詠唱を途切れさせず、足下に置かれたままだった重箱をアサシンに向かつて蹴り飛ばす。料理が飛び散り、それぞれの重箱の裏に書かれた魔方陣が輝き、連鎖的に爆発を起こす。抗魔力の無いアサシンは意表を突く魔術の攻撃を受け、成す術無く吹き飛ばされる。着地し、再び向かうよりも創名が詠唱を終える方が速い。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善を成す者

我は常世総ての悪を敷く者

汝三大の言霊纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

——！」

詠唱の終句と同時に、魔方陣の輝きが一際強くなり、それが収まるとアサシンに異常が起こる。

「ガアアッ!!」

アサシンの肌の下を何か蠢くように、比喻では無く肌が泡立つ。

「……この身を喰らうとは、いかな物怪だ……!?!」

「ウケケ、サーヴァントだよ。」

アサシンの体から声が響き、

ザバ！ニヤ
妄想身体

宝具が発動し、アサシンの体の異変が止まる。しかし、それは正常になったのではなく、アサシンがアサシン佐々木小次郎に乗っ取られたことを示していた。

「うおっ！コイツ、アサシンとは思えねえステータスだ。」

アサシンが、口調も雰囲気も変えて驚きの声を上げる。

「へー、それが君の宝具？」

「その通り。って、大切な事を忘れる所だった。」

我は、アサシン。汝が我を招きしマスターか？」

「そうだよ。よろしくアサシン。」

いやーぶつつけで成功して良かった。いくら奪った知識とはいえ、自分がやれるかはビミョーだったし。」

サーヴァントを生け贄に、サーヴァントを召喚する。それはマキリ・ゾオルケンの奥の手であり、創名がマキリ・ゾオルケンの記憶を奪い手に入れた魔術だ。創名は最初から、この魔術だけを狙いマキリ・ゾオルケンの記憶を奪ったのだ。

「やったね。これなら手間が省ける。」

サーヴァントのステータスを確認したのか、創名の声が弾む。

「で、マスター。最初のご命令は？」

「逃げるよ。」

「仰せのままに」

「なっ！」

あまりの事態に固まるセイバーを尻目に、アサシンは創名を抱え、敏捷A+のステータスを持ってその場から離脱した。

どこまでも不吉な予感を感じるセイバーを振り返らずに……

夢1

閉じられた山門を見て、アーチャーは舌打ちする。創名が逃走した。それはいい、問題は創名の表情だ。慎二が乱入する直前の表情は、自分の勝利を確信した表情、つまり、今の逃走は昨日の衛宮家からの逃走と違い、策の内だと言う事だ。追うべきか、追わざるべきかの判断に迷う。すでに自分が知る第五次聖杯戦争と異なる展開になり、創名の策が読みきれない。まさか、あれだけ清々しく逃げておきながら、山門の前でサーヴァントの召喚を行っているとは思わず、召喚の為の魔力もキャスターの結界によって察知することができなかった。創名なら逃げ切る用意をされていて追撃は無駄だと判断し、意識を戦場に戻した。

キャスターが自らのマスターの元へ地を這い、近付いていく。慎二の一撃は致命傷だったのだろう、現界を保つのに手一杯で空中浮遊の魔術も使えないのだ。

「……宗一郎様。」

愛した者に尽くし、あらゆる裏切りを重ね、しかし、愛した者に裏切られ、愛した者を裏切り、自らの子供さえ手にかけて裏切りにまみれた人生。英霊になった後も、裏切りによって愛した者と引き裂かれる。

そんな彼女が地を這ってでも宗一郎の元へと行こうとするのを、誰も止められなかった。

「ああ、貴方と共に……」

裏切りの魔女は幸せな夢から醒めてしまうのを惜しむような表情で、愛した男の顔に触れ、指先から消えていった。

「……キャスターは倒した。これで桜を探せるわね。」

「そうだな。」

何かを振り切るような凜の言葉に士郎が頷いた時、山門が轟音をたて爆発する。

「な、なんだよ!?!」

「創名が山門に爆薬を仕掛けていたようだな。セイバーが開けて起爆したのだろう。」

慎二の悲鳴じみた声に、アーチャーが答える。事実、万が一召喚の詠唱中に追いつかれないように創名が仕掛けたトラップだった。

爆風が全て柳洞寺側へ向くように仕掛けていたあつた為、セイバーは爆風による被害はなかった。

「セイバー、無事か!？」

「ええ。それよりも、キズナがサーヴァントを召喚しました。」

「なんですつて?どういう事か説明して。」

セイバーがアサシンを媒体にサーヴァントを喚び、そのサーヴァントがアサシンの体を奪ったように見えた事を話す。

「その宝具で、創名が召喚したというならば、それは私が経験した第六次聖杯戦争で創名が従えたアサシンと同じアサシンだろう。」

十二代目ハサン。個を捨てている十九のハサン達の中でさえ、無貌のハサンと呼ばれる変装に特化した暗殺者で、自らが殺した者の皮を剥ぎ、それを持つて殺した者に成り代わる秘技を持つていたそうだ。

「その秘技が宝具化したのが、セイバーが見た体の乗っ取りね。」

「ああ、厄介な事にサーヴァントに成り代わると、ステータスマで成り代わられたサーヴァントの物になる。」

その上、どういう訳か創名の目的に賛同していた。自身を犠牲にしても創名を勝たせに来るはずだ。」

アーチャーは忌々しそうに創名のサーヴァントの説明を行う。

「早く対処したいが、逃げられたなら今から追っても追い付けん。今は、間桐桜の救出を優先するべきだ。」

「そうね。早く見つけてあげなきゃ……」

「桜の居場所なら、このメモに、て返せよ!」

アーチャーの言葉に頷いた凛は、慎二が見せたメモを奪い取り、それが創名の書いた物だという事に気づいて眉をひそめた。

「……畏かしら?」

「畏だろうな。しかし、創名は、畏の餌を惜しむ奴ではない。間桐桜はメモ通りの場所に居るだろう。」

「なら良いわ。毘なんて食い破って、さつさと桜を助け出すわよ。」
メモが示す本堂へ、凜は歩き始めた。

「あちやー、やられた。」

「どうした。マスター？」

深夜の冬木の街を、隠れ家に向かって歩いていった創名が溜め息と共に呟く。

「キャスターがやってくれた。自身の魂を小聖杯じゃなく、大聖杯にくべた。聖杯を完成させないつもりだったみたいだ。」

霊体化したアサシンが問いかけに答える。聖杯は、七体分のサーヴァントの魂を持って器を造り、そこに大聖杯の魔力を注ぎ完成する。サーヴァントが足りなければ、聖杯戦争は瓦解するのだ。

「ま、良いか。どうせ結末は同じなんだし。」

笑みを浮かべながら創名はいい放つ、キャスターの最後の一手は見事だったが、実は創名には意味が無いものである。なぜなら、この冬木には八体目のサーヴァントが存在しているのだ。それも、英霊の魂に換算して二三体分の魂を持つ英霊が。

キャスターはそれを知らなかった、創名は知っていた。ただそれだけの事だった。

自身のサーヴァントをどう使うかを考えながら、創名は冬木の夜を歩き続ける。

夢2

凜が本堂へ足を踏み入れた瞬間、アーチャーが彼女を抱えて後ろに飛ぶ。刹那の後、五本の矢が凜がいた場所を貫く、二秒の時間差で後退した場所をねらう矢をアーチャーが打ち落とす。

「ふむ、そこまで殺す気ではないようだな。」

「どこがよ!? 殺意満載じゃない!」

「矢に毒も爆発物も付いてない上に、時間差で来る矢の数も少い。どちらかと言えば警告だろう。ここから先には罠があるぞ、というな。」

アーチャーがそう告げて、本堂の入り口にガントレットで触れる。

「——トレース・オン」

アーチャーの詠唱にガントレットが白い光を放ち、それに呼応するように本堂のいたる所で赤い光で魔法陣が浮かび上がる。

「私のガントレットには、私の解析魔術を格段に向上させる効果がある。それを使えば、ご覧の通りだ。」

浮き彫りになった隠された魔術の罠を前に、アーチャーは得意げに言う。

また、魔法陣が光を放つことで、暗かった本堂の中の状況が人の目でも分かる程になる。

「ツ——桜っ!!」

本堂の奥に一際強い輝きの魔法陣、その上に横たわる桜の姿があった。目覚めないように意識を封印されているようだが、目立った外傷は無い。

凜の叫びと共に、慎二と士郎が桜の元へ駆けて行こうとしたが、凜がそれを制す。

「ちよつと待ちなさい。キャスターが消えても、罠がまだ生きてる。下手に突っ込んだら、桜を巻き込みかねないわ。」

「その通りです。先程の矢のような、ハーヴェストが仕掛けた罠もあるはずですよ。」

凜とバゼット、魔術師二人に言われて無謀な二人は本堂への突撃を

と混ざりあい宝石よりも美しい雫となり、流れ落ちていった。

衛宮創名は夢を見る。隠れ家へとたどり着き、体を休める為に眠りについた。そのままはつきりとした夢を見るならば、それはサーヴァントの記憶だろうと判断した。

それは彼がまだ顔や名を捨て、山の翁となる前のこと。彼は既に多くの人を殺め、その技を完成させていた。人を殺し成り代わる、異能の域に達した彼の技を見破れた人間はいなかった。ある時、彼は旅の女と恋に落ちた。その時の彼の姿は偽りだったが、その想いは紛れもなく本物だった。彼女の名と彼女が仲間と旅をしてい事しか知らないし、彼女は彼の本当の姿さえ知らなかったが、互いに想い合い、慈しみ合った。それは、とても幸せな日々だった。

しかし、運命あるいは彼の信じる神は、それを赦さなかった。彼にいつも同じように暗殺の命令が下される。標的は彼の愛する彼女、彼女は旅をしながら教えを広める異教徒だった。

彼は、いつものように仕事をこなす。彼女に近い人間、彼女の旅の仲間を殺し成り代わる、そんな事をしなくても彼は充分彼女に近かったのに、彼女に自分が彼女を殺したのだと思われたくなくて、卑怯にもそんな手段を取った。だけど無駄だった。

「あら、■■■そんな事しないでいいのよ。」

彼女は微笑みながらそう言った。今まで誰にも見破れなかった彼の技を見破ったのだ。それも、成り代わった相手をよく知っていたから正体を見破った訳ではなく、彼自身さえ気付かなかったほんの些細な癖で、彼が彼であると見破った。

勿論、彼は変装術を極める過程で自らの癖を全て直している。彼女が気付いた癖は、直すどころか誰も癖だと思わない程度の物だった。愛しているから気付いて当然だと、彼女は微笑んだ。

彼の技を見破った時点で、彼女は彼が何者で何をしに来たのかを悟っていたが、逃げる事も彼を攻撃する事もしなかった。ただ慈しみを持って彼に告げる。

「貴方を愛し、信仰を守り通すのが私の正義なのです。」

彼は異教徒は殺すという彼の正義に従って、彼が愛した笑顔を浮かべる彼女の胸にダガーを突き立てた。死に逝く彼女を自身の素顔をさらして抱き起こす。

「ああ。それが、貴方なのですね。良かった、最期に見るのが貴方で……」

それが、彼女の最後の言葉だった。彼女の亡骸を抱え、彼は慟哭する。

「神よ、なぜ貴方は誰もが信じうる正義を御作りになられなかったのか!? 私と彼女、同じモノを信じさせてくれなかったのですか!?!」

彼の慟哭に答えるモノは無く、それでも彼は叫び続けた。彼女の体が冷たくなった頃、ようやく彼は彼女を離し決意を持って立ち上がる。その後、彼はさらに多くの人々を殺した。自身の正義を貫き、自身にとっての悪を殺し尽くしたその先に、誰もが同じ正義を信じる世界があると信じて殺し続けた。いつしか彼は名を捨て顔を捨て、ハサン・サッバーハ山の翁となっていた。それでも彼の正義は絶対になり得ず、彼は死の間際まで誰もが信じうる正義を求めていた。

やがて彼は一人の少年に召喚される。少年の目的は、正義の味方の誕生。それはつまり、誰もが信じうる正義の誕生を意味していた。彼は心に決める、マスターの目的の為ならばこの仮初めの命、喜んで差し出そうと……

クランの猛犬1

クランの猛犬

アサシンの召喚から半日、創名は隠れ家であるマンションの一室のベットで目を覚ました。寝惚けている様子も無く、あくびさえせずにまるで機械が起動するように目を開いた。起き上がり、腕に刺さった栄養剤の点滴を抜きベット脇の眼鏡をかける。これは蒼崎橙子の作で眼に映らない物を見る為の礼装、霊体化したサーヴァントさえ認識出来る優れたものだ。それにより霊体化したアサシンを視認し、おはようと言をかける。

「おはよう、と言つてももう日は沈んでますがね。」

「じゃあ、こんばんは。予定通りの時間だよ。」

「クク、魔力底上げの『代償』が来てるんでしよう？強がらないでもいいですよ。」

アサシンが言ってきた言葉に創名がアサシンの過去を夢見たように、アサシンも創名の過去を見たのだと悟る。

「誇ると良い、世界の誰もが貴方を間違っていると云おうとも、俺は貴方が正しいと確信している。」

「馬鹿だね。自分は間違っているよ、それでもそれ以外に方法を知らないだけだ。自分の目的に協力してくれるなら、ただ自分の武器であってくれば良い。」

「了解しました。マスター。この身は貴方の傀儡、好きに使い潰してくださいよ。」

そう言つて、互いに笑い合った時、激しい爆発音が響く。何者かがマンションに侵入して来たのだ。マンション全てが創名の隠れ家で、魔術的な罠と物理的な罠が巻き散らかすように仕掛けられている。今の爆発は一階のフロント部分の罠な為、侵入者が創名の現在置である六階まで来るのには、しばしの猶予がある。

「セイバー達ですかね？」

「いや、士郎達は遠坂の家から動いてない。タイミング的に見て、ランサーだろうね。」

士郎達が遠坂の家にいるのは、創名がアサシンを手に入れた時点で確定だ。衛宮の家は暗殺者から身を守るには向かない。殺しに来るのがその家を最もよく知る創名なので尚更だ。

その点、遠坂邸なら結界もあり文字通り凜のホームだ。鉄壁の守りを見せ付けられる。もつとも、凜の性格からして反撃の準備が完了すれば即刻反撃に打って出るだろうが……

兎も角、凜達では無いなら侵入者はランサー、バーサーカー、ギルガメッシュ、大穴で言峰綺礼のどれかだろう。その内、ギルガメッシュと綺礼はまだ動かないだろうと確信している。次にバーサーカーならば、侵入がもつと派手になるように罠を調節してある。よつて、侵入者は偵察任務を命じられているランサー、クー・フリーンの可能性が高い。

「赤い輪廻、起動。」

一声、トリガーである詠唱を行えばマンシヨンは最悪の処刑場と化する。このマンシヨンのデザイナーの名が蒼崎橙子であると言えば、そうなる理由も自ずと察せるだろう。

「さて、屋上に退避。死んでくれたら良いけど、そんなに甘く無いだろうし戦闘準備はしといてね。」

「仰せのままに。マスター。」

創名はウアレンティヌスの聖骸布をマフラーのように首に巻き、アサシンを連れて屋上へと向かう。

「ここで迎え撃つんですか？」

「うん。サーヴァントとは言え、ここに来るまで完全に無傷とは思えないし、ランサーは早めに潰しとかなくちやいけなからね。」

屋上で街を見下ろしながら創名達は待ち構える。マンシヨンからは爆発音や金属がぶつかり合う音など、戦闘が行われている証拠と言える音が響き、段々と屋上に近付いてきている。

「罠は仕掛け無いんですか？」

「このマンシヨンを突破するような奴に、急拵えの罠なんて意味無いよ。」

「そうですね。サーヴァントでも抗魔力が無けりや死ぬるレベルです

しね。」

創名と橙子による技術の出し惜しみ無しの全力で作られた処刑場は、並の魔術師なら屋上に来るまでに軽く三桁ほど死ねるし、全盛期の切嗣でも二十回は死ぬような代物だ。それを突破した猛者に如何なる罠が有効だと言うのか。

パスを通じた念話によってランサーが屋上に到達した後に使う策を伝え、創名は屋上入り口のドアの正面に立ち、アサシンはドアと創名から等しく距離を取った。

「投影開始」

創名の詠唱と共に大量の銀の砂が投影され、屋上を埋めつくす。

それと同時に、屋上のドアが吹き飛びランサーが姿を見せた。所々傷つき、血を流している。

「ようこそ、ランサー。歓迎するよ。」

「ハ、もう充分歓迎されてるぜ。それとも、まだ何か有るのかよ？」

「勿論、伝説たる貴方の最後に相応しい物を用意しました。」

創名は本音を隠し、にこやかに笑いながら告げた。

首に巻かれた聖骸布が風でたなびいて広がり、まるで片翼をもがれた悪魔のようだとランサーは思った。

クランの猛犬2

「では、これを……」

創名は自らの首に巻いていたウアレンティヌスの聖骸布を外し、ランサーに投げ渡す。

受け取ったランサーは一目でそれが如何なる物なのかを察し、瞠目する。

「——いいのか、坊主。こんなモンを敵である俺に渡してよ」

「いったはずだよ。貴方の最後に相応しい物を、と。」

ウアレンティヌスの聖骸布、その効果は身に付けた者への暗示や命令を完全に防ぐ事。それは絶対の命令権である令呪をも無効にする。

詰まり、ランサーに与えられた令呪による命令と枷が消え去るのだ。

「礼は言つとくぜ。お前等を殺して、あのいけすかねえ神父を葬らせて貰う。」

ランサーの言葉を聞いて、創名は笑みを深める。ランサーの言葉は、今現在において言峰綺礼がランサーと感覚を共有していない事を示していた。

聖骸布の代価として見逃せと言えば、今回は見逃してくれるだろう。しかし、それで再びバゼットとかと再契約されるのは創名にとつて避けるべき事態だ。だからこそ創名は決めていた、ランサーはここで殺す。

「起動しろ、無限の剣骸。」

制限展開。」

創名の表情が変わる。それは葛藤するツギハギの顔ではなく、全てを否定する嘲笑。

「この身は剣。朽ち果て、砕けようとも敵を切り裂くモノなり。」

続いて唱えられたのは強化の魔術、基本魔術と言える物だがそれに使われている魔力の量にランサーは顔をしかめる。大量の魔力によって創名の体が強化されるが、強化し過ぎている。身体能力がサー

ヴァントのパラメーターに準じて言えばC程までに上がっているが、そこまでの負荷に体が耐えられていない。ランサーの目には、強化の歪みで肉体が壊れていくのが見えたが、すぐに修復されていく。

「成る程な、捨て身の策かと思えば回復能力持ちか。少しは楽しめそうだな。」

「楽しむ暇なんてあげるつもりは無いよ。」

創名は嘲笑のまま走り出す。その速度は人間離れしていて、一步ごとに創名の脚はひしゃげ、次に踏み出すまでには元に戻る。常識外の速さでぶつかる空気の抵抗で体の骨は砕け、次の瞬間には傷痕さえ無い。地獄の責め苦にも似た痛みが全身をさいなむが創名の嘲笑が崩れる事は無い。

「ハ、上等じゃねえか!!」

それに迎え撃つのは神話の槍、数多の英雄や怪物の命を奪ってきた紅き呪いの槍。ランサーは躊躇い無く突き出す。高速の突き、けれどランサーにとってはそれは様子見に過ぎない。かわされるのが前提で、その後に繋ぐ為の布石。

「——何ッ!!」

だから予想外だった。創名はランサーの一撃を回避しなかったのだ。ただ笑みを深めながら右胸を貫かれ、強化した腕力で槍を動かさないように握り締める。

現在の創名は自身の固有結界を体内に展開している。無限の剣骸、その効果は創名自身の再生と武器の崩壊。ランサーはその中に己れの宝具を突き入れてしまったのだ。その結果、ゲイ・ボルグには無数の罅が入り、穂先から砕けた。

「言っただじゃ無いですか、楽しむ暇なんて上げるつもりは無い、て」

聖骸布を渡すことも、派手な強化も創名の布石。最初の一撃を確実に体に受ける事こそが創名の策。初手で真名を解放されない為に呪いによる命令を無効化させ、戦いを楽しもうとするように仕向け、最髙速度で接近する事でランサーの行動を後退か、素早く繰り出せる突きに絞らせた。

「アサシン!!」

「あいよ。——秘劍・燕返し！」

創名の叫びが終わる前にアサシンはランサーに接近。体の持ち主である佐々木小次郎の必殺の秘劍を放った。平行世界から斬撃を持ってくると言う滅茶苦茶な剣技によるタイムラグ無しの三つの斬撃は、ランサーの命を奪うかに見えたがランサーもまた英雄、砕けた槍の残骸を迷い無く手放し空中にルーンを刻む。二つのルーンは同数の斬撃を止め、残る斬撃は全力で後退したランサーの体を浅く切りつけただけに終わった。

「縛れ。劍鎖の射手。」

英雄に相応しい能力に内心舌を巻きながら、創名は追撃を行う。銀の砂嵐が吹き、柄に鎖が付いた短剣群が空を駆ける。

劍群の射出は鋭く、全方位からランサーを狙い、とつきの回避で体を崩し回避することが叶わないランサーの守りのルーンを貫き、数本がランサーの手足に深々と突き刺さりその動きを阻害する。

舌打ちをするランサー、それを見ながら、創名は自身の右胸を指で抉り、紅い欠片を取り出す。それは砕かれた呪いの槍の欠片、そして、創名は使いなれた魔術の詠唱を行う。

「復元開始。」

創名の詠唱に応え、復元されるのは先程砕かれたゲイ・ボルグ。

神話においてクー・フーリンは奪われたゲイ・ボルグによりその命を断たれた。真名を解放出来なくとも、ランサーに確実にトドメを刺すのにこれ以上無い選択だ。

「(呪いにおいて命じる。拘束を振りほどき、敵マスターの心臓を奪え。)」

敗北を悟ったランサーに念話によって伝えられた命令。いつから気づいたのか途中から見ていたのだろう言峰綺礼による命令。これによりランサーの意思とは関係なく、創名を殺す為に体が動くはずだった。しかし、ランサーは拘束を振りほどくことすら出来なかった。理由は簡単、ランサーが身に付けたウアレンティヌスの聖骸布だ。この聖骸布はあらゆる命令、暗示を無効化する。その際、例えば命令が対象に利をもたらず物でも無効化する。故に、ランサーへの命

呪による命令は不発となった。

「そっちの手は読めてんだよ、外道神父。」

ランサーを通してこちらを見ているだろう言峰綺礼に凄惨な笑みを見せつけ、紅の槍でランサーの心臓を貫いた。

「……見事だ。坊主、あの神父の裏をかくたあな。最期に良いものが見れたぜ。」

愉快そうに笑い、ランサーは空気に溶けるように消えた。残されたのは赤い聖骸布だけ……

「アサシン、行くよ。」

「予定通りに、ですね。」

聖骸布を再び首に巻いた創名はアサシンに一声かけ、マンシヨンの屋上から夜の街へと飛び降り、アサシンもそれに追従する。

目指すは教会。言峰綺礼。

正義から遠き二人

正義から遠き二人

「ランサーが討たれたか。そろそろギルガメッシュを動かすか——」
言峰綺礼は先程の光景を思いだしながら呟く、衛宮創名。自身の仇敵とも言える男の養子であり、綺礼からすれば興味深い衛宮士郎の双子の弟。

しかし、ランサーと共有した視界に映った彼は二人からは似て非なる性質を持つているように見えた。そう、例えるなら第四次聖杯戦争終結のあの時見た、忌まわしくて愛しい聖杯のような……

そんな思考をしながら綺礼は教会奥から礼拝堂へ踏み込み、喉から笑いを洩らす。

教会の礼拝堂は、銀の砂が溢れていた。

唯一砂がががかつていない信者席には少年が一人腰掛けている。

「God, give us serenity to accept what we cannot be changed, courage to change what should be changed, and wisdom to distinguish between the one from the other.」

「主よ。変えられる物を変える勇気と、変えられない物を受け入れる心の静けさと、変えられる物と変えられない物、その両者を見極める叡智を我等に与えたまえ。」

ラインホルド・ニーバーの言葉か。汝、神に祈る子羊か？衛宮創名。」

「——自分は神に祈らないよ。ただ、この言葉通りに色々と割り切れたら楽だったろうな、と言うだけだよ。」

創名の呟きに綺礼が問いを投げ掛け、創名は自嘲しながら即答する。

「ギルガメッシュを呼ぶのは無駄だよ。アサシンが足止めしてる。令呪も無意味、それはさつきランサーへの令呪の命令を無効にした事で理解してもらえてると思うけど。」

「ククツ、ああ勿論。元よりギルガメッシュを呼ぶなど無粋な事をするつもりは無い。」

令呪による強制転移は防げないがハツタリで封じようとする創名に、綺礼は不気味な微笑を浮かべ答える。ハツタリに引つ掛かったと言ふよりは、本心からそう思っているのが明らかであり、創名はそれに不愉快そうに舌打ちをする。

「無粋かどうかは知らないけど、貴方と自分が話してるだけなのも粋じゃないでしょ？」

創名の言葉と共に銀の砂が舞い上がり、攻撃の準備を開始する。しかし、綺礼はそれを察しながらも一切構えず、ただ見透かすような瞳で創名を見つめるのみだった。

「まあ、待て、衛宮創名。お前にとって、私は何時でも殺せる相手だ。遺言ぐらいは言わせてくれても構わんだろう？」

綺礼は創名の左胸、いや、心臓を見詰めて言う、何もかも知っているとしても言うような表情だった。

「まさか、前回の聖杯の欠片を心臓に埋め込むとはな、サーヴァントにさえ匹敵しうる魔力のタネはそれだな？」

「……」

綺礼の言葉に創名は沈黙する。その言葉に動揺した訳ではない。

心臓の仕掛けその事が綺礼に看破されるのは予想通りだった。しかし、それに気付いていながら本気で今の状況を楽しむ事が出来る異常性に閉口したのだ。

綺礼の言葉通り、創名の心臓には桜の心臓から奪った『マキリの聖杯』を改造したモノが埋め込まれている。

聖杯の泥から体を創られた創名は、聖杯との相性が良い。それこそ、聖杯の呪いにより、魔力を活性化させることも、その身に宿した聖杯にくべられたサーヴァントの魔力を引き出す事も出来る程度に。

それは、聖杯の泥を喪った心臓代わりになっている綺礼に対し、絶対的な優位を持っているのと同義だ。そうでなくともアンリ・マユの呪いを活性化させる創名が近くにいれば、綺礼を生かしている呪詛の泥が綺礼を蝕み、死を与える。

創名が目の前に現れた時点で、綺礼は詰んでいるのだ。ランサーがいれば、逆転の可能性もあった。呪いにより、アドバンテージを奪われる綺礼と、無限の剣骸によりほぼ全ての攻撃手段を封じられてしまいうギルガメッシュだけではなく、一撃でその心臓を穿つ事が出来るランサーがいれば、この状況からでも創名の心臓を聖杯ごと破壊し、魔力による不利をなくす事が出来ただろう、だから、創名はランサーを撃破して間を置かずに綺礼を襲撃したのだ。暗躍する者が表舞台に現れる派手に動くのは、成功が確実となった時のみなのだから。

そうだと言うのに、綺礼にも創名にも目に見える変化は無い。敗北が決定した絶望も、勝利が約束された高揚も二人には無い。ただ、目の前の存在を観察している。片や自身の愉悦の為に、片や何の感情も無いような瞳で……

「無駄だよ。自分は傷だらけだけど、貴方に開ける傷はない。」

やがて、綺礼の心の傷を、魂まで届く傷を見透かさんとする視線に對して、創名が煩わしそうに言う。その言葉に綺礼も頷く

「然り、その様だ。魂までが傷にまみれているというのに、それだけだ。血も流れず、膿みもしない、かといって回復するわけでもない。まるで生まれた時からそうであるかのような傷……」

そこまで言って、綺礼は何かに思い至ったように笑みを深めた。

「いや、傷その物がお前の存在証明。衛宮創名という存在と衛宮士郎という存在を分けるのはその傷のみ——」

「——故に、創キズこそが自分。」

綺礼の独白のような言葉を遮り、創名が言う。淡々と、詠うたうように、衛宮士郎を模した泥人形に宿った、衛宮創名という名が与えられたモノの正体を……

「切嗣が自分に創名という名をあてがったのは、どういう意図が有ったのかは知らないけれど、コレほど相応しい名は無いだろうね。」
創キズに与えられた名。即ち、創キズ名。

それが、衛宮創名の存在を縛る正体真名。オリジナルとの差異など魂の創キズの有無しか無いなら、創キズこそ衛宮士郎の模造品を衛宮創名とする唯一の存在証明、創名自身とも言えるアイデンティティ。

「創キズが傷付く事は無い。成る程な、だからこそ如何なる者の如何なる言葉も、お前の思考を、目的を、行動を変える事も止める事も出来ない……死以外ではな。」

とんだ泥人形マカイモノだ。一度乾いてしまえば砕ける事でしか形を変えられない。」

傷付く事は、言い換えれば変化するという事だ。創名の精神は、それが出来ない。幼い約束の月夜から、彼のは何一つとして変わっていない。年月も平穏も、士郎家族の言葉でさえ、創名を変えられない、止められない、傷付けられない。それは、人では持ち得ざる精神性。衛宮士郎の自分を顧みない精神とは真逆の、自分の目的しか顧みない精神。

一人で壊れ、戻り、崩壊と再生を輪廻する。一人で閉じた、完結した精神世界無限の砂漠。それこそが、創名をただ一人の為の絶対悪に至らしめる致命傷。

「そうだね、自分は紛い物でしかない。」

しかも、返品必至の出来損ないだ、そうおどけながらも、なにかを確定させるように言葉を続ける。

「けれど、自分の願いや目的は本物だ。どれだけ間違った物だろうと、切嗣から与えられた物だろうと、自分の心にある、自分だけの物だ。」

そう言った自身の言葉が正しいと信じて創名は行動する。原点から誤っていると知っていないながら、正しいと信じる事を止められない。

「お前がそうだと信じるならばそうなのだろう。」

創名の矛盾を愛できるように綺礼は笑い、腕を広げる。これで最後だと言うように。

「偽物が本物に焦がれるのは道理、お前が目的を果たさんと死力を尽くすのも尤もだ。その熱意、その情念、果てを見られないのは残念だ。」

最期の祝詞を唱える。神を讃える言葉、神に赦されないモノを愛した魂は果たして救われるのか、それを知る者は誰も居ない。

創名が一丁の銃を向ける。それは、綺礼がかつて答えを求め、相対した衛宮切嗣の切り札の後継、アンコール。それから放たれた弾丸が

綺礼の左胸に喰い込み、瞬間、魔力が炸裂し野球ボール程の風穴をあけ、聖杯の呪詛による炎が上がる、第四次聖杯戦争終結時に多くの人を焼いた炎だ。

「貴方の生き方は大嫌いだけど、貴方自体は嫌いじゃなかったですよ。」

燃え上がる骸を見つめて囁く、それは完全に死亡したかを見届けるついでのような、ぞんざいな、だからこそ心の底から思っている事を洩らしたような言葉だった。

「求道者に死後の救済が在らんことを……Amen。」

吊いの言葉を言うのと同時にアサシンから撤退に成功したという報告が念話を通じて届き、安堵の息を吐く。

燃え移る炎を横目に、教会の地下へと歩き出した。

その日、教会で起きた火災と教会の神父と思われる焼死体が発見された事が報じられた。

王と誓者

穏やかな日が差す平日の公園のベンチ、創名はそこに腰掛け人を待っていた。

「まあ、人というべきか、幽霊というべきか、それとも．．．」

公園で元気に駆け回る小さな子供たちを眺めながら、ぼんやりと無駄な思考を行う。冬木教会を焼き払ってから一夜明け、今まで魔術回路をフル起動させて、様々な処理や準備をしていたせいで一睡もしていないのだから気が抜けても仕方ないだろう。しかし、そんなことお構いなしに、警戒用に張った結界に何者かが触れた。時計が指しているのは指定の時間であり、それが創名には意外だった。もつと遅れてくるか、最悪この場に現れないのも想定していたのだ。そして、公園に入ってきた人物が創名の前に立ち、声をかける。

「ふん、王たる我を呼びつけるとは万死に値するぞ、雑種。」

「そう言わないでよ、王さま。ギルガメッシュ自分は臆病でね、自分のテリトリー以外に行くとは死にそうになる。」

怒りの中に嘲りを含んだ言葉に、創名はため息のように言葉を吐いた。

神を疎む半神の王と神を目指す愚直な誓者が対面したのだ。

創名が言峰綺礼を殺害するまでギルガメッシュの足止めをしていたアサシンにもし、創名が綺礼を殺せたなら今日、この時間にこの公園に来るようにと告げさせていた。ギルガメッシュはその賭けのよいうな言葉に是と答え、創名は綺礼を殺害した。ゆえに、二人はここで対面したのだ。

「ここが、テリトリー？笑わせる、このような結界よりネズミの巣の方が良い出来だ。」

創名の言葉をギルガメッシュは嘲う、確かに公園に張られた結界はお世辞にも上等とは言えない、人払いなど神秘を秘匿する為の効果は一切無く、ただ、領域内で魔力を乱反射させて中にある魔力を帯びたものを魔力の検知などで発見させないというだけの結界だ。

「大方、あの薄汚い犬アサシンを隠す為のものだろう？殺したと思えば脱皮する不愉快なサーヴァントだ。」

「・・・脱皮か。アサシンの宝具ってそういう扱いなんだ・・・」

ギルガメッシュの言葉を否定せず、対象の肉体に成り代わるといふ宝具へのギルガメッシュの言葉に小さくうなだれる。アサシンは足止めの際最後の致命傷を宝具を解除することで回避したようだがギルガメッシュにはそれが脱皮に見えたようだ。確かに、被っていた皮を脱ぎ捨てているのだから間違っではない。

「まあ、念の為だよ、この場で戦う気はない。」

「どうだかな、お前はどうかやらマガイモノのようだ、その程度の者の言葉を我が信じるか？」

「さあ？まあ、王の死因は暗殺が多いらしいから、貴方王さまが怖がるのも無理はないかもしれないね。」

言い放たれた言葉に、ギルガメッシュの紅い目が細められる。

「言うではないか、雑種。その首、余程要らないと見える。」

言葉と共に僅かにギルガメッシュの背後の空間が揺らめく、ギルガメッシュの宝具、王ゲート・オブ・バビロンの財宝が発動しかけたのだ。

「まあ、待ってよ。別に殺し合いするのは良いけど、用件も言わずに殺すってのはちよつと器量が小さいんじゃない？」

しかし、圧倒的な死の気配を放つ空間を見ても顔色を変えず言葉を続ける創名を見て、気が変わったのか発動を取り止める。

「ほう、ならば聞いてやろう。だが、それが興醒めな物だった場合、その取るに足らん命で償ってもらおう。」

「取るに足らないなら取らないでよとか思うけど、まあ感謝するよ。」

肩を竦めながら創名は言い、鬼ごっこをして公園を走り回る子供達やベンチの横の砂場で遊ぶ子供達を見る、彼らは言ってしまうえば創名の意思表示である、この場で魔術を用いた戦闘をするつもりはないというメッセージ、流石になにも知らない子供達を巻きこむほど墮ちてはいないが、戦闘になった場合彼らを守るといふ気はなかった。

「貴方の確かな目を見込んで聞きたかったんだ。自分はどのような状態に見える？」

「なるほど、この結界はお前を隠す為のモノか。」

言われて、はじめて気付いたようにギルガメツシュが言う。結界のせいで魔力を上手く感じ取れないが、意識してみると、禍々しいまでの魔力を創名は放っていた。其はこの地の聖杯を侵す呪い、人を邪神たらしめた醜い願い。衛宮創名は、聖杯の呪いに蝕まれていた。

前回の聖杯戦争の聖杯の欠片、それが創名が桜から摘出し自分の心臓へと埋め込んだものだ。それは、ある可能性の未来で優しい少女を「反転」させ、暴虐を行わせた呪いの根幹であり、ある意味での「この世全ての悪」の種とも言える物だ。創名が呪いの泥から産まれた存在造られたとは言いども、耐性には限度がある上に自身の元となった呪いは創名の意思とは関係無く創名に馴染み、変貌させようとする。

「・・・どうやってるかは知らんが、呪いにより反転するはずの魂を強引にもとの状態に戻すことで正気を保っているようだが、そう遠くないうちに呑まれるだろうな。」

そして、創名を検分するように見ていたギルガメツシュが愉快そうに告げた。

「サーヴァントの魂を受け入れた事で大聖杯と繋がり、汚染が効果を出し始めたのだろうよ。耐えられたとしても魔術回路が汚染されまともに行動出来なくなるだろうな。」

創名は固有結界『無限の剣骸』を体内で常時発動させる事による驚異の自己修復能力で呪いによる「反転」を防いでいる。だが、その制限展開も魔力を喰い、その魔力は聖杯から引き出した呪いの魔力である。このままでは、創名が正気を保っていられる時間は多くない。この世全ての悪に堕ちるまでに聖杯を完成させ、衛宮士郎に殺されるという制約を加え、その存在を『この世全ての悪』を『ただ一人の為の絶対悪』へ変化させなければ創名の目的は達成されない。

ギルガメツシュの宣告に、創名はため息を吐く。自己の診断と全て一致していて、呪いの進行を抑える方法は知らないのか言う気が無いのか、ただ愉悦に浸るように笑っている。ギルガメツシュをここに呼び出したオマケの目的は空振りだったようだと創名は諦めた。

そして、本命の目的の為に動き出す。

「ありがと、ギルガメツシユ。とりあえず、自分には時間があんまり無いことが分かったよ。」

「ふん、この我を呼びつけておいて、これで終わりか?」
「まさか。」

創名が小さく笑い、ギルガメツシユを口の端を吊り上げる。二人の間の空気が高まり、そんな空気を感じとることも出来ないのか鬼ごっこをしている子供達がそのすぐ横を駆けていこうとした瞬間、

「起動しろ、砂の剣」

創名の詠唱と共に、公園の砂場の砂が遊んでいた子供ごと巻き上がり、ギルガメツシユを襲う。砂場にはあらかじめ創名が投影していた銀の砂が大量に混じっており、それが子供を巻き込んでまで攻撃して来ないと予想していたギルガメツシユの不意を突いた／注意を引いた。

「チィッ!」

ギルガメツシユは砂場に体を向け、銀の砂嵐を打ち払うべく
ゲート・オブ・パレロン
王の財宝を発動させた。その刹那、

「令呪において命ずる! 宝具によってギルガメツシユの体を奪え、アサシン!!」

月と剣を連想させる創名の令呪が一面欠け、その理さえ曲げる力に後押しされて、アサシンが鬼ごっこをしていた子供の体から弾けるように飛び出し、背を向けたギルガメツシユの体に触れる。

ザバ! ニーヤ
妄想身体

それは、正義を求めた暗殺者が生涯に渡って鍛えた秘技。ただ一度しか見破られなかった彼の奥義。

一瞬でアサシンの体はギルガメツシユの体に吸い込まれるように消え、殺害対象の体を内から殺し尽くさんとする。

「おのれ、暗殺者め! だが、足りん!」

体の中に潜り込まれてなお、ギルガメツシユは抵抗するように魔力を高め、実際に侵食は目に見えて遅くなった。

「クハハ、足りん、足りんぞ。我の体を奪いたければこの三倍は持つていこー!」

「ふーん、やっぱりか。それじゃあ遠慮なく。」

勝利したように笑うギルガメツシュに創名はなんの感情も宿さない瞳を向け、令呪が刻まれた手を掲げる。

「令呪を重ね、厳命とし。さらに重ね、絶対とする。我が命を遂行せよ。」

令呪が二画、輝きながら消え、ギルガメツシュの中でアサシンが歓声を上げる。もはやギルガメツシュの抵抗など意味は無いとでも言うように。

「令呪を二画追加で令呪三画、お望み通り三倍だよ。」

「オノレ！オノレ！オノレ！オノレエ！！謀ったな雑種ウ！」

「そうだね、それでこの結果は因果応報だ。十年前に消えるはずだったのが無理矢理残るからこうなるんだよ」

ギルガメツシュの肌の下で蠢くアサシンが、全身に行き渡りそして「さようなら、最強最古の英雄王。」

皮膚の泡立ちがピタリと止まり、ギルガメツシュだった体に成り代わったアサシンがニヤリと笑う。

「命令通り^{オーダー}に遂行しましたよ、マスター。」

「ご苦労様、アサシン。」

創名の言葉と共に公園にいた子供達は全員が倒れ、一様に呼吸を止めていた。それもそのはず、彼らは全て死体だったのだから・・・

もし、ギルガメツシュがもっと公園の子供に興味を持っていれば、あるいは気付けたかもしれない、公園で遊ぶ子供たちが教会の地下で十年もの間自分の餌になっていた子供達だということに。

創名は教会を燃やす前に、地下の子供達を回収した。治療を施したが、肉体、精神、魂といった人を構成する全てが瀕死であり。全ての子供は救えなかった。救えなかった子供達を安らかに送ってやり、その死体を魔術によって動かしていた。魔力感知を妨げる結果は、アサシンを隠す為であり、意識を創名の魔力に集中させるためのものでもあり、総じて、死体を操る魔術に気付かれることを防ぐ為のものであった。

そもそも、平日の昼間に親がいない公園で多くの子供が遊んでいる

こと事態が不自然であるが、人間に興味を持たないという慢心ゆえにギルガメッシュは気づくことは出来なかった。公園に来る可能性のある子供と親には来ないように、家に忍び込み暗示をかけた。それにより人払いの境界がなく、子供を一般人だと錯覚させたのも大きかったかもしれない。

「はあ、マスター、この骸奪^{からだ}ったのは良いけど、せいぜい三割程度の性能しか出せねーぜ、魂が違い過ぎる。」

「まあ、慢心しない英雄王の三割なら十分だよ。宝具は？」

「乖離剣と王の財宝の一部が使用出来ない」

ゲート・オブ・バビロン

アサシンの報告に頷くことで問題無いことを伝える。

「それなら計画に支障は無いよ。後一手でチエックメイト、と言いたい所だけど、その前にもう一手打つところか。」

「あいよ、マスターの仰せのままに」

姿を変えた従者を伴い、創名は公園を後にする。その後ろで子供達の死体が炎を上げて燃え尽きていく、それは送り火のようにも見えた。

補足説明4

無限の剣骸、制限展開

切嗣の固有時制御を参考に作られた体内にのみ固有結界を展開する魔術

再生の効果は常に自身を一定状態に保つもので、回復や治癒とは似て否なる物。ダメージを受ける前の状態をセーブしていて、ダメージを受けたらロードしているのに近い。

破壊の能力で、体内に入った武器を破壊すると言う武器に対する力ウンターを行う。しかし、斬られるなど、一瞬しか体内に接触しない場合は効果は発動されない。

創名にとつての奥の手ではあつたが、聖杯のお陰で魔力を気にしないで良くなった為頻繁に使っている。

アサシンステータス

アサシン

真名：ハサン・ザツバーハ

マスター：衛宮創名

身長体重：可変

属性：秩序／悪

イメージカラー：クリア

特技：変装／演技

好きなもの：生前の想い人／神

苦手なもの：宗教戦争／悲恋系の物語

天敵：衛宮創名／バーサーカー

筋力D 耐久E 敏捷A 魔力D 幸運B

気配遮断 A+

自身の気配を消す能力。完全に気配を断てばほぼ発見は不可能となるが、攻撃態勢に移るとランクが大きく下がる。

自己改造 A++

自身の肉体に別の肉体を付属・融合させる。このスキルのランクが

高くなればなるほど、正純の英雄からは遠ざかる。

創名のアサシンは宝具と併用することで完全な成り代わりを可能とする

空蟬 B

着ている服や体の一部を囫にするなどして、攻撃を回避または無効化するスキルの総称。アサシンは被っている皮を放棄することで致命傷を回避することができる。

宝具

—妄想身体《ザバー・ニーヤ》

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

他者の皮を被り、成り代わる秘技。それは例え肉親でも気付く事は不可能であり、それが宝具と成ってからは対象の宝具を含めたスキルさえ使用可能となった。また、被る皮は使い捨てで、一度宝具を解除してしまうと同じ人物には成り代われず、ステータスの伴わない見た目のみの変装になる。

本来は殺した対象に成り代わるものであり、作中のような一撃必殺の宝具として使う為には令呪や儀式などによるサポートが必要。

アサシンのサーヴァントであり、ハサンの中でも高い能力を持つ。

その願いは誰もが信じる正義の誕生。創名の目的である士郎を正義の味方にするのがそれに当てはまると考え、創名に従う。マスターが創名で有る限り令呪を使い切っても反乱は無い。

ちなみに、このサーヴァントを敵にした場合は視界に入った人間を無差別に攻撃するのが効果的な対処方

一撃必殺しなければカウンターで死にかねない為、一撃では絶対死なない魔術、宝具持ちには弱い

余談

最初のプロットでは敵だったサーヴァント、慎二に成り代わり桜から心臓を奪った後、創名にタイムマンで負けて消えるハズだった。

オマケ

創名が使っていた死体を操る魔術は、外道から狩った物。資料は工房に置いてある↓創名の工房2

召喚したのがアサシンでは無かった場合の為のギルガメッシュ攻略用礼装←

神奪の聖書

他教徒を弾圧してきた聖職者の皮膚で作られた聖書。他の宗教の神を悪魔として書き、その神の権能を奪い、存在を歪めてきた事を利用した礼装、対象の神性をランクダウンさせ、それに合わせてステータスを低下させる対神礼装。

ぶつちやけてしまうと、神性を持つサーヴァントがいる聖杯戦争以外では使い道の無い値段だけが張るアンティーク。蒼崎橙子からの購入した品。

前哨戦、もしくは前兆Ⅰ

創名が色々やらかしているなか、遠坂邸を拠点とした士郎達はそれぞれがやるべきことこなしていた。屋敷の主である凜は桜の体を調べ、その対処を行いながら、バゼットと協力し創名の工房にあった資料の解析、桜と慎二は彼らの祖父が消えた家から資料を持ち出し、凜に協力している。セイバーは屋敷の警護と士郎に稽古を付け、士郎はセイバーに稽古をつけてもらいながら家事をして、街でイリヤスフィールに遭遇し、遠坂邸まで連れてくるという魔術師の常識を斜め上にぶちぎる行為を披露している。イリヤ本人に敵意が無かったのもあって穏便にすんだが、一歩間違えば壮絶な戦いに発展したかも知れなかったのである。あかいあくまのガンドの的にされたのにも同情の余地はない。そして、アーチャーの役割は偵察と監視で、衛宮の武家屋敷を監視している。アーチャー達がこの街で確認している創名の工房はそこだけなので念のためである。発見出来なかっただけで創名の礼装が隠されていたり、何らかの儀式の要に設定されている可能性も高いとして、その変化を見逃さぬように監視がもうけられており、鷹の目を持つアーチャーがその役割をこなしている。

そんな中で、凜の解析がある結果を出していた。

「ふう、この情報から導きだされるのはそういうことだけど、あり得ると思う?」

「衛宮切嗣が残していたハーヴェストの身体データは疑いような無い物であると結論を出した以上、そこから求められる答えは自ずと真であるはずですが・・・確かに信じがたいですが」

衛宮家で見つかったデータは、二人の魔術師にとって疑わしい結論を弾き出していた。すなわち、衛宮創名と衛宮士郎が限りなく同一の存在であり、その違いはわずかな魂の変質キズのみであるという結論である。

「そうね。ただ、これが真実なら、それは普通では起こり得ない。誰かが士郎のレプリカとして創名君を作った。そう考えるのが自然よね。」

「ええ、その『誰か』は皆目見当も着きませんが。」

二人で話し合いを重ねながら、凜の脳内にはある考えが浮かんでいた。それは、確実に創名を殺す事ができる方法であり、即刻破棄するべきと思える物だった。

「アーチャーも士郎も、創名君を止めることを目指している。創名君を殺すことはできない・・・手遅れになるその直前まで)」

クラスメイトを救いたいとただの学園生活を過ごしていた凜が思い、殺さなければ止められないと優れた魔術師である遠坂が告げ、自分のサーヴァントの願いを叶えてやるべきだと誇り高き遠坂凜が言う。対立した考えたちは、諦めずに止める方法を探すと言う意思に統一された。

「心の贅肉ね」

普通の魔術師ならば有り得ない葛藤を飲み込み、凜はため息と共に言葉を吐いた。

『凜、創名を発見した。ギルガメツシユと共に衛宮の家に向かっていく！』

「なんですって!?!」

アーチャーからのパスを使った報告に凜は驚きの声をあげた。創名がこちらの一応程度の備えに掛かったことにもだが、ギルガメツシユと共にいる事である。アーチャーの話では、ギルガメツシユの狙いはセイバーであり、セイバーは士郎のサーヴァントだ。士郎と敵対している創名と協力関係にあることはあり得ない事ではない。もしくは、ギルガメツシユは既に殺されており、創名と共にいるのは英雄王の皮を被った暗殺者か。

「(どっちにしても状況が悪化してるじゃない!前者ならアサシンが創名君の守りを考えずに暗躍してくる。後者なら最強のサーヴァントギルガメツシユの最大の弱点と言える慢心と唯我独尊さが消えている。)」

僅かな間に考えを巡らして、それぞれの可能性を検討する。

『アーチャー、ともかく見失わないように監視してて、私は士郎とセイバーを連れて合流するわ。』

『それは危険だ凜、ギルガメッシュと創名が手を組んでいる可能性がある以上、拠点を守るサーヴァントがいなくなるのは不味い。君たちが家を出ている間にアサシンが強襲を仕掛けてくる恐れがある。』

凜の取ろうとした行動をアーチャーが否定する。遠坂の屋敷がある土地は冬木の一級の霊地であり、聖杯を降臨させることが出来る四つの霊地の内の一つだ。そこを押さえられるのはあり得てはいけなし、ここにいる桜やバゼット、ついでに慎二を人質に取られる可能性がある。守備にアサシンを退けることの出来るサーヴァントは必須と言えた。

『ギルガメッシュの皮を被ったアサシンかもしれないでしょうが!? それなら一人で戦うのは無謀だし、ウチの守りも必要ない。』

『だが、そうではないかもしれない。その賭けはリスクが大きすぎる。なに、私に考えがある。』

その言葉の後に続いたアーチャーの『考え』に凜は渋い顔をする。

『確かに、この状況からすればベストかもしれないけど、士郎にかかる負担と言うか、コストが大きすぎるわ。』

『己の弟が起こした事態だ。それぐらいは支払われてしかるべき代償だ。本人に確かめてみたまえ、確実に嫌とは言わん。』

アーチャーからの念話に渋々ながら了承を示して、その策を伝えるべく同級生の名を呼びながら外へと駆け出した。

前哨戦、もしくは前兆2

寝静まった住宅街をアーチャーと合流した凜と土郎が駆ける。

「アーチャー、間違いはないんだな？創名の目的地は。」

「ああ、間違いなく、創名は『衛宮の家』を目指して移動している。」
隠れる気があるのか無いのか分からない、中途半端な隠密性で行動しているがな。と付け加え、二人に速度を合わせながらも鷹の目で監視を行っていたアーチャーが報告を続ける。

「む、創名達が着いたようだ。家の中に入っていくな。凜、私は先行する。」

「ええ、私たちが着くまでの足止め、任せたわよ。」

「承知したマスター。」

一言を残してアーチャーはその姿を消し、気配が遠ざかる。

「土郎、急ぐわよ。時間はアーチャーが狙撃なり、口先なりで稼いでくれるでしょうけど、無限じゃないわ。」

「分かってる！」

身体強化の魔術を行いながら、それなりの距離を全力で走ることは行使に慣れていない土郎には至難のようだが、それをやめさせて普通に走るほどの時間は無い。アーチャーの性能は高い、それこそ創名が入った家ごと吹き飛ばす気で全力の狙撃による攻撃を行えば、確実に深刻なダメージを与えることが出来るだろう。しかし、アーチャーにはそれが出来ない。正しい意味で『正義の味方』に祭り上げられた今の彼には、肉親創名を躊躇いなく殺す事は創名を止めるといふ願いを否定することになるからだ。口でこそ出来ると言い、本人も殺せると思っているようだが、アーチャーの記憶と感情をパスを通じてうつすらと知る凜にはそれが、本当に手遅れになる瀬戸際まで行われぬ最終手段であると察しがついてしまっている。そうになると、足止めは姿を見せるとの真つ向勝負か会話による時間稼ぎになる。その状況に成ってしまえば創名の方が有利であると、何故か確信していた。

会話もなく、二人は走り続けてやがて目的地が見えてくる。土郎に

とって慣れ親しんだ家の門には赤い弓兵が背中を見せ、なにかを小脇に抱えた創名とその傍らに立つギルガメッシュと対峙していた。

「……ッ！創名ア!!」

「ん？ああ、士郎も来たんだ。」

士郎の叫ぶ様な声に創名は答える。どこか予定が狂ったと言いたげに眉がしかめられ、表情も曇っている。

「士郎からも言ってくれない？アーチャーってばそこを通してくれな
いんだ。戦う気は今のところ無いってのにさ。」

「そんな理屈が通ると思ってるのか？悪いが、そちらには戦う気が無くともこちらにはお前達を止めなければならぬ理由が有る。」

士郎に向けられた言葉をアーチャーが皮肉げに笑いながら返す。

「酷いなあ、こっちは忘れ物を取りに来ただけなのにさ。」

「貴方の忘れ物なんてロクでも無い物でしょ？」

「心外だな、と言いたい所だけど確かにロクな物じゃないね。」

言いながら創名は抱えていた物を士郎達に示す。

それは、一見すれば液体で満たされた大きな瓶だ。中には黒い紋様が刻まれた肉塊が浮いている。士郎には其れが何なのか分からなかった。凜とアーチャーは其れが何か理解していた。

「衛宮切嗣ジイさんの魔術刻印……!?!」

衛宮の家に伝わって来た魔術刻印、持ち主である衛宮切嗣が死亡したことで失われた筈のものだ。其れを創名はどんな手段を取ったのか、存在させていた。

「……其れをどうするつもりだ？」

「別に悪用する気は無いよ。自分が持っているより相応しい持ち主がいるから届けようかなと思ってるね。」

「……」

悪戯っぽく笑う創名をアーチャーは睨み付けるが、意に介した様子もなく言葉が続ける。

「まあ、戦う気はなかったけど、敵サーヴァントが一体なんて自分達に有利な状況だし、戦力を削るぐらいしとこうかな？」

やれ、アサシン」

創名の声に応じて、アサシンが創名の前に進み、背後に宝具を呼び出してアーチャー達を狙うのと、士郎が声を上げるのはほとんど同時だった。

「来い！セイバー!!」

「・・・!?!」

士郎の令呪が一画欠け、遠坂邸の守備に回っていたセイバーを空間を越え呼び出した。それも、創名とギルガメッシュの間の位置にだ。手にはアーチャーが投影した諸刃の名剣があり、自身が回るように振るうことで創名の腹を、アサシンの背中を切り裂かんとする。

これが、アーチャーの言っていた『考え』ギルガメッシュと創名が手を組んでいる場合に備え、セイバーを拠点の守備に回し、ギルガメッシュがアサシンに成り代わられていることが分かれば士郎が令呪を使ってセイバーを転移させて、不意を突く。令呪を一画と、代償は大きいが見合うだけの効果はあった。剣は創名の腹を裂き、ギルガメッシュの鎧に当たり砕けた。創名が体内に展開していた『無限の剣骸』の効果による物だ。これがセイバー本来の剣、エクスカリバーなら肉まで届いただろうが、其れでも骨を断てずに砕けていただろう。

「チィ、やってくれるじゃないか!」

アサシンが舌打ちしながら剣を振るうが、セイバーは其れを掻い潜りながら聖剣を呼び出し応戦する。創名も再生効果によって傷を修復し、戦闘に参加しようとするが、再生のタイムラグは必ず存在する。その間にアサシンを倒すところ、この策の狙いだった。アーチャーを始め、誰もがこの策の成功を確信した。

創名が口を開くまでは・・・

「ダメージを確認・・・修復完了。一部権限の委譲を確認。戦闘を開始します。」

それは、人間らしさを一切感じさせないシステムボイス機械音声を思わせる声だった。熱がある訳でもなく冷たいのでもない、淡々とした言葉。なにかを伝える為ではなく、ただそういうシステムだからと言うような、意思が一欠片もこもっていない台詞。それが、創名の口からでた『音声』

だった。

「敵個体4、内訳はサーヴァント2、魔術師1、保護対象1。危険度もっとも高い個体、サーヴァント2体を優先。」

その瞳はもはや光を刺激として受けとるためだけのセンサーであり、そこには何の感情も宿していない。

セイバーや凜は勿論、士郎とアーチャーも見たことの無い創名の姿に思考を巡らし、行動に僅かな隙が出来る。それは、今の創名にとって十分過ぎる好機であった。

「展開せよ。骸の砂。」

1小節の詠唱で、銀の砂が空間を包むように投影され、全員の視界を包み、姿を覆い隠す。

「あつちやー、リソースが修復に回っちまったからか？不味いな。」

突然の目眩ましに、それぞれが対応しようとする中でアサシンの愚痴のような声が出た。その直後

「眠れよ、正しき——」

それは詠唱だった。創名の音声によって紡がれる呪文。目眩ましからの攻撃にアーチャーと士郎が警戒するなか、セイバーと凜は頭の中で危険を告げる警報がなり続けている。セイバーは直感のスキルによって、凜は、優れた魔術師として感じた違和感によってである。

「謳えよ、この呪詛——」

凜が感じた違和感の正体は詠唱の長さだ。今まで創名の魔術は固有結界を除いてその多くが1小節の短い詠唱で発動する物だった。一概には言えないが、詠唱の長さで魔術の効果は比例する。その考えに至った時点で凜の令呪は赤い光を発していた。

「アーチャー、私達を連れて魔術の効果範囲から離脱しなさい！」

令呪を使用した命令に従い、アーチャーが後退、凜と士郎を抱えて限界を超える速度で家の敷地のから飛び出そうとする。見えないながらも直感で察したセイバーもそれに続く。それを追い掛けるように、あるいは阻止するように詠唱の終が紡がれる。

「我が身を喰らいて——」

「我が意を示せ！」

世界が燃え上がった。

そう錯覚する様な業火が沸き上がり、炎が触れた存在を一瞬で焼き尽くした。

「これは・・・」

令呪によつて離脱し、道を挟んだ向かいの家の屋根に着地したアーチャー達はその光景に言葉を失う。呼び出されたのはただの炎ではなく、禍々しい物に満ちた呪いが、炎として発露しているだけのモノだと一目見ただけで理解させられた。その炎の名はこの世全ての悪、聖杯の中身であり形の無い魔力、それは契約する者によつてはサーヴァントさえ飲み込む影や、閉ざされた数日間を繰り返させるサーヴァントなど、様々な形を取る。創名の場合、この全てを灰に変える呪詛の炎なのだろう。

「投影の砂を媒介に自身と契約しているモノを召喚したのね。なんてデタラメな威力・・・」

「私たちの投影は固有結界から零れ落ちるものだ。つまり、固有結界にまであの呪いが侵食しているという事だ。」

手遅れ、そんな言葉がその場の全員の頭に浮かび、それを肯定するかの様に創名が小さく音声を吐き出し続ける。

「対象の消滅、確認出来ず。敵個体全生存を確認。令呪による限界突破を確認。引き続き、排除を行います。」

炎の中から、再び音声が流れる。当然の様にそこには、仕留められなかった悔しきなど一切含まれていない。

「殲滅方法の検索、該当『天よ我が罪を裁け』、半径1キロを殲滅します。」

殲滅範囲に保護対象が存在、却下」

「前提条件を変更、戦闘方法を検索、該当102件、条件を追加し再検索。」

創名の形をしたナニカが炎より現れ、士郎達に向き合う。改めて見たその姿に、士郎は吐き気をおぼえた。敵対し、武器を向け合っても創名の瞳に有った、創名らしきとでも言うべき茶化しながらも人を感じる意思さえ消え、ただ空虚のみを示す瞳は剥製のようであり、見てい

るだけで人を消耗させる痛ましさが有った。

「該当、『起源覚醒：輪廻』発動。

戦闘を開始します。」

人形の宣告と共に再び銀の砂が舞い上がった。

前哨戦、もしくは前兆3

「該当、『起源覚醒：輪廻』発動。

戦闘を開始します。」

その言葉は引き鉄だった。

銀の砂が舞い上がり、創名の手の中で剣の形を取り始める。それを妨げる様にセイバーが屋根を蹴り、人間味の無い敵へと駆ける。

「AD. 1868」

ポツリと落とされたのは創名の詠唱。その眩きによって野太刀が形成され、創名はそれを構えセイバーを迎え打つ様に駆け出した。

「ーッ■■■■」

駆け出すと同時に創名から発せられたのは、今までの無機質な声質を保ちながら、バーサーカーの如き気合いの声。猿叫と共に全霊で振るわれた刃は鋭くセイバーへと振り下ろされ、セイバーは聖剣によってそれを受け止めたが僅かに押し戻される。

「セイバーが押し負けた!」

「全力での初の太刀。二の太刀要らずか。」

士郎の驚きを尻目に分析を行っていたアーチャーは弓を構え撃つ。しかし、創名は野太刀から手を離し、セイバーの脇を潜り抜けるようにに跳ぶことで回避する。正確には掠めてはいるが、その傷もすぐに再生されているのだ。

「AD. 0539」

再び囁かれる詠唱、手に現れたのはスクラマサクスと言われる片刃の西洋剣。アーサー王が生存した時代に使用されていたとされる刀剣である。その剣を手に跳躍、弓を構えるアーチャーに横薙ぎに振るった。その太刀筋は先の一撃とは違い、鋭く、けれども相手の反撃を見越した余裕のある騎士の剣術による攻撃だ。アーチャーはそれを危うげなく双剣で受け止め、そして舌打ちをした。空中に浮かぶ波紋と、その波紋より出現する武具の群れに気付いたからだ。

「オイオイ、俺を置いてかんでくださいよ、マスター。」

言葉と共に創名とアーチャーに武具の雨が降り注いだ。アーチャーを含め、屋根の上には凜と士郎も屋根から飛び降りてその雨を避ける。そんな中で、創名は一人だけ避ける事もせず背中から多くの剣を受け、それを崩壊させて銀の砂へと変換させる。

「権限の返還を確認。戦闘を中止します。」

「お、戻ったか？良かった良かった。」

「いや、マスター串刺しとか何すんだよ、と言いたいけど正直助かったよ。」

アサシンの軽い言葉に、目に光が戻った創名がため息と共に感謝を吐き出す。

「創名、今のは一体何だ？」

その様子に安堵しながら、けれど、恐ろしい夢を見た後の様に僅かな怯えを含んだ声で士郎が問いかける。

「・・・答える義理は無いかな？一応敵同士なんだしさ。」

「答えろ！」

茶化すような言葉に、士郎は叫ぶほど強い言葉で返す。

創名は目を細め、首を振る。

「答えないよ、士郎。これは君が気にする事じゃない。」

「それは、俺が決める事だ！」

創名の言葉に士郎が怒鳴り駆け出そうとするが、その目の前宝剣が突き刺さる事で止められる。

「マスター。サーヴァントの数じゃこっちは不利だ。不利になったらスタコラサツサと逃げ出すのがアンタの戦略だったろ？」

「酷い言われようだね。確かに逃げまくってるけどさ。」

アサシンは宙に剣群を浮かべながら創名に声をかけた。撤退を促すようでありながら、何かを測るようでもあった。

ここで全力で戦うのか、言外に問うているのだ。

「ここで因縁の決着を付けても良いけど、元から忘れ物取りに来ただけだしなあ。」

創名はそう言ってアサシンを見る。アサシンの手元の空間が歪み、切嗣の魔術刻印が保管された瓶が現れる。

「その忘れ物を更に忘れて暴走してたマスターもいましたねえ。」

「五月蠅い。奇襲からマスターを守れなかったサーヴァントの癖に。」
気楽に言葉を交わす主従に、士郎や凜の眼差しが厳しくなる。彼らのサーヴァントも同様だ。

「まあお互い調子が悪かった、って事にしときましよう。」

「そうだね。そうしよう。」

って事で、調子が悪いから帰って良い？」

「良いわけがあるか！戯け！」

巫山戯るように言った創名をアーチャーが一喝し、干将・莫耶を持って斬りかかる。凜も魔術の詠唱を開始しセイバーもまた駆け出していた。

創名は笑みを浮かべながら、アーチャーの斬撃に右腕を差し出す。体から切り離され、支えを失い、宙に舞う創名の右腕。

「断絶する幻想」

予想外の行動によって生まれる刹那の隙に、創名の詠唱が響く。

切り離された右腕に魔力が集まるのを感じたセイバーが後退するのより早く、右腕だった物から先程創名が放った物と同じ呪詛の炎が一気に溢れ出る。規模は小さいが密度が高く、一瞬で膨張した空気が爆弾の様に爆ぜる。

その爆風は近くに居たアーチャーと創名自身を焼き、アサシンとセイバーも巻き込まれる。

それが創名の予想だった。しかし、それを裏切り、アーチャーが腕に覆い被さる様に動く事でセイバーへの余波を防いだ。呪いの炎は創名達を包むが、この呪詛はこの世^{アンリ}全ての悪の権能の一部。世界の半分^{マユ}の肯定者の名の通り、属性に悪を持つサーヴァント、人物にダメージを与える事は無い。

「アーチャー!!」

「心配は不要だ、凜。そこまでのダメージは無い。」

凜の叫びにアーチャーが答える。しかし、それが強がりなのはパスの繋がっている凜には分かっていた。見た目には殆ど傷が無い様に見えるが、呪詛に染まった魔力は魔術回路に浸透し重大なダメージを

与えている。聖骸布によって作られた外套の防御のお陰で致命傷にはなっていないが重傷には変わらない。

「さて、逃げるよ。アサシン。」

「了解。マスター。」

右腕を失った創名は、表情さえ変えずにアサシンに言う。アサシンも軽く返事をしながら、空中に黄金の船を出現させた。

「待て！創名!!」

「追って来るかい？ 士郎。次は今のより大きいよ？」

士郎の呼びかけも、追撃しようとしたセイバーも、創名の台詞に縫い止められる。

そのまま船へと飛び移り、創名達は消えて行った。

「なあ、マスター。」

夜空を航海する船の上、アサシンが創名へと声をかける。

切り落とされた腕を銀の砂で補い、修復していた創名はその言葉に顔を上げた。

「さつきは何故、逃走を選んだか、聞いて良いですか？」

「アサシンが言ったじゃない、数で負けてるけど逃げるか？ って」

「確かに言いました。けど、それはアーチャーが無傷だったからだ。

アーチャーはマスターの自爆でダメージを受けた。あの状態で固有結界は展開出来ない。」

アーチャー、士郎、創名、その魔術の奥義であり原点である固有結界。その使用には世界からの修正力などの膨大な負荷がかかり、魔術回路への負担も大きい。呪詛の炎によって傷を受けた魔術回路での展開はいかに英霊といえども不可能だ。そして、固有結界が無ければアーチャーがギルガメッシュに持っていた優位が消える。

「セイバーをマスターの固有結界に隔離、俺がアーチャーとマスター達を潰す。それで勝てたはずだ。」

「そうかもね。」

「それなのに、選んだのは反撃では無く、逃走。マスター、貴方は衛宮士郎と戦う事を恐れている。」

アサシンの言葉に創名は何も言わない。

それは、創名本人が最も良く分かっていたからだ。聖杯戦争において、創名と士郎は対立し、数度の戦いを行っている。しかし、それらは逃走の為の時間稼ぎや策の為の物であり、「士郎を倒す為」の戦いをした事は無かった。創名の目的には士郎の生存が必要だが、生存さえしていれば良いのだ。令呪が出た時点でそれを奪うことも出来たし、不意打ちなど、数えるのが馬鹿らしくなる程に機会があった。それでも現在の様になっているのは、創名がそれらの手段を選ばなかったからだ。創名は士郎を正義の味方にしようとする事を止められない、けれど、その手段はある程度選ぶ事が出来る。自身の思考の中の僅かな自由で、士郎と打倒するという手段を避けて来たのだ。

その理由は、アサシンの言う通りに恐れているからだだろう。士郎と命を懸けた戦いを行う事を、何故恐れているかは分からない。家族と戦う事に対しての忌避感なのか、それとも別の何かなのか、創名は分からないままに放置している。

分からなくても

戦争に勝利する事は／逃げ切る事は

出来るのだから。

「ま、自覚が有るなら良いですよ。貴方が自覚しているならそれを踏まえて勝利すると俺は確信してますから。」

「そう、ありがとう。」

「いえいえ、傀儡だとか言っついて口出ししちまって申し訳ありませんね。」

アサシンと創名、正義の味方を望む主従は静かに笑った。

「今日のは前哨戦って言うべきかな？けど、本戦は起こりえない。」

「次でお終いですからねえ。」

空を行く船の目的地はアインツベルンの森。もう一つの小聖杯の元へ。

補足説明5

『創名の暴走状態』

汚染された聖杯の影響で反転した状態。

聖杯による「反転」は心の負の側面の拡大とその現出。

桜の反転状態、いわゆる黒桜と状況的には同じだが、現れている心の負の面の方向性が違う為性格や行動は異なる。

士郎は人間のふりをしてしている機械と表現されるが、その例にならうと、創名は人間らしく振舞うことが役割の機械であり、その心の負の面は人間らしさを放棄した機械じみた物である為、反転した姿は淡々と状況を処理する機械となり、殆どの自我を喪失する。

本編でははつきりと「反転」したのはセイバーに深手を負わされた時だが、兆候は言峰と会話している辺りから出ている。

『アンリ・マユの呪詛』

創名の切り札。自分や投影品を媒介にアンリ・マユの呪詛を召喚する。

この呪詛は本来形の無い物だが、創名の認識により炎として認識されるし、似たように作用する。

世界の半分の肯定者、悪を司る神の呪詛である為、属性が悪の生物には影響を与えない。中庸の属性の持ち主には通常ダメージ、属性が善だと大ダメージ+追加ダメージが入る。

反転中に放ったのは、辺りに撒いた投影の砂を媒介にした物であり、砂一粒一粒から呪いが溢れる呪詛の粉塵爆発の様な物。膨大な魔力を使う為、正気の時にはほぼ使わない。

『天よ我が罪を裁け』

反転中に使用しかけた術式。聖人の遺髪から作ったダイヤモンドを衛宮邸を中心に半径1キロな様々な場所に設置、聖属性のダイヤモンドに呪詛の魔力を注ぎ、反発させ爆発させる儀式魔術。使ってる物が物だけにバレたら代行者の方々が死徒よりも優先して狙ってきてくれるシロモノ。

創名が聖杯の呪いによって呪詛の魔力を持つているからこの効果になっっているが、本来は広範囲に洗礼詠唱に似た効果の魔術を放つ為の物。その場合、『天よ我が敵を許せ』と名前も変わる。

実は、桜を初手で撃破出来ずにHFのルートに入りそうになった時の為に準備して、回収を忘れてしまっていた。創名痛恨のミスという裏設定。

『起源覚醒：輪廻』

転生などをしてしても変わらない魂の属性とでも言うべきものである起源を覚醒させ、戦闘に利用する物。創名の起源は輪廻であり、何度転生しても人間以外には生まれ変わらない。その事を利用し、魂の発生から蓄積された輪廻の記憶を使用する。戦で散った剣士の剣術などを限定使用できる様になるが、戦闘に耐えうる力を持った前世の数がそう多くない上に、前世の記憶、人格の侵食による自我崩壊の可能性が高く、反転して自我が殆ど無い状況でなければ使用は不可能。

本編で言ってるのは年代であり、それぞれ戊辰戦争とカムランの丘の戦いがあったと予想される年代。

『断絶する幻想』

創名版壊れた幻想。投影品ではなく、自分の肉体を媒介に呪詛を召喚する。物理的な干渉力は弱い、呪いの密度が高く、至近で受けた者は呪いで燃え上がる。アーチャーが致命傷を負わなかったのは抗魔力と外套の防御力によるもの。それでも治療無しでは魔術が使えない程のダメージを与えている。

切り落とした腕などは固有結界を発動すれば元通りになるので、固有結界中の自爆コンボと言う意味不明な使い方も出来る。

本編では固有結界を発動させず、投影した人形の腕をつける事で補っている。

キリツグの仔1

キリツグの仔

「初めまして、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。切嗣の娘。」

創名は雪の妖精のような少女に笑みを浮かべながら言った。

「ええ、初めまして、エミヤキズナ。キリツグの息子。」

イリヤスフィールはどこか機械めいた少年に同じく笑みを浮かべて言った。

月光差し込む冬の城で、二人のマスターが微笑みながら対峙していた。少女の笑みには少年と会えた喜びと少年に対する殺意が同時に存在し、少年の笑みには少女への親愛と温度を感じさせない不透明な何かがあった。

創名は衛宮邸から向かったのはアインツベルンの森に聳える城だった。結界効果のある森を空を行くことでショートカットし、奇襲とも言うべき速度でイリヤの居城へとやって来のだ。だが、創名にとっては奇襲ではなかったし、イリヤも創名を当然のように城へと迎い入れた。侵入者^客と城の主^{招待者}はホールを挟み向かい合ったのだ。

「士郎には会ったの？姉さん。」

「ええ、会ったわよ。とってもイイコだった。」

創名の言葉に無邪気な笑顔を少し大人びさせてイリヤは答える。

「シロウは知らなかったけど、アナタは知っているのね。私がアナタ達のきょうだいだって。」

「うん、自分は切嗣の後継者だからね。」

自分を裏切った男の後継者、目の前の少年は臆す事なく言い切った。イリヤの中で釣り合っていたきょうだいに出会えた喜びと、切嗣に復讐したいという思いが殺意に傾いた。

「良かったあ。」

「ん、何が？」

「わたし、キリツグにフクシユウに来たの。けど、キリツグが死んじゃってたからどうしようかと思ってたんだ。」

イリヤは綻ぶように笑いながら言う。愛しい者を見つけたように、けれど言葉の中の殺気はひたすらに膨らんでいく。

「キリツグの後継者がキズナなら、キズナを殺せばフクシユウになるよね？」

嬉しそうなイリヤの言葉と共に巨大で、圧倒的な力を持った英霊が現界する。狂戦士、ヘラクレス。ギリシャ随一の英雄にして狂乱の鎖に絡めとられた破壊者。

それに対して、創名の後ろに控えていたアサシンが剣を取り出しながら前が出る。世界最古にして最強の英雄王、それに成り代わった暗殺者。

両者の武器は激しい音をたてながらぶつかり合い、その衝撃に紛れて創名はイリヤへと近づいていく。

「自分を殺したい？」

「ええ、アナタはキリツグの後継者で敵マスターなんだから。」

サーヴァント達の戦闘が別世界の出来事であるかのように穏やかな問いかけ、それに答える声もその場にそぐわない弾むような声だった。

「うん、その感情は正当だ。キミを、イリヤスフィールを救うことが出来なかった自分と切嗣はその怒りを、殺意を向けられるに足る悪だからね。」

「・・・救えなかった？」

「結界に阻まれて越えられなかった。会いに行けなかった。力が無かった。謝ることさえ出来なかった。」

創名の言葉に違和感を感じながら、イリヤは何かに怯えるようにならずさる。

「切嗣はアインツベルンを裏切った。けれど、イリヤスフィールとアリスフィールを愛していた。前回の聖杯戦争の後、何度もキミに会いに行った。時には一人で、時には自分も連れて、けれど、ユーブスタクハイトの怒りは冷めず、アインツベルンの城にたどり着くことは出来なかった。」

「嘘よ、嘘だわ！だっておじい様はキリツグはお母様とわたしを捨て

たつて・・・!?!」

穏やかな口調のままに告げられる言葉をイリヤは否定する。そうしなければ、切嗣を、大好きだった父親を憎んだ時間が無意味だったことになってしまう。一度はシロウを殺しかけたことが、目の前の微笑む少年を殺したいと思つたことが、どうしても許せない罪になってしまう。

耐えきれないように叫ぶイリヤとそうさせている敵マスターをバーサーカーが認識し、イリヤを助けるべく動こうとするが、いつの間にか周辺に張り巡らされた金の鎖に拘束される。

己のサーヴァントがバーサーカーを止めたことさえ気にした様子も無く、創名は言葉が続ける。

「切嗣から伝言だよ。『約束を破つてごめん、迎えにいけなくてごめん、謝つてばかりでごめん、けどアイリとキミを愛している。許されるなら、キミの幸せを祈らせて欲しい。どうか元気で、僕達のお姫様。』」

「・・・キリツグ。」

創名の言葉は確かに切嗣の温もりがあつた。切嗣の真意の欠片に触れ、イリヤの切嗣への憎しみがわずかに緩む。

しかし、それはバーサーカーの絶叫で遮られた。

バーサーカーは、ギルガメッシュが所持していた宝具の一つである^{エルキドゥ}天の鎖によって拘束され、そこにAランク以上の宝具の原典が降り注ぎ、バーサーカーの命のストックを確実に削っている。

「バーサーカー・・・ッ!?!」

イリヤがバーサーカーへと向いて叫ぶ、その後、言葉が続けようとしたのは令呪を使用しようとしたのか、別の何かを言おうとしたのか、それはイリヤにしか分からなくなつた。

バーサーカーに気を取られた一瞬、創名がイリヤに近づきながら右手を突き出した。アーチャーによって切り落とされた右腕、現在は投影した『人形の腕』で代用しているものだ。

人の腕よりも高い性能を持った作り物の腕は、ホムンクルスの少女の胸へと突き刺さり、その心臓を鷲掴みにした。

左腕で抱き留めるようにしながら右腕を引き抜く。鮮血が散り、雪の少女を赤く染めた。

「聖杯、貰っていくね。姉さん。」

少女の血を浴びながら創名は穏やかに宣言した。

キリツグの仔2

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは聖杯である。そうである為に生まれ出て来る前から様々な処置を施され、産まれてきてからは聖杯として、マスターとして育てられた。

体その物が聖杯として稼働するための礼装と言っても過言ではない。しかし、聖杯の核はイリヤの心臓だ。それがなくてはイリヤは聖杯足り得ない。

その聖杯の、イリヤの核を創名は握っていた。

城中に響くバーサーカーの慟哭は、剣群に刺され、死に行く中での断末魔か、主を守れなかつた悲哀か。

「聖なる杯よ、我が内の破片と混じり、我が中で巡れ。」

その耳を突き刺す声が無いもののように扱い、創名は手の中の心臓へと囁く。心臓はドクンと一度鼓動した後、創名の胸へと吸い込まれていった。

それと同時に、主を喪ったバーサーカーも消える。

「派手にやりましたねえ。死んでませんか？」

「心臓に一撃だから、即死だろうね。」

バーサーカーを拘束していた天の鎖を回収してアサシンがやって来る。軽口を叩く彼に、創名は呆れたように見ながら、何かを要求するように右腕を出す。

「はいはい、わざわざこの為に取ってきたんですよね。」

アサシンが言いながら取り出したのは衛宮の魔術刻印が刻まれた肉塊の入った瓶だった。創名はそれを受け取り、瓶の蓋を開け、肉塊を取り出した。

「アサシン、城の中にホムンクルスが居るから止めておいて、2体いで、1体はイリヤと連動して機能停止すると思うけど。」

「バーサーカーの次はホムンクルスですか？まあ了解しました。」

創名の命令に肩を竦めながらアサシンは城の奥へと入っていく。

アサシンが立ち去った城のホールで、創名は心臓を失ったイリヤの

傍らに立つ。

「起きろ。」

口に出したのは魔術回路を起動する言葉、正当なる聖杯を取り込んだ創名の魔術回路は魔力が流れる度に聖杯の膨大な魔力と性質の違いによって傷つけられ、固有結界の制限展開によりすぐにもとの状態に戻される。常人ではショック死しかねない激痛が続く中、創名は集中を切らすこと無く魔術を組み上げていく。

「水は高きより低きに落ちる。それは真。」

血は親より仔へと受け継がれる。それは理。」

創名の詠唱に反応するようにイリヤが沈む血の海が揺らめく。

「受け継がれ続けた叡知の結晶よ。」

受け継ぐべき叡知の仔よ。」

魔術刻印をイリヤの胸へとかざしながら詠唱は続く。詠唱に合わせて血が鮮やかさを増していく。まるで酸素に触れる前へと戻ったようだ。

「仔を思うならば形を変えろ。」

父を思うならば変化せよ。」

ドロリ、と魔術刻印を刻まれた肉塊の形が崩れ、イリヤの胸へと吸い込まれていく。

「残されし遺産よ。感涙せよ。」

遺された仔よ。哀しむことなかれ。」

既に空となった手をイリヤに向けながら、創名は詠唱の終句を紡ぐ。

「巡りに巡り、絆は結ばれた。」

ここに継承は完了せり。」

瞬間契約の詠唱が終わり、魔術刻印は全てイリヤの胸の中へと消え、鮮血は時を逆巻くように魔術刻印と同じくイリヤの中へと消えていく。それらが終わった後、残ったのは傷一つないイリヤと、トクン、トクンという小さな鼓動だった。

「ふう、施術完了。」

創名はイリヤの状態を確認する。気を失っているが、それだけであ

り、しつかりと息を吹き返していた。

創名がイリヤに行ったのは、魔術刻印で代用した臓器移植のようなものである。

そもそも魔術刻印とは、魔術師の家系が自身が高めた神秘を時代に受け継がせる為の物であり、魔術師にとって命よりも重い物とさえ言えるのだ。それらを踏まえ、魔術刻印は人工臓器とさえ言える。本来ならば同じ家系でも拒絶反応が起こり、それを押さえる労力が必要となるが、イリヤはホムンクルスであり、人とは条件が違う。ましてや血が繋がった者の刻印なのだ、心臓の代わりに埋め込むという荒業によるリスクもデメリットも通常の魔術師に同じことをした場合とは比べ物にならない程低い。魔力も潤沢に使われたため、時を置かずに目覚めるだろう。

セラとリズの足止めをしているアサシンに念話で引き上げる事を告げて、玄関へと向かう。

「シロウの言う通りなのね。」

門へ向けて進みだしていた足が止まる。振り替えれば床に寝転んだまま目を開けたイリヤがいた。

「よくもバーサーカーを倒してくれたわね。」

「恨み言を言うために起きたの？それなら女の執念って恐ろしいねえ。」

「それも有るけど、それだけじゃないわ。」

イリヤは言いながら身を起こす。その瞳には言うほどの怒りはない。

「お礼を言わせて。キリツグの魔術刻印、ありがとう。」

「心臓を抉った相手に対して言うことじゃないね。」

「それでも言うの。だって、アナタにとっても大切なキリツグの遺産だったんでしょ？」

茶化すように言う創名を、見透かすようにイリヤは言う。

「刻印から、少しだけキリツグの記憶が見えたの。キズナが言った事が本当だったことも分かった。小さい頃のシロウとキズナも可愛かった。」

嬉しそうにイリヤは言う。実際に嬉しいのだろう。それは、キリツグが持っていた家族の思い出だ。それをわずかでも共有出来たのがイリヤとっては一時の死を許せるほど価値の在るものだったのだ。

無邪気だった少女の中に、自分を思いやるような感情を見つけ、創名は眉をしかめる。妖精のようだった少女が急に成長して見えたからだ。

「ねえ、シロウに会ったの、その時シロウは言ってたわ、弟が自分と向き合ってくれないって。」

士郎とイリヤは昼間に邂逅し、少し話したただけだ。それでも分かるのだ。少女にポツリと溢してしまった言葉がどれだけの重い悩みなのか、だって、イリヤは士郎と創名の『お姉ちゃん』なのだから。

「わたしを姉だって思うなら、わたしのお願いを聞いて?」

ねえキズナ。そう呼ぶ声はわがままな弟をなだめる姉のようだった。

「シロウと向き合って、逃げ続けるんじゃない。わたしはもう負けたマスターだから、キズナの聖杯の使い方に何かを言う権利はない。けど、士郎は違うでしょう?だから、キズナはシロウと戦わなくちゃいけない。そうじゃなきゃ、聖杯戦争は終わらない。」

雪のように静かな瞳、けれどそこにある意思の強さは本物だった。

「言いたいのはそれだけ?」

「ええ。」

「そう、それじゃあ、もう行くね。」

創名は感情を殺したような無表情でそう言って歩き出した。丁度、城の奥から出てきたアサシンがそれに続く。

イリヤはアサシンに足止めされていた自分の従者が走ってくるのを感じながら創名の背中を見送り続けた。

「脱落したのは、ライダー、アサシン佐々木小次郎、キャスター、ギルガメツシュ、ランサー、バーサーカー。」

城からの帰る途中、創名が声を出す。横に並ぶアサシンは黒衣に骸骨を模した仮面の姿だ。成り代わったままではギルガメツシュの魂が聖杯に注がれないので、宝具を解除し、アサシンの姿に戻る必要が

あったのだ。それにより、聖杯には十分な魔力と魂が注がれ、完成する。はずだった。

「成り代わる代価として、相手の魂の一部を取り込むってのは予想外だった。」

アサシンさえ把握していなかった宝具のデメリット。それが、乗っ取った対象の魂の劣化だ。これにより、佐々木小次郎とギルガメッシュの魂がわずかに弱まった。その結果、起きたのが聖杯完成に足りなかったという事態だ。劣化した小次郎とギルガメッシュの魂は合わせて2騎分程度であり、ライダー、ランサー、バーサーカーはバーサーカーの規格外さにより4騎分、合わせて6騎分の魂しか聖杯にくべられていないのである。キャスターは自身を小聖杯ではなく大聖杯へとくべたが、それがここに来て響いている。本来、聖杯を願望器として使うだけなら5騎分の魂が有れば事足りる。けれど、創名の目的はただ一人の為の絶対悪となること。人の身には余るその目的を達成するには7騎分以上の魂が必要だ。

「あのときは大した事じゃないと思っただけど、ここまでなるとは、流石、裏切りの魔女。」

「ホント申し訳ない。」

創名が嘯くのを聞いて、アサシンは体を縮める。魂の劣化、というよりもアサシンが成り代わったサーヴァントの魂の一部を吸収していたのだ。なので、アサシンを自害させることで聖杯に注がれる総量は変わらない。むしろ8騎分の魂を湛えた聖杯は創名の目的を果たす上で好都合だ。

「さあ、マスター。目的の場所に向かきましょう。それで、俺が死ぬば、聖杯戦争は貴方の勝ちだ。」

「・・・」

気を取り直した様に言うアサシンの声に、創名は沈黙する。何かを考えるように、葛藤するように、口を閉ざす。

「アサシン、申し訳ないんだけど、最後に自分の我が儘を言ってもいいかなっ。」

「何なりとどうぞ。」

「士郎と戦わなくちゃいけない気がするんだ。」

創名の言葉にアサシンは僅かに驚く、己のマスターが口にしたのは、自身が召喚されて初めての戦争の勝敗に支障が出る願いだったからだ。倒せたはずのセイバーとアーチャーを見逃してきたが、その2騎は倒さずとも聖杯を完成させる事ができる。わざわざ切嗣の遺産である魔術刻印を使ってまでイリヤスフィールを生き返らせても、サーヴァントのいない彼女はどんな障害にもなり得ない。

しかし、今回は違う。士郎と戦わなくても、このまま行けば目的は達成できるのだ。それなのに、士郎と戦うということは、敗北する可能性が生まれる。目的が達成できなくなるかもしれない。自分で言っていた起こり得ない本戦を起こそうとしているのだ。

目的の達成を遠ざけようとする創名の行動、それは、アサシンへの裏切りとも言える行動だった。しかし、

「貴方の思うがまま、願いのままに。マスター、貴方が必要だと思えば、俺に否はありません。」

しかし、アサシンは創名にそう言った。

「おや、意外そうな顔をしていますねえ。マスター、覚えておいてください。正義の味方の誕生、誰もが信じている正義の誕生は俺の悲願だ。けれど、正義の味方を誕生させようとする貴方もまた俺にとって正義なんですよ。」

だからこそ、アサシンは創名に頭を垂れる。目的の一致、それよりも、マスターとなった少年の生き様を正義と信じるが故に……

「さあ、マスター。そうと決まれば準備をしましょう。せっかくの最終戦です。どう戦うか、万全の策を用意しようじゃありませんか。」

「……ありがとう、アサシン。」

暗殺者のサーヴァントとそのマスターは小さく笑い合い、計画をたて始める。それぞれが正義と信じるモノの為に。

士郎がそれに気づいたのは当然のことだった。創名を逃がした後、取り敢えずは遠坂の屋敷に戻ったのだが、士郎は昨日出会ったイリヤというマスターの少女を探しに外に出ていた。

昼間の時間だから大丈夫だという士郎と他の者達の間でかなり揉

めだが、視線避けの礼装をつけたセイバーが少し離れて護衛するといふことで落ち着いた。

そんな士郎の前に、銀色の小鳥が墜ちて来た。その小鳥が自然の物ではないのは、金属性だと一見で判断できる翼からして明らかだった。

気づけば周囲に人通りは無く、セイバーが素早く駆けつけていた。「やあ、士郎。久しぶり、と言いたい所だけど、昨日ニアミスで会っちゃってるね。」

「創名……」

小鳥から発せられたのは自分とよく似た声だった。

「何の用ですか？キズナ。」

「何の用かというと、お知らせに來ただけさ。」

小鳥は勿体ぶる様に姿勢をただし、言葉を流す。

「残りのサーヴァントは君達とアサシンだけだ。聖杯も自分が押さええている。」

「なッ!？」

小鳥の声に士郎もセイバーも驚愕する。確かに、予想では早ければそうなっている可能性があるかと思っていたが、実際に知らされると驚かすにはいられない。

「聖杯戦争は今夜終わる。士郎、自分達が生まれた場所で待ってるよ。」

「それは、逃げないって事か？」

「そういうことになるね。士郎こそ逃げないでね？」

「分かってる。楽しみにしてる。」

士郎と会話を交わし、小鳥は満足したように倒れると呪詛の炎を僅かに上げて燃え尽きた。

「……士郎、罨ではありませんか？此方を誘導してキズナは別の場所に居る、その可能性は考えておくべきです。」

「罨だって分かっているも、手がかりがない以上行かなくちゃいけない。それに、罨ならあそこは指定しない。」

「貴方たち、シロウとキズナが生まれた場所、ですか。」

「ああ、戻ろう、セイバー。準備をしなくちゃいけない。」

何かを決心したように言い切り、士郎は踵を返す。

「いったい、どこを指しているのか、教えてください。士郎。」

セイバーは士郎に問う、答えは分かっているのだろう、それでも聞かなければならなかった。

「創名が待っているのは冬木中央公園。かつて、大火災が起きた場所だ。」

士郎は振り返らずに答えた。

その場所は、セイバーにとって自分の罪の象徴だ。自分たち英霊と魔術師達が願いを懸けて戦った結果生まれた悲劇の場所。士郎も創名もそこで生まれた。そう思っているのだ。

「シロウ。貴方に勝利を。」

「ああ。」

剣の英霊とその主は歩き出す。かつての贖罪の為に、破滅へと進む者を止めるために。

『最終戦開幕』

冬木中央公園、前回の聖杯戦争の決着の地であり、大火災と言われる悲劇の中心。自然公園となつてからも火災によつて死した者達の怨念が焼き付いた土地であり、平時でも人はあまり寄り付かない。

満ちた月の光が降る今夜は、公園付近に人払いの術が施され、公園の入り口に創名とアサシンが佇むのみだった。

そんな空間に複数の足音が響く、人払いを突破してきたのは衛宮士郎、遠坂凜、彼らのサーヴァントであるセイバーとアーチャーだった。「こんばんは。よく来たね、て言いたい所だけど、待ちくたびれちゃったよ。」

「そうか、けど、この機会を待っていたのは俺の方だ。」

創名のからかうような言葉に士郎が言葉を返す。

「で、どういう心境の変化なのかしら？ 貴方の方から誘つてくれるなんて思つてなかったのだけけれど。」

「変化というか、前から思つていたんだ。」

創名は笑つた。どこか柔らかい笑み、何かを振り切つたような清々しさがある。士郎も凜も見たこと無い表情、けれど、セイバーとアーチャーにはその笑顔に見覚えが有つた。

それは、殉教者の笑み。

信念か、覚悟に殉ずるものだけが浮かべる類いの痛ましくさえある美しい笑顔。

「一回、士郎と本気で喧嘩してみたいって。」

「いいぜ、その代わり約束しろ。」

無邪気にさえ感じる『我が儘』。それは、創名の本音を含んだ嘘だと士郎には確信できた。もっと切実でどうしようもないモノを抱えて、創名は士郎をここに呼んだ。

それがわかつたからこそ士郎は頷く。

「俺が勝つたら全部元通りだ。戻ってこい、創名。」

「今言うことかな、それ。」

「喧嘩なんだろう？なら、別にいいじゃないか。」

創名の笑みが聖杯戦争が始まる前のように変わる。けれど、それは一瞬だった。創名が小さく息を吐き、士郎達を見つめる。

空気が音を立てて圧縮されるように創名の威圧感が増した。

「確かにそうだね、それでいいよ。けど、士郎。自分が勝つても泣かないでね。」

創名の些細な言葉にさえ魔力が込められていると錯覚するほどの魔力を解放しながら、創名は公園を示した。

「この中に戦いの舞台は用意しといた。けど、ここから先に進めるのは士郎だけだ。」

言葉と共に公園の中から呪詛の炎が放たれ、創名と士郎、アサシンと凜達に隔てる壁となった。

「さて、申し訳ありませんが、お嬢様方プラス野郎は俺が担当です。」炎の威力自体は壁になる程度のモノだ。しかし、突破しようとする、気配も音もなくアサシンが立ち塞がる。

「アサシン1騎でセイバーとアーチャーを押さえられるつもり？」

「さあ、どうでしょう？」

「ずいぶん自信じゃない。」

「ああ、そうだ。お伝えしておきますが、聖杯の完成には後1騎分の魂が足りないそうです。」

脈絡無く告げられた情報に凜の眉がフリ上がった。後1騎ということは、目の前のアサシンを倒してしまえばその魂が聖杯にくべられ、聖杯が完成してしまう。かといって、手を抜けばこちらが逆に撃破される可能性がある。3騎士のクラス、セイバーとアーチャーといえどもアーチャーは手負いだ。押さえきられるかもしれない。

「なるほど、この勝負はいかにお前にダメージを与えずに行動不能にさせるか、ということだな。」

「大雑把に言えばそうでしょうね。可能ですか？貴方たちに？」

「なに、難しくはあるが、不可能ではない。」

アサシンとアーチャーは互いを笑った。

一方で他の者と分けられた士郎は、炎の壁を睨み付けていた。

「あの二人も言えば分かってくれるのに、ここまでしなくてもいいだろう。」

「これぐらいしないとセイバーも遠坂さんも横槍いれてくるだろうか
らね。」

士郎の文句を創名は軽く流しながら、壁の向こう側を思う。

アサシンは番人だ。公園に張った結界は条件を満たす者でなければ入れないが、士郎と創名を除き、アーチャーのみがその条件を満たしている。創名の『我が儘』の内容から、アーチャーが結界の中に入ってくるのは避けたいからこそ、アサシンには事が終わるまで止めておいてもらわなければならぬ。

創名の手が自身の腹部を押さえる。そこに有るのは令呪だ。切嗣が子供の為に残し、聖杯戦争の予兆を感じた時点で回収した一面分の令呪、それでアサシンに死守を命じる。それが作戦だった。

「令呪において命じる。」

眩きながら言うべき命令に悩む。この戦いは創名が望まなければ起きなかつたモノだ。それに付き合ってくれるといったアサシンに
なんと言うべきだろうか？

マスターとサーヴァントというだけではない。アサシンは創名にとつて初めて、創名の理想を肯定してくれた者でもあるのだ。

そのアサシンへの最後のオーダーだ。とびっきりの物が良い。創名はそう考えた。

一つ息を吐き、意思を固めた創名は声を出す。自身を正義だと言つてくれた英雄への願返い礼を！

「アサシン、自分達こそがこの聖杯戦争で最高のマスターとサーヴァントであることを証明せよ！」

声はパスを通じ、その存在に染み込んだ。そして生まれた歓喜は魔力を震わせ、世界へと干渉する。

その結果に満足そうに頷き、士郎の方へ向き直る。

「さて、行こうか、士郎。」

「ああ。」

待っていてくれた士郎に声を掛け、創名と士郎は共に冬木中央公園

に足を踏み入れ。瞬間、その姿が消えた。

視点を再び壁の外へと戻すと、アサシンの中にある魔力が増大し、セイバーとアーチャーがそれに対応すべく武器を取り出していた。

「ツ！令呪によるブースト!？」

「そのようなだ。これはかなり厄介だ。」

凜の悲鳴のような声にアーチャーが頷き、アサシンを鋭く睨む。

アサシンはその視線を気にも留めずに小さく笑っている。

「いやあ、マスターも嬉しいこと言ってくれますね。証明せよ、か。く。」

嬉しそうに、楽しそうに言ったアサシンは凜達に向き直ると、その髑髏面へと手を伸ばし、顔から外す。そこにあるのは『顔の無い』顔だ。『山の翁』の称号を継承し、個人と言えるものを全て捨てさった暗殺者であるアサシンには顔など無い。けれど、アーチャーは、セイバーは、凜は、そこに英雄の顔を幻視した。

「貴方の思うがまま、願いのままに。我がマスター。」

楽しげに口角を上げた頬を、笑みを象る唇を、強い意思をもって自分達を睨む瞳を、ある筈が無いそれらに目を奪われた。

「魔術師、衛宮創名のアサシン、ハサン・サツバーハ。名乗る名がこれしかないことをどうぞご容赦ください。」

名乗りを上げるその姿は暗殺者には不釣り合いなモノだろう。しかし、その姿はこの聖杯戦争において、最も誇り高く見えた。

「マスターからのオーダーだ。足止めなんて言わず、アンタ方の命、頂戴しますよ。」

暗殺者はそう宣告し、闇へと身を踊らせた。

そこは赤い世界だった。

創名に誘われ、足を踏み入れた冬木中央公園は、完全な別世界だった。

いや、別の世界ではない。それは言うなれば過去の世界^{地獄}だった。空が燃えていた。

大地が燃えていた。

建物が燃えていた。

人が、燃えていた。

目に映る全てが炎に包まれている。

平和な街だった街が焼け落ちていく。

多くの死者が

多くの死に向かっている者が存在していた。

自分だけでも助けに来てくれと叫ぶ人がいる。／既に彼の全身を炎が包んでいる。

子供だけでもと地面を這い、赤ん坊の亡骸を差し出す人がいる。／彼女達はもうすぐ燃え尽きる。

この世界は間違いなく地獄だ。

かつての戦いの終演にして最大の悲劇、大火災のあの夜だ。

「ようこそ、そしておかえり。」

言葉を無くし呆然と立ち尽くす士郎に創名は言葉を掛ける。

「ここは、自分達を生み出した惨劇の揺りかご。

この世全ての悪を孕む胎内。」

両腕を広げ、この世界の名を口に出す。

「ここは、固有結界『最期の問い掛け』。さあ、自分達の聖杯戦争の終幕だ。張り切って行こうか、士郎。」

『聖杯問答』

赤い赤い世界、そこは士郎がただ一日も忘れることが出来ない悪夢と同一の光景だった。

「ツ・・・!!なんなんだよここは!？」

「この場所には大火災の死者達の怨念が焼き付いていた。それこそ、ちよつとの弾みで異界を作るぐらいにね。」

それをこの世界を原風景とする自分を核に纏めて、固有結界を作ったんだ。」

士郎は自身の側で瓦礫に押し潰されている男を助けようとするが、男は士郎が触れた所から灰となり消えていく。そして、その次の瞬間にはまた同じ場所で悲鳴を上げている。

「ここは死者に焼け付き、場に焼き付いた心象風景。ただあの夜を再生し続けるだけ、だから、この場に居るものは全て死者なんだ。士郎と自分を除いてね。」

死に逝くものは、死してまた死に逝くものに戻る。何度も何度も『崩壊』を『再生』し続ける絶望の『輪廻』。それがこの固有結界なのだ。創名は言う。

「こんな世界を作って何になるって言うんだよツ、創名!？」
「言っただろう? 『最期の問い掛け』って。」

「この世界で死者達は何を考えてると思う?」
怒りに顔を歪める士郎に創名は言う。士郎とは真逆に淡々と、冷たく感じる声。

「何故? どうして? 自分がこんな目に会うのか? 何が『悪かったのか?』? そんなことを考えてるんだよ。」

「何が悪かったか?」

「そう、本当に彼らはどうしてあの日死んじゃったんだろうね? まあ、大雑把に言っちゃえば聖杯戦争のせいだけだし、そんなの当時の彼らに分かる筈もないよね。」

おどけるように手を上げて続ける。

「誰が悪かったのか？自分が悪かったのか？別の人間が悪かったのか？運が悪かったのか？」

「そんなの・・・」

「答えなんて出る筈がないよね。」

彼らは悪くはなかった。確かに言えるのはそれだけなのだ。ただ巻き込まれただけ、ただそれだけで死んでいった者達は問い掛け続ける。どうして？何が悪かったのか？誰が悪いのか？

「自分は悪くない、原因を探し、そして見つからない時、亡者たちが求めるのは『悪』だ。」

それが有ったから、ソイツが居たから、分かりやすく責め立てやすい悪を人は求める。」

「それがどうしたって言うんだ！」

「悪を求めるからこそ、この世界が必要なんだよ。」
アンリ・マユ
この世全ての悪を産み出すのに。

創名の言葉はあらゆる物が燃える音が上がり続ける世界で、嫌になるほど響いた。

「この亡者達は問い続ける、その答えとして、全ての原因^悪を押し付けることができる存在を求め、産み出すんだ。あらゆる諸悪の根元を。聖杯を使うのはこの亡者達だ。その願いを受けて自分はアンリ・マユ
この世全ての悪となり、自分の理想を混ぜ込み、『ただ一人の為の絶対悪』へと転生する。」

「その為の、この地獄の再現か。」

「その通り。だからこそ、この世界の名は『最期の問い掛け』。全ての悪を背負う者を導き出す亡者の世界。」

この固有結界その物が供物であり、詠唱なのだ。聖杯の降臨は本来この土地では行えない。けれど、その道理を10年及ぶ怨念と、10年前の惨劇の縁を使って曲げさせる。そして、その力で自身の目的を達成する。創名の目的を考えればこの上ない手段だ。

「それに、どんな形であれ答えが出て、その力を吸われれば、この怨念も消えてなくなる。」

10年前の犠牲者も、何の意味もなく死んだんじゃない。その

死に意味が生まれる。」

「・・・創名。」

創名の言葉によって、士郎の表情に戸惑いが生まれる。大火災で生き残った士郎にとって、犠牲者達の死と、その意味は考え続けてきた物である。彼らの死に何の意味があったのか。自分達が生き残った意味は何か。士郎が考えていたように、創名も考えていた。そしてこれがその答えだ。創名の目的、すなわち『正義の味方の誕生』その為に使われるなら、彼らの死にはその意味と価値が有ったということになる。暴論であり、独善であり、見方によっては侮辱でさえあるだろうそれを、創名は示して見せた。どんなに最悪のものであれ、無意味よりは良いだろうと。

「自分は彼らに答えを与える。自身以外のモノが悪かった、そんな身勝手に人間らしい結論を。」

言葉を区切り、創名は士郎を見る。その瞳が求める者を理解し、士郎は呻く。

「・・・俺にも答えを出せ、つてことか。この世界の問い掛けに。」

「その通り、士郎の答えが、自分よりも納得いく答えだったらこの結界に自分が望む効果は無くなる。」

この場を造り上げている怨念は、救われなかった者の怨念だ。全ての人を救おうとする『正義の味方』を目指す士郎にとっては答えを出すことの出来ないモノだ。誰かを救うことというのは、士郎にとって命を救うという事だ。しかし、この結界を生み出している彼らは既に死んでいる。そうである以上、彼らにとっての救いは心の救済以外に無い。士郎にはそれが理解出来ないが故に、救済の答えを出すのは不可能だと言える。

「自分を止めるのに、2つの方法がある。さっき言った通り、この惨劇の答えを示すこと。」

もう一つは、この結界の核であり、聖杯を持つ自分を殺すこと。何れかを持って士郎の勝利となる。」

「わざわざ教えてくれるなんて親切だな。」

「ラスボスだからね。自分の弱点を教えるなんてお約束だろう？もち

ろん、どっちの方法を選んだ所で、自分は剣を持って妨害するけどね。」

士郎の皮肉に創名は嘯いた。茶化すように、巫山戯けるように。「自分たちはずっとそれぞれの道を歩いてきた。人に与えられた理想を、借り物の夢を。自分の内から生まれたものじゃないモノを追い求める道を。それでも、それが正しいって信じてきた。」

創名は一步前に出て士郎の正面に立つ。手を伸ばせば届く距離、剣を振るえばその命を断てる距離。聖杯戦争が始まる前なら、幾度もこうやってお互いに顔を付き合わせたことがある。しかし、士郎も創名も、向かい合った互いの顔を見るのは初めてのように感じた。

二人の道行きはどこまでも隣り合っていた。『正義の味方』を指す士郎と、『士郎を正義の味方』にしようとする創名。その道は何処までも平行で、交わる事も、向き合うことも無いはずだった。けれど、今、二人は対峙している。向き合い、互いの思いをぶつけ合うように視線を交錯させている。どちらも退く意思など無く、諦めることなどあり得ない理想を抱えながら。

「ねえ、士郎。自分が君を見てきたように、君は自分を見てきた。だから、君に聞こう。自分^{衛宮創名}は間違っていると思うかい？ 今までの行いを、その果てのこの場所を。」

「ああ、間違っている。だから止める。」

士郎の言葉を聞き満足そうに、創名は頷く。そして、一步で士郎から距離を取り、銀の砂を投影する。

士郎も同じく、士郎も投影した双剣を握る。

創名が士郎をここに招いた理由は、単にこの世界で士郎へと問いたかったのだろう。間違っていると思うのか？ どう答えられようと、創名が行ってきたこと、行うことは変わらない。それでも、聞いたかったのだ。創名にとって『最期』になるのだから。

「お前は間違ってきたかもしれない。桜にも、他の連中にも謝るだけじゃ済まない事してきたかも知れない。」

でも、俺はお前を『悪』だとは思わない。ただ、間違っただけだ。だから、帰ったら一緒に謝ってやる。」

「やっぱり、壊れてるね。士郎。」

士郎の宣言に呆れたように、あるいは諦めたように創名は言う。

「それじゃあ、方法は一つだ。聖杯を賭けてこの惨劇運命の夜の問い掛けに答えよ。これ即ち聖杯問答なり。」

言い終わると同時に、刹那の違いも無く、二人は地を蹴り、剣を振るう。合図など要らない。この二人が向かい合った時点でこうなることは決まっていたのだから。

衛宮士郎と衛宮創名、二人の原点である赤い世界で、二人に決着が与えられる。

蚊帳の外

固有結界の中で、創名と士郎が切り結んでいる時、結界の外、アーチャー達はアサシンの足止めを受けていた。

アサシンが最初に行ったのは、街灯の破壊だ。勿論、人工的に生み出された光がなくとも月の光が射し、十分な光源になっている。サーヴァントや魔術師にとってその程度の暗闇など、視力を強化すれば昼間と同じように見透すことができる。

そんな事はアサシンも百も承知だ。

「展開、小さき壁の黒い箱。」

月明かりの中、少ない闇に身を紛れ込ませたアサシンが、創名が用意した結界の発動キーを口に出す。直後にその場所に矢が打ち込まれるが、すでにそこにはアサシンはいない。

そして、結界が展開される。結界と言っても、対象を閉じ込めたり、害するほどのモノではない。むしろ、結界としての機能は低い。

その結界は、普通の人でさえ違和感なく通過できるほど弱い進行妨害の結界。極々限られたものを通さないモノだ。この結界によって弾かれるモノはただ一つ。光の粒子。月より降り注ぐその光を通さない結界。その中は一切の光が無い空間となる。

それと同時に創名がギルガメッシュと相対する時にも使われた、魔力を反射させ、魔力的知覚を妨害する結界も張られる。

そうして、アサシンは一段と深くなった闇にその身を隠す。

「フーちよつと待ちなさい！」

突如生まれた漆黒に凜は灯りを灯すための魔術を使おうとする、それは人として当然の反応であるし、ここで、目をさらに強化するとう悪手を打たなかったただけ誉めらるべきだ。この結界に外部からの光が進入がなくなった以上、目の感度を強化する程度では、アサシンはおろか、横にいる自身のサーヴァントさえ見えない。

1 工程の魔術によって、仄かな灯りが周囲を照らす。

人間というのは、ごく自然に行ってしまう行動がある。闇の中で目を凝らす。灯りが着けばその明るくなった範囲を注視してしまう。

サーヴァントでも元は人間、無意識に行うことは止められない。そして、その行動こそが暗殺者の狙いだった。

「っ！凍ッ！！」

全員の注意が僅かに逸れた瞬間。最初に動いたの闇に反応したのは直感のスキルを持つセイバーだった。

凜の背後へと迫るアサシン。それに向かって聖剣を振るう。それに対してアサシンはあっさりと後退し、再び闇に消える。しかし、ただで退いた訳ではなく、凜達の足元には黒い物体が複数転がっている。

「まずい！目を・・・ッ！」

アーチャーの言葉の途中で物体が炸裂、太陽のように目を刺す光が溢れ出す。物体の正体は創名作製の閃光手榴弾だ。

光の進行阻む結界により、閃光は結界のなかを乱反射、闇によってアサシンの姿を隠していた結界は目も開けられない眩さによって、アサシンの姿を消させた。

通常、サーヴァントがこのように現代兵器やマスターの礼装を持つことは稀だ。サーヴァントへの攻撃には相応の神秘を伴っていないければ傷を付けることは叶わないし、何より、霊体化というサーヴァントの持つ基本機能の妨げと成ってしまうからだ。

しかし、この局面のアサシンに限っては霊体化の必要もなく、そして、傷をつけることができなくとも妨害として物理現象を起こすことによって自身の有利を築くことができる。それが、アサシンの狙いだった。

だが、アサシンは一人の少女を見誤っていた。輝かしい誇りを持つ宝石の少女、その苛烈さを・・・

「Anfang^ト」

Ein^灰 は K^灰oreper^に ist^塵 ein^は K^塵oreper^に――
Abzug^{消去}！

少女の手の中で閃光の光を打ち消すほどに輝くのは真紅のルビー。勝利と情熱を表す輝きは魔力を伝播させ、浄化の炎を巻き起こし、ア

サシンを巻き込みながら結界を破壊した。

周囲を殲滅させる攻撃的な魔術に結界消去の効果を付属させたのは、彼女の天賦の才か、激しい怒りによるものか。

「創名君もアンタもそう、弱いものから狙う、それは戦いの中で有効だわ。それは認めましょう。けど、いつでもまっすぐに私を狙ってくる事を認められるほど、私のプライドは安くないのよ？」

結界が崩れ、光が乏しくなり元通りになっていく世界の中で、笑みを浮かべて彼女は言う。

牙を向く獣？否、それよりも優雅で美しい、悪魔の笑み。

「時間稼ぎ？足止め？上等じゃない。とことん付き合っただけ。」

夜闇に立つ少女は可憐、しかし、その瞳に宿る意思は炎より苛烈。

「徴収の時間よ、アサシン。私が足手まといだなんて舐めた真似してくれたのは高くつくわよ。」

現代の魔女にして稀代の魔術師、遠坂凜は高らかに宣言した。

終結

炎が溢れる世界に剣戟が響く。

二人の少年が互いに剣を振るい、ぶつかり、弾く。

剣が砕けようとも一人は再び剣を構築し、一人は砕けた剣を瞬時に修復させる。

「骸^体は剣で出来ている。」

「体は剣で出来ている！」

互いに同じだけの剣を振るい、同じだけの傷を負っている。固有結界の制限展開によって傷を修復出来るはずの創名は、詠唱と共に体に起きる違和感によって魔力が散らされ、思うような効果が出ないことに舌打ちをした。

「お前と俺、元は同じなんだろう？根元を同じくする心象風景を持つもの同士なら、互いに干渉する。」

「遠坂さんの入れ知恵かな？」

「ああ、そうだ。他にもお前と会うときの為に色々準備してきた。」

共感魔術、丑の刻参りが代表されるように相手と近似したものに影響を与える事で、目的のモノにまで影響を及ぼす呪いの基本。それを利用し、士郎は固有結界の魔術をわざと失敗することで、士郎自身のコピーである創名の固有結界に由来する魔術を妨害しているのだ。

魔術の失敗はどれだけ気を付けたところで術者へのダメージが避けられない為に、乱用こそ出来ないが創名の切り札とも言える魔術の幾つかを不発へと追いやることに成功していた。

けれど、同じ事は創名にも出来る。士郎が固有結界を展開しようとするれば創名も妨害することが出来る。創名の優位は消え、拮抗したまま切り合いへともつれ込む。

幾筋の剣線が走り、互いに距離をとる。鏡写しのように傷を負いながら、それでも、どちらも折れる気はないのだと悟らせる眼光だ。

「ねえ、士郎。こつちから誘つといてなんだけどさ、“此処”まで来れるとは思ってなかったんだよね。」

何気なく言葉を出したように笑いながら創名は言った。それが、どうしても納得できないのだという気持ちを滲ませて。

創名の疑問は正当な物だ。創名と本気で対峙合する此処へ士郎が来る事の無いように、創名は立ち回っていたのだから。

衛宮士郎の周囲の人間が魔術の世界に巻き込まれないように他者を巻き込むキヤスターは潜り込んで破滅させ、士郎が覚悟を決める切っ掛けになる慎二は早々にその意識を変革させ、成長を促す『敵』である綺礼やゾオルゲンは敵として相対する前に排除した、士郎が救おうと力を求める理由である少女達は、苦しむ理由を取り除き、誰か一人の為に動かないようにする鎖に変えた。

そうして、衛宮士郎が歩む物語を滅茶苦茶にした。

だからこそ、この場面創名との対峙において、迷いを捨てきれずに、覚悟を固めきれないはずだった。

何より士郎は攻める戦いも、守る戦いも、本当の全力を出す事は無い。士郎自身も気付いていないが、彼は本来救う為の戦いでこそ限界を超えた力を発揮する。

どんなに戦っても救える者の居ない戦いでは限界程度の力しか振るえず、それは創名にとって簡単に対処可能なレベルでしか無い。

そのはずなのに、何故、創名の観測に置いて、警戒度を引き上げざるを得ない程の覚悟と決意を持ってやって来たのか？それが理解出来ず首を捻る。

「何故この場に立っていられる？この場には救える人間は誰も居ない、終わった地獄、ただ問う為だけの場所。自分には理解できない。」

「・・・救える人間ならいる。」

創名の問いかけに士郎は不機嫌そうに答えた。

「どこに？誰を救う気なのさ？」

「分からないんだな、創名。」

俺は、お前を救いに此処に来た。」

士郎の言葉に創名は呆気にとられたように笑みを消し、次に眉をかめた。そこにあるのは、戸惑いと怒りと、別の何かが混ざった感情だ。一番近い言葉を探すなら不愉快、次に近い言葉は嬉しき。複雑す

ぎる感情は小さな眩きと共に誰にも届かず消えた。

そうして、次に浮かんだのは無表情のようでながら、何かを堪えるように見える奇妙な表情だった。

「てつきり、もうちよつとマシな答えが帰ってくると思つてたよ。驚いたつて言いたい所だけど残念。」

「何がだ。」

「自分は士郎の敵にさえ成れないのかな？」

堪えているのは激情だった。無表情の仮面の下にあったのは怒り、失望、許せない裏切りに会った少年の顔だったのだ。

敵だと憎まれる事を望んでいた。悪だと断罪される事を願っていた。それなのに、『救うべき』だと思われていることが受け入れられなかった。

どう思われていようと、創名が行う事は変わらない。だからこそ、創名は士郎に憎まれていたかった。この地獄を再生する創名を救おうだなんて馬鹿なことを考えていて欲しくなかった。

だって、創名は最後に士郎に殺されることで目的を達するのだから……
ただ一人の為の絶対悪を殺して後悔する姿なんて望んでいないが故に、創名は激怒する。

「この世界の問い掛けの答えなんて、キミには出しようが無いんだ！自分を殺さなければ聖杯が完成したときには手遅れになる。それなのに、救うなんて戯言を吐ける！正義の味方になるって言う約束は、覚悟は嘘だったのかよ!？」

冬木中央公園に展開された固有結界は詠唱だ。繰り返し続け、密度を増し、やがて完成する魔術儀式。完成したらアサシンに自害させ、聖杯を完全な形で起動させる。この儀式がいつ終わるかは創名とアサシンしか知らず、士郎達には余裕など或はずがない。それなのに、創名を救おうなど考えるのは、最悪の神へと変生した創名が殺す人々を見捨てる行為だ。それは、正義の味方がして良いことではないと創名は吠える。

創名の突然の激昂の意味を理解したのか、鏡に写った虚像に合わせ

るように士郎も感情を高ぶらせ、声を上げた。

「違う！俺は切嗣爺さんに約束した！正義の味方になるって！」

その約束を違えるつもりも、曲げるつもりもない！」

もはや何度目かわからない交錯、剣撃の音と怒声が混じり炎に煽られて空へと昇る。

「それなら、自分を殺してみろ！それが出来ないならそこでじっとしている！自分が士郎を正義の味方にしてみせる！」

「違う！それで正義の味方になったとして、それは、俺が爺さんに約束した、俺が憧れた『正義の味方』じゃない。」

「そうやって、理想を追って、重荷を負って、そして沈む！そんな自殺志願者を、破綻者を『正義の味方』とは言わない！」

創名の剣を受け止めながら、士郎はその顔が誰かに似ていると感じた。士郎と同じ顔のはずの創名の顔、表情が自分達の養父に似ていると感じた。士郎が知っているのは、何かを悟ったような、何かを諦めたような穏やかな父親だ。けれど、今の創名はきつと、正義の味方を諦めきれなかった頃の士郎の知らない衛宮切嗣に似ているのだろうと思っただのだ。

理想を追って、それに破れ、妥協をして、妥協こそが最良の手段だと断じた悲しい男。

100を助ける為に1を捨て、1000を守るために100を殺す。

それを是とした嘆きの果て。

悲しんではいけない／1は必要な犠牲だった

嘆いてはいけない／10の死者は生きる事さえ許されなかった

100、1000、10000。何処までも多数を救う為に少数の犠牲を強いて擦りきれた彼と創名が重なった。

「・・・ああ、そっか。創名。お前にとつての『正義の味方』はオヤジなんだな。」

「っ！」

士郎の呟きに、創名は飛び退る。まるで、強烈な一撃を受けたように顔色を変えている

「許せなかったのか、衛宮切嗣が正義の味方じゃないことに。だから、

俺がお前を切り捨てて、お前の言う正義の味方になれば、切嗣もまた、正義の味方になる。」

「そうだよ。切嗣は自分にとっての正義の味方だった。本人が違うって言うっても、世界が違うって言うっても！だって、あんなに、頑張ってたのにさ、報われなかった。そんなの間違っているだろう？」

士郎の言葉に、諦めたように頷き、創名は言った。

今現在、生きている人間の中で衛宮切嗣という人物にもっとも深く、もっとも長く関わってきたのは、イリヤスフィールでも士郎でもなく、創名だ。それが故に許せなかったのだろう。やるせなかったのだろう。正義の味方を諦めて、そのまま去っていった父親が。

「正義の味方を目指して、求めて、最後に聖杯にまで『継って』。その答えがこの世界！」

全てが燃える世界を示し、創名は叫ぶ。

「そんなの、あんまりじゃないか。」

だからこそ、創名はこの世界を問い掛ける世界だと定義した。本来、この世界は一つの答えだ。正義の味方を目指した身衛宮切嗣が苦しみ、放浪したあげくに辿り着いてしまったモノだ。けれど、創名は思ったのだ。

こんな救いような無い物が、正義を求めた末の答えなんて認めないだから、切嗣が原因の一端を担った悲劇に意味を持たせた。正義の味方の誕生の物語においての役割を与える為に。

創名は、自身の目的を変える事はできない。けれど、その過程なら選ぶことができる。だから、選び抜いた。このクライマックスを、士郎を正義の味方にする事で多くの願いを叶えるために。

士郎は目を瞑り、考える。創名の叫びから、自身と自身の養父、その最期。そして口を開いた。

「確かに、間違ってる。頑張っても報われないのは嘘だ。

でも、爺さん報われてた。いや、今も報われている。」

「何を言ってるんだよ。」

「だって、創名は爺さんの為にここまでしたんだろう？自分の為に頑張ってくれる奴がいるんだ。爺さんは報われている。」

創名の思いも分かる。けれど、衛宮切嗣の最期はあの月夜で正し

かったのだ。切嗣の心は救われていたのだと思う。

「それでも、たった一人だ！」

叫びながら距離を詰め、斬撃を繰り出す。感情のままに振るわれた剣は士郎でも軽々と受けれるほどに鈍く、士郎が押されそうなほど重かった。

「ああ、そうかも知れない！けど、勘違いするな！俺もそうだ！」

剣を弾く、切りつける。受ける、止める、流す、突く、避す。思いをぶつけ合うように互いの剣を交わす。

「俺やお前だけじゃない！」

俺達が切嗣の後に続いたように、

俺の後に続く者がいるなら！お前の後に続く者がいるなら！それは切嗣が始まりだ！」

士郎は創名の声に負けぬ程声を上げる。世界よ聞かぬが良い、これが正義の味方正義の味方に至る者に。衛宮士郎の答えだというように。

「辛いのも、悲しいのも、憎いのも当たり前だ！だけど、」

「それを他人に当て付けるのは間違っている。それは、悪だ。それを俺の弟に悪を押し付けなくてくれ。」

創名はどうしようも無い奴だけど、悪い奴じゃないんだ。」

それは答えであり、懇願だった。正義の味方ではなく、未だ正義の味方に成れない衛宮士郎の言葉。

未熟で曖昧な何処にでもある願い。だからこそ、誰もがそれに共感する。

士郎の願いと共に、地獄で響いていた苦痛の声と助けを乞う声が止まり、それを上げていた死者達が灰となつて消えていく。残ったのは燃え盛る街と生者の二人だけだった。

「あははっ、卑怯じゃないかな。答えを出せって言われて、そんなこと言う？普通。」

「答えは出せないってお前が言ったんじゃないか。」

呆然と呟く創名に士郎は笑って言う、創名の勝利条件は崩れた。しかし、創名は諦めてない、それを士郎も分かっている。

「まだ、どうにか出来るんだろう？だから俺に止め方を教えた。」

「そうかもね。」

士郎が諦めないのと同様に、創名は諦めない。そんな所ばかり似た二人は今までより距離を取る。互いの本当の切り札を切るのが分かったからであり、正面から迎え撃つ為の準備だ。

「刻まれた終演よ。創痕をなぞれ。」

「令呪に於いて命じる。寄越せ！アーチャー！」

創名の詠唱によって現れたのは、全体に罅が入った輝く聖剣。それは、10年前に終演の幕を引いた物であり、この炎の悪夢の引き金を引いた物。過去に刻み付けられた傷からトレースされた出来損ないの偽聖剣。人の身に余るものを、死者の消えた固有結界の補助を受け、聖杯の魔力を回し、一瞬の為のみに具現させる。紛れもない歪んだ奇跡を手に創名は笑う。

対して、士郎は令呪が輝き一画欠け、そしてその手には幻想のように美しい鋼の剣が握られている。それは、創名が生み出した剣を雛形にした未来の聖剣、邪神を討った正義の味方が振るった悲しき幻想。本来の持ち主である英霊エミヤが投影した宝具を令呪によって転移させた、其処に至っていない担い手と未来の彼が振るう剣、セイバーとアーチャー、遠坂と士郎、サーヴァントを入れ換えて契約をし直すという奇策によって実現した正義の希望。

「創痕刻むー」

「正義を誓うー」

二人は剣を正眼に構え、振りかぶる。片や継ぎ接ぎの聖剣、片や未だ届かぬ聖剣、出力は五分。

創名の手の中で聖剣が、汚染された聖杯の魔力に悲鳴を上げる。剣を握った士郎の腕が、今はまだ相応しくないと軋む。しかし、二人には関係ない。この1振りですべてが決まる。

そして、その時がやって来る。

「終幕の剣！」

「勝利の剣！」

星の極光を思わせる輝きと、闇を切り裂く旭光の輝きが創名と士郎の間でぶつかり、光を散らす。世界の終わりと云われればそれである

ように見え、世界の始まりだと言われればそれにも納得できるような、破壊的でそして神々しい光の奔流は、どの様な存在さえ見通せない程の強い輝きを刹那に起こして消えていく。

其処に有ったのは、夜空の下の公園とその地面に膝をつけた創名、そしてふらつきながらも自身の両足で立っている士郎だった。

「俺の勝ちだ。創名。」

「そして、自分の敗北かな。」

「約束だ。帰るぞ。」

清々しく笑いながら士郎が言う、創名もそれ笑顔で答える。

「戦闘中だった凜達が士郎達に気づき歓声を上げた。」

その瞬間に動いた者とその動きを知っていた者が居た

ターン！音にすればそれは在り来たりなチープな音だった。

実際にそれが銃声だと即座に気づけた者は居なかった。

その音と同時に創名の胸が弾け、紅く染まらなければ銃声だとしても気にする事はなかったかもしれない。

創名が崩れ、地面に倒れ伏すまで誰も動けなかった。

倒れ伏す創名に士郎は駆け寄る。聖杯の心臓ごとの破壊、現実として認識しているはずなのに、理解が出来ない。

何故？どうして？

主人を殺した暗殺者はその疑問に答えること無く姿を眩ましていた。

「・・・士郎、・・・約束・・・は、また、・・・今度、な・・・。」

途切れ途切れにそう告げて、最後に泣かないで、そうかすれた声で言っ、創名の息は止まり、死亡した。

ROUTE COMPLETE

！

エピローグ

エピローグ

聖杯戦争が終わって三日がたった。

衛宮士郎は遠坂の屋敷より帰還し、家を開けてた間の分の掃除を行っていた。もう少し早く帰りたいかったのだが、最後に英霊の宝具を使うなどと言う無茶をやらかした為にかかった体への負荷とその影響を調べたり、治療したりと忙しかったのだ（主に凜が）

「おや、こんな所にまだ埃が・・・」

「煩いなあ、文句が有るなら遠坂の所に帰れば良いだろう。」

「つれない事を言うじゃないかマ、ス、タ、ー。」

部屋の隅の埃を見つけ、姑の嫁いびりのような事をし出したのは紅い弓兵。最終戦の策としてサーヴァントを入れ換えたのだが、現在でもそのままだ。聖杯のサポート無しで士郎ではサーヴァントを現界させておくことは難しく、単独行動持ちのアーチャーならば、魔力を節約出来るからと押しきられたのだ。

問題としてはその通りではあるが、恐らくは同居人としての快適さで、小言がうるさいのを追いやろうとしたのも、主従の入れ換えを戻していない理由の何%かを占めているのだろう。

「シロウ、今日からよろしくね。」

「ああ、イリヤ。」

「お姉ちゃんって呼んでもいいのよ?」

衛宮邸の新たな住人となる少女が二人のメイドを連れて現れる。イリヤはアインツベルンは帰らず、衛宮邸で士郎と暮らすことを選んだ。バーサーカーが居ないのを残念がっているが、それでも『家族』と暮らせることに喜んでいる。

「飯は桜と慎二が来てから作るからちよつと待ってくれ。」

「はい。」

桜と慎二は和解し、二人で臓硯がない間桐の遺産の整理や管理を行っていく事を決めた。凜はかなり難色を示したが、聖杯戦争の表向

きの優勝者である遠坂凜に弟子入りするということにして、桜に魔術を教える事を条件にそれを認めた。

第5次聖杯戦争は表向きは遠坂凜の優勝と言うことになっている。しかし、本来なら優勝者になっていたであろう創名がサーヴァントの反逆により聖杯を破壊されてしまい、その勝敗はあやふやなモノと成ってしまった。

あのアサシンは一体何を考えていたのだろうか？

「こんにちはー、来たわよー。」

玄関から声がして、凜にバゼット、そして、肌の黒くなった創名が入ってくる。

そう、創名はあの後、一度死亡した後に息を吹き返したのだ。髪は黒くなり、肌も浅黒い色になり、人格も別人のようになって・・・
「どうしたんだ？来るのは夜からって言ってたのに・・・」

「創名くんの体に残ってた弾丸を回収して、調べたら、ちよつと分かったことがあってね。報告に来たのよ。」

「軽く言うけどこの人、俺の心臓止めたからね。その上に癒着してる弾剥がしたんだぜ！いくら直せるからって鬼の所業だよな？」

「煩いわよ、創名くん。」

「アヴェくんって呼んでくれていいんだぜ？」

本気で別人のようだ、本人曰く、創名とは別人だが、士郎とはほぼ同一人物という謎の答えが帰ってくるだけだった。

凜達を居間まで通すとアーチャーが既に人数分の湯飲みを用意していた。

「今回分かったのは、この弾丸が魔術礼装だったと言うこと、創名くんの骨が使われていたこと。」

「骨？」

「ええ、ここに居るアヴェが言うには起源弾って言うらしいわ。撃たれた対象に起源の現象を強制的起こす礼装」

そこまで言われて士郎も気付く。創名の起源は『輪廻』つまり・・・
「そう、この弾丸の効果は恐らく撃たれた対象を転生させる効果、創名くんは既に生まれ変わってる可能性があるわ。」

「うん、すげー発見みたいにいってるけど、オレ目が覚めたときに言ったよね、創名はもう生まれゴつはッ！」

澄んだ目をした凜に殴られ、創名もといアヴェくんは吹き飛ぶ。

「まあ、記憶があるかとか色々気になる点はあるけど、もしかしたら、また会えるかも知れないわ。」

「会えるさ、約束はまた今度、そう言ったんだ。きっとまた会える。」

月下の約束とあの日の約束、そのどちらもまだ果たされていないならば、創名は約束を果たしにやって来る。その時を楽しみに、そして、その時彼に胸を張れるように、正義の味方に少しでも近づこう。

少年は決意を胸に笑う。いつか、いつの日か、弟とまた家族として過ごせる日が来る事を確信して。

END

蛇足あるいはネタバレ

ある人形師の事務所兼工房『伽藍の堂』、その乱雑に散らかった事務所に置かれたソファの上で、一人の少女が息を吹き返した。

いや、その表現は正しくない、その少女はその瞬間初めて息をしたのだ。

「あー、よく死んだ。おはようございます。橙子さん。」

「ああ、おはよう。そしてはじめましてだな。」

所長である蒼崎橙子は、先程まで人形だった少女が動いているのを確認し、満足そうに頷いた。

「うん、ちゃんと定着しているな、便利だなあお前の魂は。」

「そういうもんですからねえ、てか、何で女性型なのか聞いてもいいですか？自分は男性型を頼みましたよね？」

「固いこと言うなよ。どうせお前は、条件を満たしておけば男女関係なく転生するんだ。ちよつとくらい趣味に走っても良いだろう。」

「素晴らしい開き直りですね。まあいいですけど。」

少女はソファに座り直し、動作を確かめるように手を握ったり開いたりする。その正面、向かい合うように橙子も座った。

「早速だが、報酬を頂こう。第5次聖杯戦争の顛末を話してくれ。」

「勿論。」

そして、少女は終結したばかりの戦争を、まるで自身が体験してきたように語りだした。

「フツ、それで、自分のサーヴァントに聖杯を起源弾で撃ち抜かせたわけか。諦めが悪いというかブレないな。」

「そうですね？聖杯戦争では失敗しましたがけど、次に繋がるようにするのは当たり前ですよ。」

「だからって、6騎のサーヴァントの魂が入った聖杯を『輪廻』の起源弾で撃ち抜くやつがいるか？英霊の分霊を輪廻に引き戻し、生まれ変わらせる。しかも、この世^{アンリマユ}全ての悪の呪詛に汚染された聖杯に入っていた魂をだ。」

呆れたように言う初対面の友人に少女はごく普通に語る。

「まあ、呪詛に染まって反転してるでしょうし、現代に転生してるなら大変な被害が起きるでしょうね。生まれ変わっても英霊は英霊、ただの人や魔術師じゃ相手にならない。」

「そこで、同じく英霊を持つ遠坂やお前の元兄が呼ばれることになる。そして、現代に生き返った英霊が悪逆を行っていればいるほど、倒したときの彼らの名声は上がっていく。それこそ、何かの英雄のようになるんじゃないか?」

「そうなれば良いですね。」

何でもない様に少女は前世から引き継いだ目的の達成を夢見て微笑んだ。

「さて、報酬を急ぎすぎて、大切なことを忘れていた。

生まれ変わったキミを私はなんと言えば良いんだろうな?月の触覚?それともTYPE MOONか?」

「その言いようだと、本物に怒られるので止めてください。」

橙子の言葉を少女は笑って否定する。しかし、それは全否定では無かった。

「いつ気付きました?」

「お前に前世の話を聞いたときからだよ。」

少女の問いに当然のように答える橙子

「まず、生まれ変わる原因だ。神様?他人の心象風景を固有結界を複数展開し、尚且つそれを融合できる存在?そして、それが、ただの一般人だったはずのお前の起源を読み間違える?有り得るかそんなモノにそんなこと。」

「ごもつともですね。」

「次に違和感を感じたのは、月にあるという存在、この世界には存在せず、ある平行世界の月で、世界のあらゆる事象を記録する聖杯、ムーンセル・オートマトン。この神の瞳が、自身が存在しないからという理由で『自分が存在しない世界』の観測をしないわけがないという確信だ。」

煙草の煙を吸って、吐き出した後に橙子は続ける。

「観測を行ううとしてどの様な手法を取るかだが、2パターン考えられ

る。自分で見に行く事と他人に見てきてもらう事だ。前者は言うまでもなく、次元に観測用の覗き穴でも開けて、そこから観測すること、これは観測される世界に結構な影響を与えるだろうから、そこまではしていないだろう。」

「では後者は？」

「それこそ言うまでもあるか？監視カメラの様に自身に記録を送る端末を世界に投げ込めばいい。多少の変化は出るが、世界単位ならたいした変化ではないさ。精々ゲームのルートが1つ増えた程度の差だ。」

ククツと自身の冗談が気に入ったように肩を震わせた。

「では、そんな監視カメラはどんなモノが良いだろうか？きっと生物だろうな、特に時代の中心とも言える人間が良いだろう。観測のノイズを少なくするには、観測者はどんな歴史でも一定であることが望ましい、例えば生まれ変わっても根本的な変化は滅多にしない『輪廻』の起源を持っている奴なんてびったりじゃないか。」

「そうですね。」

「まあ、遠回しに言うのもやめよう。お前は元々ムーンセルに作られた上級AIだな。」

「ええ、観測と報告を主な業務とするAI、K i i 0 2です。最近まで自分も知らなかったのですが。」

少女の言葉にやっぱりかと橙子は頷く。

「それなら、チグハグな神の説明がつかぬ。お前は見たり感じた事象をムーンセルに報告する。その際お前の勘違いや錯覚はそのままムーンセルに伝わり、ムーンセルに記録されたことは真実であるという理によって、現実となる。」

お前の前々世が神と遭遇する前に起きた事故によって、お前の自己防衛機能が暴走した。それによって自身が死に行く運命だと悟り、それを無意識に回避しようとした。」

「そうして、偽物の神を自身の想像で作り上げ、それをムーンセルに伝達し、その虚実が真実となった。」

「自発的には使えないだろうが、アカシックレコードと繋がっている

ようなモノだな。」

関心したように言う橙子にそんなに良いものじゃないですよと少女が拗ねたように言う。前世が嫌っていた神が前々世のイメージによる産物だったというのが恥ずかしいらしい。

「さて、友人が月の住民だった事を祝して、少々出掛けよう。」

「何処にですか？」

「前世のお前の義姉の所だ。彼女の体の寿命を人並みにすることも契約に入っているんでね。」

少女の言葉に嘯いて、橙子は立ち上がり、鞆をとる。少女も立ち上がった。

「さて、行こうか。」

「その前に、私の名前決めませんか？」

「そんなの、前世と同じ、キズナで良いだろう。漢字は後で考えればいいや。」

頷き、少女は歩き出す。完全なハッピーエンドを迎えるために…

番外、後日談

義妹ちゃんがラスボスルート1

「ちよつと、よろしいかしら?」

聖杯戦争を乗り越え、春と共に新しい住人達との生活が始まった衛宮邸。新学期の始業式の後に衛宮邸に集まって過ごしていた魔術師達の穏やかな時間は、嫁をいじめる姑が発するような、棘と毒によって構成されたように聞こえる言葉によって凍りついた。

その言葉の発信源は卓袱台でお茶を啜っていた着物姿の少女。年は10代の半ば、短く切り揃えられた黒髪は艶やかに輝き、少女の美しい顔を引き立てている。この少女こそ前世に衛宮創名を持つ生まれ変わりの少女、蒼崎キズナだ。

(橙子と創名の共通の友人と言うか、橙子の下で働いていた特殊な魔眼を持った女性をモデルに作られた体であり、15歳の状態という形で製作したために、モデルの女性の婚約者からは写真を撮られまくったり、その写真を見た彼女実家の方々から大量に着物を貰ったりというイベントが発生したが今回は置いておく)

生まれ変わってから二ヶ月が過ぎ、周囲も少女になったキズナに慣れた頃に彼女は冒頭の台詞を吐いたのだった。言葉を向けられたのは、セイバー、凜、桜の3人。向けられた3人は突然の呼び掛けに対応出来ずに固まり、向けられていない者も固まってしまっている。

「ん? ああ、ちよつと試ってみたくてさ。丁度、3人に用事があったから言っちゃったんだよ。」

「あ、ああ。そうなんだ。で、どんな用かしら?」

「うん、ちよつと待ってね。」

凜の問いに曖昧に頷いた後、キズナは士郎の方へと向く。

その表情は今までと打って違って、自分が犯した罪を懺悔する信者のように神妙な表情だった。

「士郎、実は、士郎達が学校に行っている間にオーブンを・・・」

「オーブンを何をした!」

意味深氣に途切れた言葉に士郎が全力で問いただす。アーチャーも掃除の手を止めてキズナを注視する。

しかし、キズナはうつすらと笑みを浮かべるだけで何も言わない。その笑みに何かを察したのか、士郎とアーチャーが台所へと駆けていく。それを見送りながら、キズナは部屋の四隅にルーン文字が、刻まれた石を投げた。

カナリアは鳴かなくなった
「黙して語る事勿れ

よし、それで用事なんだけどね。」

「ちよつと待ってください、その用事つて先輩とアーチャーさんを追いかけて、結界を張ってからじゃなきゃ言えないような内容なんですか!?!」

「そうです！一体何を企んでるのですか!?!」

キズナの余りにも唐突な行動に桜とセイバーが叫ぶが、問われた本人は氣にした素振りもなく話を続ける為に口を開く。

「自分は別に士郎達が居ても良いんだけど。まあ、士郎が居ない方が話しやすい内容ではあるかなあ。」

「一体何をしようつてのよ?」

「何って・・・恋バナですよ?」

予想外過ぎる言葉に凜を始め、ピキーンと音を立てて3人が固まる。逃げ出そうとした慎二とアヴェ君は目を輝かせたイリヤによって捕獲された。

「アサシン、アレを出して。」

キズナの言葉と共に卓袱台に古びた手鏡が出現する。氣配を遮断したアサシンの仕業である。創名からキズナへと契約を移したアサシンは普段は姿を隠しつつキズナのサポートを行っているのだが、サポートを通り越して身の回りの世話を焼く爺やのようになっており、アサシン（真）ではなく、ブラウニー（真）となる日も近いのではないだろうか。

そのアサシン（爺や）が置いた手鏡をキズナが手に取り、正面に座った三人へと鏡面を向ける。薄汚れた鏡面に映るのは呆氣にとられた桜とセイバー、この鏡が何かを察してキズナに飛び掛かって阻止しよ

うとする凜と、それを抑えるアサシンの姿だった。

「鏡よ鏡よ鏡さん 眞実の魔鏡よ

どうか教えてくださいな
汝に映る心を暴け

乙女の秘密の恋心
「彼の人を想う情念を」

呪文によりそれが一体何かを察したときには遅かった。鏡より光が溢れ、今まで映っていたものとは別の物が入り込む、それは鏡に写真のように写り続ける凜達と、それぞれの横に出るピンク色の長いバーが映り込んでいた。(アサシンのみ青色の短いバーである)

「ふむふむ、やつぱり三人互角かあ。面倒だと言いたい所だけど、面白くなってきたね。」

「ちよつと、人に無断でいきなり礼装使つといてその言い様はどう言つた了見よ！アンタ!？」

真つ赤になつて叫ぶ凜には鏡の正体とその映っている物が分かっているようだ。

この鏡は礼装であり、お伽噺にも登場する『問いに答えを返す鏡』の一種だ。日本にも死者の生前の眞実を映す浄瑠璃の鏡などがあるが、この手鏡は元々の有った魔鏡を改造され、その機能を限定的にしたもので、映つた対象の特定の人物への好意の種類と大きさをバーの長さや色によつて表すという、ギャルゲーの好感度チェッカーのような存在に変えられた憐れな鏡なのだ。

言うまでもなく、バーが長ければ長いほど好意は大きく、ピンク色は恋心を表している。対象は更に言うまでもなく衛宮士郎である。

その事を着物を着た和風美少女に告げられ、凜達はパニックへと陥つた。

誤解だ、間違いだ。記憶を失うか命を失うか選べなど、混乱のあまり意味の無い言葉が口から次々に飛び出ていたが、キズナはそれらを聞き流し、不機嫌そうに言う。

「何で、何で誰も押し倒すとか、そういう事してないんですか!？アンタらそれでも魔術師か!？英雄か!？」

凜さん桜さん、士郎に魔術教えるとか言つて色々機会は有つたでしょう?セイバーさんも、魔力が足りてないとかいつて丸め込めたで

のか、台所に仕掛けてあった足止め作りかけのケーキの仕掛けを持って士郎が居間にやって来る。

結界は防音や意識を逸らさせる物だったので、居間で行われていたやり取りは気づかれていない。

「ねえ、士郎。結婚してくれない？」

「おう、良いぞ。」

その士郎にキズナが何でも無いように言い、士郎も何でも無いように返事をした。

居間の空気が液体窒素に入れ替わった様に冷え切り、凍りつく。

誰もが目の前で交わされたやり取りの訳が分からずリアクションもとれていない。

イリヤのみがやっぱりかと、悔しげに呟いている。

「にしても、いきなりどうしたんだよ？」

「いや、今の自分の名前って蒼崎キズナじゃん。何か違和感あってさ。衛宮って名字に戻りたいなああって思ったんだよ。」

「ああ、何だ。そう言う事なら別に構わないぞ。」

キズナは生まれ変わったとはいえ士郎の弟であり、未だに士郎にとっては身内である。士郎は身内のやることを他人の迷惑に成ることではないなら止めない。この『結婚して』を言ったのが凜や桜、セイバーだったら、俺何かにそんなことを言ってからかうなよ、とか。もっとちゃんとした好きな人に言うんだ。などと言われるだろうが、言ったのはキズナである。何か考えがあるんだろうと受け入れられてしまっている。

「まあ、戸籍じゃ士郎が17、自分が15に成ってるから、婚姻届け出せるまで1年ぐらいあるし、士郎の卒業までにどっちかに恋人出来なかつたらってことで良い？」

「ああ、いいぞ。」

約束を交わした後、キズナは嘲笑いながら居間にいた面々を見る。

一言も発さなくても、言いたいことは士郎を除く全員が理解した。

「(さあ、カウントダウンが始まったぞ。死に物狂いで謳ラヴコメシロえ！雑種共ヒロイン!!)」

さもなくばお前達の思い人は、卒業と同時に人生の墓場送りになるぞ。

キズナは捨て身の発破脅迫を送りながら笑って見せる。その笑みは邪悪で力強いラスボスの笑みだ。

この日この時、ヒロイン達の前に義妹ちゃんラスボスがタイムリミットを持って降臨した。

義妹ちゃんがラスボスルート：卒業までの一年で士郎を攻略出来なければゲームオーバー。イリヤとカレンの妨害を潜り抜け、慎二やアヴェクんの助力を受けながら攻略を目指す。

ゲームオーバーはキズナにとってもバッドエンドであり、起源弾を使用した逃走転生も視野に入れた、一時のテンションに身を任せ捨て身の策。たぶん後から後悔する。

番外編用キャラ設定

本編のネタバレが堂々と載ってますので、ご注意下さい

衛宮創名

本作の主人公にして、原作主人公に立ち塞がったラスボス。

前世の記憶を頼りに対策を立て、他のマスター、サーヴァントに対して優位を保っていた。

魂の大元がムーンセルによって作られたAIであり、平行世界を観測する為の観測機である。その為、聖杯の汚染によって反転していた時は人ではなく、AIとしての側面が出ていた。

観測機であると同時に記録をムーンセルに送信する入力端末としてのアクセス権を有しており、創名の認識は誤りで有ろうとムーンセルに正しい情報として記録され、事象が改変される。

ただ、その現象は完全に無意識での思い込み、誤認でしか起こらず、魔術による暗示などで思い込まされた場合でも発動出来ない。創名が意図的にアクセスする事も可能だが、その際は不正アクセスと判断され、創名自体が消去される。

最終戦では幾つかのプランが用意されていて、本編は固有結界が破られ、かつアサシンが生き残っていた場合のプラン。創名視点では最善ではなく次善だが、人类的には邪神誕生よりは受けるダメージが少ない。

一度死亡した後、無限の剣骸の制限展開により回復したが、魂は生まれ変わっており、空っぽの肉体には聖杯破壊直前に押し出されたアヴェくんが収まっている。

キズナと言う名の少女（蒼崎キズナ）

創名の生まれ変わり。記憶と人格を引き継いでいるが、生まれ変わっている為完璧な本人とは言えない。アニメ版と劇場版のキャラの違い程度の誤差がある。（ジャイアン程では無い）

主な差は自分がAIである事を強く自覚しており、その為に他者に

対する感情が希薄になっていく事と、転生と言う手段による擬似的な不死の手段を得た所為で慎重さなどが減り、衝動的に動きやすくなっている事。

稀代の人形師、蒼崎橙子の人形に転生したお陰で魔術師としてのスペックが上がっている。魔術属性は月、特性は始点と終点へと変化する、時間や精神に関わる魔術が得意となった。

外見は式がモデルになっていて、中学生の頃の式に瓜二つ。式の実家から着物を大量に貰っており、それを普段着にしている。

魂の歪さは引き継がれているが、士郎を正義の味方にする事に創名ほど執着はしていない、しかし前世が残した計画ぐらいは実行しようと思っっている。

アサシン

創名に召喚されたアサシン、創名転生後、ちゃっかり創名の生まれ変わりの少女をマスターに契約をしておしている。

気配を消し、姿を隠してマスターの側に潜み、周囲に気付かれない様にサポートを行っている。最近では、士郎やアーチャーよりも早く家事などを行う事を楽しみにしており、アサシン（真）ではなくブラウニー（真）に成りつつある

アヴェくん

創名の体に収まっているアンリ・マユの残滓。創名がイメージしたアヴェンジャー。

創名が聖杯と接続していた時に、呪詛による汚染を防ぐ為に呪詛に擬似的な人格を与え、自身の精神の一部と共に隔離、封印していた存在であり、士郎の殻を被ったアヴェンジャーをイメージして作られた偽物の偽物と言うべき存在。

魔術は創名から固有結界を抜いた程度に使え、つまり殆ど使えない。魔術的スペックは士郎以下に落ちているが、呪詛に関してはかなりの才能を持っている。

創名の体での生活を楽しんでおり、意外と馴染んでいるが。キャラ

や肌、髪の変化は遅すぎる高校デビュー扱いされていて、本人もキズ
ナも納得いかないモノを感じている。

以下オマケ

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公』

それは、誰かには現在の戦争

ーあの子を救うんだ！殺せ！アヴェンジャー！！

『降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三
叉路は循環せよ。』

それは、誰かには過去の戦争

ーボクはボクを止める。この戦争は間違いしかない

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。』

それは、誰かには続きの戦争

ーあはは、また巡ろうか。衛宮自分創名。

『繰り返すつどに五度。』

ただ、満たされる刻を破却する』

その戦争は、第四次聖杯戦争

多くの悲劇を生み、数多の人生を変えた惨劇が待つ戦争。

『告げる』

呼ばれたのは祭り上げられた正義の味方

現れたのは招かれざる未来の邪神

――憧れた物とは違うのに、そう言われるのは不快だ。
――こんな反英霊を召喚しちゃうなんて、狂信者の才能があるよ。

『汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。』

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

イレギュラー達が運命を変えながら争い合う

――無駄だよ。自分が此処にいる以上、結末は変わらない。

――それでも変えてみせよう。キミがボクを正義の味方だと言っ
てくれたのだから！

『誓いを此処に』

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者』

代役にも成れない、復讐者を語る者

因縁に呼ばれし、諦めた暗殺者

――サーヴァント、アヴェンジャー。此処に降臨、なんちゃって。

――サーヴァント、アサシン。招きに応じて此処に。

『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！』

変貌した始まり

それでも結末は・・・

――問おう。汝が我がマスターか？

創痕の零

これは、零へと巡る物語

嘘予告です。ごめんなさい m ((m

義妹ちゃんがラスボスルート2

夜になった衛宮邸の一室、蒼崎キズナの部屋で、キズナ、アヴェくん、イリヤの3名が集まっていた。

「で、なんであんなことになったんだよ？」

「うん、ついカツとなってやっちゃったんだよ」

「仮にも魔術師と名乗ってるんだから感情で暴走するのは良くないわよね」

創名の時とは違い整理整頓された和室の畳の上で、自身の行いを悔やんで転がるキズナをアヴェくんとイリヤが慰めたり、追加ダメージを与えていた。

「こうなったら、デイルムツド殺すちゃん3号でもばら撒いて騒ぎを起こしてうやむやにするしか・・・」

「教会と凜を敵に回すような騒動は止めておきなさい」
「てか、3号ってデイルムツドに何の恨みがあるんだよ」

キズナが破れかぶれのようにつぶやく科白を聞いて、イリヤとアヴェ君はそれを止める。冗談めかしているが、目の前の少女はやると思ったことはやる危険人物であることが昼間のはっちゃけ具合からも想像がつくだろう。

ちなみに、デイルムツド殺すちゃん3号というのは鎌を模した礼装であり、キズナの属性である月より、恋人であるオリオンを射殺した月の女神アルテミスの伝承になぞらえ、所持者が恋している対象が射程に入った時、オートで対象を狙って飛ぶという、はた迷惑な礼装である。この時、恋が一目ぼれならば『不意打ち』という概念も付与され回避判定にペナルティがかかるという、無駄なまでの性能の良さを誇っている為、この礼装が量産されてばら撒かれるという状況は彼の英霊にとっては死にたくなる状況だろう。(使い切りで量産前提の為、サーヴァントにダメージを与えられるほどの神秘を持っていないということとは関係なく。)

そして、恋のお守りだとか言って殺傷能力を削ったこの礼装を士郎

達の通う高校にばら撒いたりすればかなりの騒ぎになるだろう。凜あたりがうっかり鍬を持ったまま士郎に接近すればキューピッドの矢になること間違いなしだ。

「うん、それをリンとサクラのカバンに仕込むつもりだったのね。そしてそれを忘れて、ついカツとなつてやった、と」

「創名のころもそうだったけど、お前つて色々計画するわりに最終的に感情で動くよな」

礼装の説明を聞いたイリヤに当初の計画を見透かされ、アヴェエクンの素朴な感情での眩きにキズナはさらに落ち込み、畳の目を数えだした。

「でも、キズナと士郎が結婚してくれたら、わたしは嬉しいよ」

「おつ？意外だねえ。てつきり、士郎はわたしの！つてなるかと思つてただけどなあ？」

「うん、弟は姉シロウわたしのモノよ？だけどリンとサクラ、セイバー相手だと盗られちゃいそうなもの。キズナと結婚してくれば三人は手を出せなくなるし、妹キズナわたしも姉のだから、ずっと一緒にいられるでしょ？」

「お、おう、そうだな」

茶化すようなアヴェエクンの言葉に頷きながら返された言葉は魔術師らしく合理的で、どこかの女神のように姉の身勝手に溢れた物だった。

流星のキズナも真顔になって、笑顔のイリヤから少し距離を取っている。アヴェエくんは自分が地雷を掘り起こしたのを察し、引きつった笑みを浮かべている。

「だからね、キズナ。わたしはお姉ちゃんとしてアナタが嫌がってもアナタとシロウを応援するわ。アナタが嫌がっても、ね」

「なんで2回言っただすかね？いや、分かるよ？大切なことだからでしょう？チクシヨウ、聖杯を超越せ。過去を変えてやる！」

「うふふ、そろそろリズムが来るだろうからわたしは帰るわね。おやすみ」

意味深に笑いながらイリヤは去っていった。その後、士郎に添い寝を強請っている声が聞こえる当たりがイリヤらしく、きつとさっきの

は何かの間違いだったのだと思える。そう、イリヤが敵に回ることは無いはずだと、キズナは自身に言い聞かせることが出来た。

キズナとアヴェくんが互いに顔を見合わせ深い息を吐いた瞬間、再び襖が開かれた。

そこにいたのは土郎の手を引いているイリヤと引つ張られて来ただろう土郎だった。帰ると言ったのは、キズナ達を油断させる為の虚言、真の狙いはコレだったのだ。

「キズナー！一緒に寝ましょう！土郎も一緒だけどいいわよね」

瞬間、この展開を予測していたアヴェくんは素早く立ち上がり、逃走しようとしたがさらにそれを予知の如く予測していたキズナが詠唱なしで放った魔術によって、足の神経が血の一滴も流れることなく切断され、無様に転ぶこととなった。

「逃げんなよ、元自分」

「(逃がしてくれよ、我が来世)」

互いが口に笑みを作りながら目だけでお互いの意図を理解していた。

その後、イリヤの無邪気を装った策謀(魅了の魔術含むその他)を掻い潜り、同じ部屋だが、イリヤの隣にキズナ、二人と向かい合う位置に土郎とアヴェくんという修学旅行スタイルに落ちつけたりと、キズナとアヴェくんは頑張った。そして、頑張りすぎたのだろう。イリヤの本日最後の爆弾に気づかなかったのだ。

「しゅろ〜う〜!!蒼崎さんと婚約ってどういうこと?!先生は土郎を中学生の女の子に手を出すような子に育てた覚えはありません!!」

その爆弾は、キズナが疲れて眠ったその日の朝に、恐ろしい威力を持って爆発した。

義妹ちゃんが（以下略：3）虎の襲撃）

「し〜ろ〜う〜!!蒼崎さんと婚約ってどういうこと!?!先生は士郎を中学生の女の子に手を出すような子に育てた覚えはありません!!」

こあくまな姉の策略を躲しきったと錯覚し、穏やかな眠りについていたキズナは早朝から響く虎の咆哮によって叩き起こされた。

虎の襲来、しかもその台詞から察するに中々お怒りだ。まあ、弟分にして受け持ちの生徒が中学生と婚約したなんて話を聞けば、姉として、教師として怒りの咆哮の1つぐらいあげるだろう。

取り敢えず、タイガに伝えてたの忘れちやっけてたテヘペロとかほざいてるロリ姉のおかずを減らす事を士郎とのアイコンタクト会議で決定し、次は虎への対策会議だ。

「イリヤの勘違いって言うのはどうだ?」

「そのあくまは、あ、そういう事にしとかなくちやいけないんだねとか言い出すよ」

一見、無邪気に見える笑顔でイリヤは頷いている。

「餌で釣るのは?」

「間に合わない、仕込みは済んでいるけど、調理時間が無い」

言ってる間にも藤ねえが進撃して来ている。普段寝入っている時に奇襲を掛けた以上、寝起きを狙うのは定石、士郎の部屋を目指して猛進している。

魔術師としては怒られそうなのを承知で家の工房としての機能を発動させて位置を把握、違和感が無い程度に妨害しているだがそれを歯牙にも掛けずに進んで来ている。

ええい!コレだからギャグ時空の幸運:EXは!

かくなる上は、士郎の部屋に仕掛けてある奥の手、瞬間意識剥奪のトラップを発動させて仕留める。

何故そんな物をそんな所に設置したのかを説明したら、凜に指の数では済まないぐらいdead end送りにされそうなシロモノを起動させる。部屋にいる者、部屋に踏み込んだ者を即死、ではなく、昏

睡させる魔術を起動する。

「くたばれタイガー!!」

「いきなりどうした!？」

対策を話していたのに、いきなり叫びだした自分に士郎がビビっているが関係ない、本気を出して無いとはいえ魔術に関わりの無い藤ねえに工房のトラップを全回避されているのも関係無い。関係無いっいたら関係無い。

そして、藤ねえが士郎の部屋の前で立ち止まった時に勝利を確信した。

藤ねえが士郎の部屋をスルーするまでは

「何でだよ！直感!?!直感持ちなの!?!」

「どうしたって言うんだよ!?!落ち着けキズナ!」

「落ち着いてられるか!あの虎ときたら・・・」

うがー!と頭を抱えた自分に士郎が本気で心配そうに肩に手を置き声を掛けてくるが、それに応える声は冷静にはならなかった。渾身のトラップを回避されたショックが隠しきれない。あれ?藤ねえ、こつち来てる?」

「ごごかあ!!」

叫びと共に襖が開かれる。そこにあつたのは、

1、2組の布団

2、士郎と自分（寝起きなのでお互い寝巻き、士郎は自分を心配して肩に手を置き、顔を覗き込んでいる）

3、部屋の隅で2人分の布団で簀巻きにされたアヴェくんと視線避けの魔術を使用しているイリヤ

これらが藤ねえにどう見えるかを考えると・・・

「あ、あ、あ、あああああ!し、しろう!!」

言語能力が壊れている。うん、朝チユンワンちゃんある図だよね。こうなった藤ねえを言葉で止めるのは至難の技である。

「アサシン」

「もっと早く声を掛けて下さい」

五月蠅い、忘れてたんだよ。内心で眩くのと死角より這い出たアサ

シンによつて藤ねえが気絶させられるのは同時だった。

「藤ねえ!？」

「アサシン」

「はいよ」

藤ねえへの暴挙に士郎が騒ぎだす前に士郎にも気絶して貰う。

早朝の部屋に転がる屍が2つ（十簀巻き1）控えめに言つて大惨事である。

「・・・取り敢えず、朝ご飯作ろう」

ただし、イリヤ。テメーは駄目だ。

その後、目を覚ました藤ねえに「藤村さんったら倒れちゃつて。士郎も寝坊しちゃつて、え？そんな夢でも見たんですよ、ウフフ」とベタベタの誤魔化しをゴリ押しし、朝ご飯を食べつつ（イリヤはご飯と梅干しのみ）やつて来た凜と桜との連携により、婚約の説明は放課後という事にして目の前の危機を回避、したのだが・・・

「勝負よ！蒼崎さん！」

何故、セイバーと同じ様に勝負を挑まれているのだろうか？

しかも、持つているのは何時もの虎竹刀ではなくお玉である。え？

料理でどれだけの人数を倒せるのか競うの？

「士郎と婚約すると言うなら、私を超えて見せなさい！」

「料理で？」

「料理で」

新学期の忙しいであろう時期にダツシユで帰つて来て、世迷言をのたまいけるこの虎を本当にどうしてくれようか。

「藤ねえ、世の中にはやつていい事と悪い事がある。藤ねえの台所への侵入は後者だ。」

走つて追いかけて来た士郎がアーチャーの様な物言いをする程度に有り得ない提案である。

「士郎、生きていたらどんな許されない事だろうとしなきゃいけない事もあるのよ」

「そうか、そこまで言うのか、それなら・・・」

何故か許されざる罪を犯そうとしている虎は爽やかに微笑み、士郎

もそれに僅かに頬を緩め頷き、

「勝者、キズナ」

「どういう事じゃー!？」

ジャツジを下した。

虎の控訴も却下され、食卓の平穩は守られた。

「キズナ、夕飯手伝ってくれ」

「オツケーだよ、一品ぐらいは任せてよ」

「今日こそ料理が何たるかを叩き込んでやる」

「手間かける事だけが愛じゃない事を教えてやろう」

言い合いながら、台所に入って行く自分達を藤ねえは黙って見送った。

夕飯が終わり、普段は団欒の場である居間は僅かな作為で自分と藤ねえのみだった。

藤ねえが夕飯中珍しいほど静かで気になってしまったのだ。きっと、自分がやらかした婚約の件が原因だろうから、自分にぶつけるなり何なりして早く何時もの藤ねえに戻って貰わないと調子が狂ってしまう。そう思っただけでちよつと小細工を仕掛けていた。

「ねえ、蒼崎さん」

「何ですか、藤村さん」

思いの外穏やかに声を掛けられて返って身構えてしまった。

ちやぶ台に頬杖を付いて、藤ねえは小さく笑っていた。

「士郎と結婚するの？」

「さあ？婚約って事になってますけど、色々と事情が有りまして」

「そう、それならそれでも良いのよ。それなら私の妹みたいな物になるんだから」

穏やかな笑み、衛宮創名^{自分}でさえ滅多に見た事の無い表情。

「だから、藤ねえって呼んで良いのよ？キズナ」

あんまりにも優しい言葉に絶句する。気付いてたの？との眩きさえ出せない。ああ、けど当たり前前の事だった。衛宮士郎^{自分}と衛宮創名^達とも最も長く一緒に居たのは藤ねえだ。

一度生まれ変わったぐらいでは誤魔化せる訳も無かった。

「分かった。藤ねえ」

勝手に逝ってしまった創名を赦して欲しい。勝手に家族に入り込んで来たキズナを許して欲しい。

そう願わなくても、きつとユルシテくれると信じて、自分は大切な人へはにかんで返事をした。

義妹ちゃん（以下略：4く裁け凜く）

凜は激怒した。必ず、かの邪智暴虐を殴つ血KILしらなければならぬと決意した。

過去の名作をワンクッション置かなければ表現する事を憚られる程に凜は激怒していた。

理由は現在穂群原学園で流行っている恋の御守りである。

この御守り、冬木のある神社で購入できる物で、半球体のガラス玉であり、男性用女性用に別れていて、それぞれ1つの球体を割った物なのだ。自身が持つ御守りの片割れを持つのが運命の人、と言うロークル極まりない代物である。

凜は魔術の世界に身を置く者として、その程度『おまじない』は歯牙にも掛けず、鼻で笑う程度だ。由緒ある神社の古くからの御守りなどは侮れない力を秘めているが、新しく作られた御守りなど大した神秘を持っていないのが常識である。

しかし、この御守りには確かに神秘を纏っていたのだ。微弱な魔術と術式を暴かれない様に隠す高度な隠蔽。それなりの腕の魔術師が関わっている事が確定なブツが、冬木のセカンドオーナーである凜の許可なく流通している。この事実だけでも凜は怒りは測り知れない。

その上、御守りが売られている神社というのは、『遠坂神社』なのである。遠坂神社は名前の通り、冬木の土地管理者である遠坂の先祖が所有していた神社（正確には神社を隠れ蓑にした国外宗教の教会）だ。宝石魔術の祖、宝石翁に弟子入りする際に魔術基盤が混ざらない様に管理を委託していた土地である。

そう、遠坂の土地である。例え権利書がそれを預かっていた言峰綺礼が教会ごと燃えた所為で行方不明だったとしても、遠坂の土地なのだ。

遠坂の土地で、凜の許し無く、許可してもいない魔術品が、それなりの値段で、流行している。それは凜の逆鱗を16連打するレベルで怒りを誘発、否、誘爆させた。決して、土地の許可と流通の許可でどれだけの上前を撥ねる事が出来たかを計算しての怒りでは無い。セ

カンドオーナーとしての怒りだ。別に首謀者を半殺しにして売り上げをかつぱらつてしまおうなんて考えて居ない、いないったらいい。

御守りの話を聞いた凧は即座に行動を起こした。体調不良の振りと言う個人的には屈辱この上ない手段を持つて学校を後にし、魔術による強化さえ入れて遠坂神社へと走り抜く。

そして、辿り着いた遠坂神社で見たのは神主の格好で掃き掃除を行っている想い人と同じ顔のガンダロ。つまりアヴェエくんである。

「そうじくそうじく楽しいなあつと、つて、げえつ遠坂?!」

何処からか響くジャンジャンと言う音と共に近づいて来る凧に恐れ慄くアヴェエくん。

「投降しなさい、まだ半殺しで勘弁してあげろあら、アヴェエくん。奇遇ね、こんな所で」

「ひいっ!和やかな挨拶に最後の慈悲が混じってるよお!こえーよ!」

笑顔の凧にアヴェエくんは五体投地を持って答える。現在地は神社であり、対象があかいあくまでなければ完璧な五体投地であった。

「こんな事を仕出かす奴なんて、どんな奴なのかしらと思つてたのだけど、探る手間が省けたわね」

「ちよ、ちよつと待て。俺はただの手伝いだ!アレを作つた奴は:」

「凧、騙されちゃ駄目だ。全部ソイツがやつたんだ!」

凧の笑顔に恐れを成して洗いざらい吐こうとしたアヴェエくんの言葉を、突如として現れた巫女服のキズナ（装備：銅鑼）が遮る。

凧は取り敢えず2人にガンダロを放つた。

「さて、コレはどう言う事か説明して貰いましょうか」

その後2人を制圧した凧は石畳に2人を正座させてから口を開いた。平日の午後で人が殆ど居なかったが、人払いが施されてしまった神社にその行いを止める人間は居なかった。

しかし、蛮行と言う点ではキズナも負けて居なかった。説明と言う言葉にばね仕掛けの様に立ち上がり（その際に放たれた凧のガンダロはアヴェエくんを盾にする事で防いだ）、説明を開始した。

「この御守り、正確には『満ちゆく半月』つて言う量産型礼装です!」

「魔術師として、量産と言う言葉がどれだけアウトか考えなさい」

凜の冷静なツツコミにも負けず、キズナはアヴェくんに御守りの在庫を持ってこさせる。1000個程のガラス玉の山が2山、女性用と男性用に分かれているのだろう。

キズナが嬉々として語るには、この礼装は月と言う概念を与えたガラス玉を魔術で2つに割り、元が1つの物は戻ろうと引かれ合う、月は満ちる物であると言った概念によって片割れを持つてる人物に興味を持つ、あるいは、何となく出向いた場所での遭遇率を上げると言う微妙たる効果の礼装らしい。

しかし、恋に恋する高校生にターゲットを絞った事で、学校内での遭遇率上昇は元々の遭遇率の高さから更に上がり、興味を持つ事で今まですれ違っても気付いてなかった相手を意識すると言うまるで恋の始まりの様な演出が自然と行われるようになる。極め付けが片割れを持つ人が運命の相手と言う売り文句である。今までの事で距離を詰めた相手が片割れ持ちと言うロマンスにより、錯覚は恋へと変わり、策謀魔術は成立する。

魔術の効果としてのおまじないでは無く、魔術効果が起こす錯覚を利用した商い。魔術師としてでは無く魔術使いの商売だ。呆れた凜が口を開こうとした時、悪魔共キズナ達が笑った。

「既に土郎にも御守りを渡してあります」

そして、此方がその片割れ。

目を口を、三日月型に歪めた様な笑みを浮かべながらキズナは言う。

凜の中で魔術師としてプライドと少女としての乙女心が天秤に掛けられた。

魔術師として、キズナの魔術師としての矜持が無い行いは八つ裂きにしても許される物だ。恋する乙女として、キズナの持つ御守りは素直に欲しい。好きな人と偶然会える確率が上がるとか、興味を持たれると言う事はあの女の子の髪型より野菜の良し悪しの方が目敏い様な唐変木に、髪型変えた？とか聞かれるかも知れないのだ。

乙女心に天秤が傾く、凜の名誉の為に言うが普段ならこんな事で揺

れる程凜は甘く無い、しかし、今回は初めての恋と言うイレギュラーに加え、婚約者とか言う反則的な立場に立っているキズナが想い人の姉のような人に妹分と認められると言う圧倒的優位に立たれているのだ。恋する女子高生としては焦らない方が可笑しいのだ。

凜が悪魔の誘惑に負け、手を伸ばしそうになった時、更に悪魔は笑みを深めた。

「えい」

「っ!?!」

悪魔は軽い掛け声と共に手に持っていた、士郎が持つ御守りの片割れを、御守りの山の中に放り投げ入れて混ぜてしまった。

「ちよつと!?!」

「うふふ、手が滑っちゃいましたー」

棒読みの台詞と共にキズナは御守り販売所の看板を指さす。

曰く、『恋守り1体1000円也』

「この山の中に、士郎の持つてる物の片割れが混じっちゃいました。」
さて、幾つお買い上げになりますか？

正に外道。恋心を食い物にするとはこの事である。

「此処にある御守りは1000と1。士郎の片割れの確率は10001分の1。さて、幾つお買い上げになりますか？」

「あ、悪魔じゃないの!?!」

「魔術師がそんなに軽く悪魔なんて言っちゃ駄目ですよ?」

狼狽する凜に対しあくまで笑みを崩さずにキズナは今回の仕掛けの名を告げる

「名付けて、キズナ式運命の人ガチャ」

「オーケー、我が来世。お前って最悪だな」

自身の前世に人類悪を見る様な目で見られてもキズナの笑みは崩れない。むしろ単体狙い最高レアリティが約0.1%の底有りなんて、良心的だとさえ信じ切っていた。

笑顔のまま迫るキズナ、圧倒される凜。

「因みに慎二も持っていて、その片割れも入ってます」

「本当に最悪だな、お前」

付け加えられた会話さえ、迷いを生む。

「さあ、全部買いますと言つてしまえば良い。たった100万ですよ。」

「か、か、」

アヴェくんが1体分はサービスするんだとか自身の来世の行いに現実逃避を行つている横で凜が気押され、そして吹っ切れた様に叫ぶ。

「買う訳ないでしょオ！そんな物!!」

具体的な金額によつて目覚めた魔術師としての矜持により、叫びと共に御守りの山に向かつて宝石を投擲、爆発させる。

御守りは碎け散り、事の元凶達も爆風に巻き込まれ転がり、折り重なつて倒れた。すぐさま起き上がろうとしたが、底知れない殺気により倒れた姿勢のまま釘付けにされる。

「さて、どうなるか分かるかしら？今回は手加減しないわよ？」

遠坂神社に悲鳴が響く。先程も言った様に遠坂神社にはそれを止める者は無い。

かくして、冬木は守られた。

凜が去つた後の遠坂神社、そこに転がる骸が2つ。

骸、キズナとアヴェくんはむくりと起き上がる。どちらも無表情であり、その顔は全く違うハズなのに、似通つて感じられた。

「流石遠坂さん、予定より2日早かった」

「いやあ、金絡みでのあの人の鼻は恐ろしいね」

無表情のまま、声のみはいつも通りなのが不気味さを助長する。

「でも、『欠けたる狂気』はもうばら撒かれた」

「申し訳無いけど、俺らつて所詮、ラスボスですから」

小さく響く嗤い声、その狂気を止め得る者は此処には居なかった。